

茨城県教育財団文化財調査報告第122集

一般県道石岡つくば線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

半田原遺跡

平成9年3月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第122集

# 一般県道石岡つくば線道路改良 工事地内埋蔵文化財調査報告書

はん だ ばら い せき  
半 田 原 遺 跡

平成 9 年 3 月

茨 城 県  
財団法人 茨城県教育財団



半田原遺跡出土ナイフ形石器



半田原遺跡の出土遺物

## 序

茨城県は、長期的な展望のもとに、県土の基盤整備を行ってまいります。道路網につきましても、県土60分構想の具体化や円滑な都市交通確保を図るなど、ゆとりある社会の実現をめざして快適な道路の整備を進めております。

一般県道石岡つくば線道路改良工事は、この整備事業に伴い、八郷町小桜地区の交通渋滞の緩和を目的として計画されたもので、その予定地内には埋蔵文化財の包蔵地である半田原遺跡が確認されております。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成7年10月から平成8年3月にかけて、一般県道石岡つくば線道路改良工事地内に所在する前記遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本書は、半田原遺跡の調査成果を取録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化の向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理作業を進めるにあたり、委託者である茨城県はもとより、茨城県教育委員会、八郷町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から、ご指導、ご協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成9年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 橋本 昌

# 例 言

1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成7年10月から平成8年3月まで発掘調査を実施した、新治郡八郷町大字半田字原752-2ほかに所在する半田原遺跡の発掘調査報告書である。

2 半田原遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事長	橋本 昌	平成7年4月～	
副理事長	小林 秀文	平成6年4月～平成8年3月	
	中島 弘光	平成7年4月～	
	齋藤 佳郎	平成8年4月～	
常務理事	一木 邦彦	平成7年4月～平成8年3月	
	梅澤 秀夫	平成8年4月～	
事務局 長	齋藤 紀彦	平成7年4月～平成8年3月	
	小林 隆郎	平成8年4月～	
埋蔵文化財部長	安藏 幸重	平成5年4月～平成8年3月	
	沼田 文夫	平成8年4月～	
埋蔵文化財部長代理	河野 佑司	平成6年4月～	
企画管理課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～平成8年3月
	課 長 代 理	小 幡 弘 明	平成8年4月～
	係 長	根 本 達 夫	平成7年4月～
	主任調査員	清 水 薫	平成8年4月～
		海老澤 稔	平成6年4月～平成8年3月
小 高 五十二	平成8年4月～		
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～平成8年3月
	主 査	河 崎 孝 典	平成8年4月～
		鈴 木 三 郎	平成7年4月～平成8年3月
	課 長 代 理	山 所 多 佳 男	平成8年4月～
		大 高 春 夫	平成7年4月～
	主 任 事	小 池 孝 孝	平成7年4月～
軍 司 浩 作		平成5年4月～平成8年3月	
柳 澤 松 雄	平成8年4月～		
調 査 一 課	課 長	安 藏 幸 重	平成7年4月～平成8年3月
	調 査 第 三 班 長	根 本 康 弘	平成7年4月～平成8年3月
	主 任 調 査 員	樫 村 宣 行	平成7年10月～平成8年3月 調査
	主 任 調 査 員	仙 波 亨	平成7年10月～平成8年3月 調査
整 理 課	課 長	山 本 静 男	平成7年4月～
	首 席 調 査 員	川 井 正 一	平成8年4月～
	主 任 調 査 員	仙 波 亨	平成8年10月～平成9年3月 整理・執筆・編集

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、旧石器時代遺物については、千葉県立中央博物館の橋本勝雄氏に御指導をいただいた。関東ローム層の分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析結果は、付章として報告する。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概略

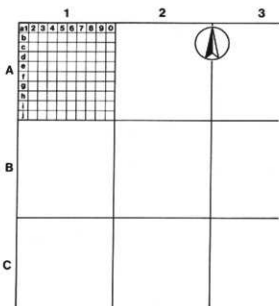
ふりがな	いっばんけんどういしおかつくばせんどうろかいりょうこうじちないまいぞうよんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	半田原遺跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第122集						
編著者名	仙波 亨						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587						
発行年月日	1997(平成9)年3月25日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はんたはらいせき 半田原遺跡	いばなりんにいりくせんやま 茨城県新治郡八郷町 大字半田字原752-2 ほか	08463-60	36度 12分 12秒	140度 12分 47秒	19951001 ～ 19960331	7.703㎡	一般県道石岡つくば線道路改良工事に伴う発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
半田原遺跡	集落跡	旧石器  縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代  中・近世	石器集中地点3か所  竪穴住居跡1軒 竪穴住居跡3軒 竪穴住居跡33軒 道路状遺構1条  地下式墳 1基 溝 2条 墓壇 10基 掘立柱建物跡 2棟 欄列 3か所 塚 1基 土坑 84基	ナイフ形石器、礫器、ハンマー、台石、礫石、石核、剥片  縄文式土器 土師器、須恵器 土師器、須恵器 灰釉陶器、礫石紡錘車、瓦  煙管、古銭	旧石器時代から平安時代の集落跡及び近世の墓跡等の複合遺跡である。 特に旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器、ハンマー、台石、礫石などの石器類の他に多量の剥片が出土している。遺物総数は1800点にもおよび、石器の製作跡と考えられる。		

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X軸=22,440m、Y軸=33,040mの交点を基準点(B2a<sub>1</sub>)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a<sub>1</sub>区」、「B2b<sub>2</sub>区」のように呼称した。



第1図 調査呼称方法概念図

2 遺構・遺物・土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構	住居跡-S1	土坑-SK	溝-SD	塚-TM	掘立柱建物跡-SB
	道路跡-SF	柵列-SA	炉穴(ファイアーピット)-FP	不明遺構-SX	
遺物	土器-P	土製品-DP	石製品-Q	金属製品・古銭-M	
土層	攪乱-K				

3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

● 土器	□ 石器・石製品	★ 土製品	△ 金属製品	▲ 拓本記録土器

4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺跡の全体図は縮尺200分の1、住居跡や土坑、不明遺構は60分の1に縮尺し掲載した。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に $S=1/4$ 等と表示した。
- (3) 「主軸方向」は長径方向とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例  $N-10^{\circ}-E$ 、 $N-10^{\circ}-W$ )。なお、[ ]を付したものは推定である。
- (4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高 F-体部径とし、単位はcmである。なお、現存値は( )で、推定値は[ ]を付して示した。

- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測（P）番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。



# 目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 遺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 旧石器時代	8
2 竪穴住居跡	21
(1) 縄文時代	21
(2) 古墳時代	22
(3) 奈良・平安時代	35
3 土坑	100
4 塚	124
5 溝	124
6 掘立柱建物跡	125
7 道路跡	127
8 その他の遺構および遺物	128
第4節 まとめ	139
付章	143

## 挿 図 目 次

第1図	調査区呼称方法概念図		第36図	第8号住居跡出土遺物実測図	48
第2図	半田原遺跡調査区割図	2	第37図	第9号住居跡実測図	50
第3図	周辺遺跡分布図	5	第38図	第9号住居跡出土遺物実測図	51
第4図	半田原遺跡基本土層図	7	第39図	第10号住居跡実測図	52
第5図	旧石器出土地点平面・土層図	9	第40図	第10号住居跡出土遺物実測図	52
第6図	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(1)	11	第41図	第11号住居跡実測図	54
第7図	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(2)	12	第42図	第11号住居跡出土遺物実測図	55
第8図	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(3)	13	第43図	第12号住居跡実測図	56
第9図	第1号石器集中地点出土遺物 実測図(4)	14	第44図	第12号住居跡出土遺物実測図	58
第10図	第2号石器集中地点出土遺物 実測図(1)	15	第45図	第13・15号住居跡電氣実測図	59
第11図	第2号石器集中地点出土遺物 実測図(2)	16	第46図	第13号住居跡出土遺物実測図	59
第12図	第2・3号石器集中地点出土遺物 実測図	17	第47図	第15号住居跡出土遺物実測図	61
第13図	第3号石器集中地点出土遺物 実測図	18	第48図	第16号住居跡実測図	62
第14図	トレンチ内出土遺物実測図	19	第49図	第16号住居跡出土遺物実測図	62
第15図	第37号住居跡・出土遺物実測図	22	第50図	第17号住居跡実測図	63
第16図	第4号住居跡実測図	23	第51図	第18号住居跡実測図	64
第17図	第4号住居跡出土遺物実測図(1)	25	第52図	第18号住居跡出土遺物実測図	65
第18図	第4号住居跡出土遺物実測図(2)	26	第53図	第19号住居跡実測図	66
第19図	第5号住居跡実測図	28	第54図	第19号住居跡出土遺物実測図	66
第20図	第5号住居跡出土遺物実測図(1)	29	第55図	第20号住居跡実測図	67
第21図	第5号住居跡出土遺物実測図(2)	30	第56図	第20号住居跡出土遺物実測図	67
第22図	第5号住居跡出土遺物実測図(3)	31	第57図	第21号住居跡実測図	68
第23図	第13・14・15号住居跡実測図	33	第58図	第21号住居跡出土遺物実測図	69
第24図	第14号住居跡出土遺物実測図	34	第59図	第22号住居跡実測図	70
第25図	第1号住居跡実測図	36	第60図	第22号住居跡出土遺物実測図	72
第26図	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	37	第61図	第23号住居跡実測図	74
第27図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)	38	第62図	第23号住居跡出土遺物実測図	75
第28図	第2号住居跡出土遺物実測図	39	第63図	第24号住居跡実測図	77
第29図	第2号住居跡出土遺物実測図	39	第64図	第24号住居跡出土遺物実測図	78
第30図	第3号住居跡実測図	41	第65図	第25号住居跡実測図	80
第31図	第6号住居跡実測図	42	第66図	第25号住居跡出土遺物実測図	81
第32図	第6号住居跡出土遺物実測図	42	第67図	第26号住居跡実測図	82
第33図	第7号住居跡実測図	45	第68図	第27号住居跡実測図	83
第34図	第7号住居跡出土遺物実測図	46	第69図	第27号住居跡出土遺物実測図	83
第35図	第8号住居跡実測図	47	第70図	第28号住居跡実測図	85
			第71図	第28号住居跡出土遺物実測図	85
			第72図	第29号住居跡実測図	86
			第73図	第30号住居跡実測図	87
			第74図	第30号住居跡出土遺物実測図	88
			第75図	第31号住居跡実測図	90
			第76図	第31号住居跡出土遺物実測図	91
			第77図	第32号住居跡実測図	93
			第78図	第33号住居跡実測図	93

第79图	第34号住居跡実測図	94	第95图	第96-A・B号土坑出土遺物実測図	119
第80图	第35号住居跡実測図	95	第96图	第1号塚実測図	124
第81图	第35号住居跡出土遺物実測図	96	第97图	第1・3号溝断面実測図	125
第82图	第36号住居跡実測図	97	第98图	第1号掘立柱建物跡実測図	126
第83图	第36号住居跡出土遺物実測図	98	第99图	第2号掘立柱建物跡実測図	126
第84图	土壇実測図	101	第100图	第1号道路跡・出土遺物実測図	128
第85图	土壇出土遺物実測・拓影図(1)	102	第101图	第1~6号炉穴実測・拓影図	129
第86图	土壇出土遺物実測・拓影図(2)	103	第102图	第1号柵列実測図	131
第87图	土坑実測図(1)	110	第103图	第2号柵列実測図	131
第88图	土坑実測図(2)	111	第104图	第3号柵列実測図	132
第89图	土坑実測図(3)	112	第105图	第1~3号不明遺構実測図	133
第90图	土坑実測図(4)	113	第106图	不明遺構出土遺物実測図	134
第91图	土坑実測図(5)	114	第107图	遺構外出土遺物実測図(1)	137
第92图	土坑実測図(6)	115	第108图	遺構外出土遺物実測図(2)	138
第93图	土坑実測図(7)	116	第109图	石器石材組成図	140
第94图	土坑出土遺物実測図	117			

## 表 目 次

表1	半田原遺跡周辺遺跡一覧表	6	表3	半田原遺跡土坑一覧表(第91~99号)	124
表2	半田原遺跡住居跡一覧表	99	表4	第1号石器集中地点石器等組成表	139
表3	半田原遺跡土坑一覧表(第1~43号)	122	表5	第2号石器集中地点石器等組成表	139
	半田原遺跡土坑一覧表(第44~90号)	123	表6	第3号石器集中地点石器等組成表	140

## 写真図版目次

P L 1	半田原遺跡全景, 第1・2・3号石器集中地点遺物出土状況	坑完掘, 第1・2号掘立柱建物跡完掘	
P L 2	第4・5・13・14・15号住居跡完掘	P L 10	第1・2・3号石器集中地点出土遺物
P L 3	第1・2号住居跡完掘, 第8号住居跡遺物出土状況	P L 11	第1・2・3号石器集中地点出土遺物
P L 4	第9・10・11号住居跡完掘	P L 12	第4・5号住居跡出土遺物
P L 5	第12・16号住居跡完掘, 第16号住居跡竈遺物出土状況	P L 13	第5号住居跡出土遺物
P L 6	第17・22号住居跡完掘, 第22号住居跡遺物出土状況	P L 14	第1・14号住居跡出土遺物
P L 7	第23・24・25号住居跡完掘	P L 15	第2・6・7号住居跡出土遺物
P L 8	第1・2号土坑完掘, 第7・8号土壇人骨出土状況, 第9号土壇完掘, 第10号土壇人骨出土状況, 第11・12号土壇完掘, 第13号土壇人骨出土状況	P L 16	第8・9号住居跡出土遺物
P L 9	第14・15号土壇人骨出土状況, 第16号土坑完掘, 第27号土坑遺物出土状況, 第35・96号土	P L 17	第10・11・12・13・15・16号住居跡出土遺物
		P L 18	第18・19・20・21・23号住居跡出土遺物
		P L 19	第22・23・24号住居跡出土遺物
		P L 20	第25・27・28・30号住居跡出土遺物
		P L 21	第5・14・18・30・31・35・36号住居跡出土遺物
		P L 22	第8・16・27・96号土坑・第1号道路跡・第2号不明遺構・遺構外出土遺物
		P L 23	第1・4・5・6・10・24・31・36号住居跡

第6・7・9・10・12・13・14・15号土坑出  
土遺物

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

茨城県では21世紀に向け、県土の基盤整備推進の方針のもと、県土60分構想の具体化や円滑な都市交通の確保を図るなど、ゆとりある社会の実現を目指して快適な道路の整備を進めている。一般県道石岡つくば線道路改良工事も、こういった趣旨に沿って計画されたものである。近年、県立フラワーパークの人気とともに小桜地区内の交通量も増加し、これに伴い当地区の道路改良工事は交通量の緩和のために計画されたものである。

平成6年6月24日、茨城県（土浦土木事務所）は、茨城県教育委員会に対し、一般県道石岡つくば線道路改良工事予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。茨城県教育委員会は、同年7月8日に現地踏査を実施し、工事予定地内に半田原遺跡が所在することを確認し、遺跡の取り扱いについて茨城県教育委員会と協議されたい旨回答した。そこで平成7年3月6日以降茨城県教育委員会は、茨城県（土浦土木事務所）と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、その結果、現状保存が困難であることから、同年3月8日、茨城県教育委員会から茨城県土木部宛に、半田原遺跡を記録保存とする旨を回答し、調査機関として、財団法人茨城県教育財団が紹介された。

茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成7年10月1日から平成8年3月31日にかけて、半田原遺跡の発掘調査を実施することとなった。

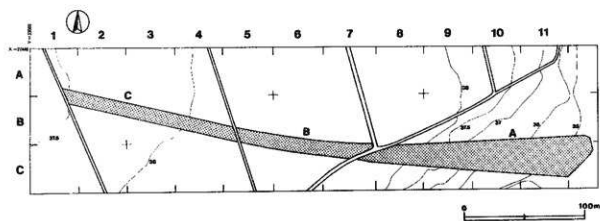
## 第2節 調査経過

半田原遺跡の発掘調査は、平成7年10月1日から平成8年3月31日までの6か月にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を月ごとに記述する。

- 10月 発掘調査を開始するため、現場倉庫の設置、調査器材の搬入等の諸準備とともに、調査区内の上物の除去を行った。16日に発掘調査の円滑な推進と安全を祈願して、献入れ式を挙行した。調査区が細長いので、調査区内を横切る道路によって3つの区に分け、東側から順にA区、B区、C区と呼称した。17日からA区にトレンチを設定し、遺構の確認調査を実施した。A区第1トレンチのローム層から、旧石器と思われる安山岩製の剥片類が出土した。
- 11月 6日から調査の効率を上げるため、重機を導入し、表土の除去を行い、平行して遺構の確認作業を実施した。旧石器集中地点3か所、竪穴住居跡37件、土坑94基、溝2条、地下式墳1基、か穴6基、道路状遺構1基、権列3か所、掘立柱建物跡2棟、塚1基を確認した。20日から遺構の本調査をA区から開始した。A区南東部はかなりの部分が攪乱されていた。
- 12月 住居跡20軒、土坑31基、道路状遺構、掘立柱建物跡1棟を調査、掘立柱建物跡の北西部を中心に6～15号の土壌を調査した。いずれの土壌中からも人骨が出土し、26日川藏寺で人骨の埋葬及び供養を実施した。
- 1月 5日から、B区に調査の主体を移す。22号住居跡から灰土の小形長頸歯及び須恵器甕G類が出土した。23日からC区の調査に入った。
- 2月 調査の主体を再びA区に戻し、旧石器集中地点の調査を開始した。遺物の集中地点が3か所あり、

これを第1・2・3の3つの集中地点として調査を進めた。剥片類が大多数を占め、石器の製作跡的な色彩が強いものと思われる。28日航空写真撮影を行った。

- 3月 引き続きA区旧石器集中地点の調査を継続する。台石、ハンマー、砥石等、石器製作に必要な道具類が出土した。16日に当遺跡の現地説明会を開催し、29日までに現地調査を終了した。



第2図 半田原遺跡調査区割図

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

半田原遺跡は、茨城県新治郡八郷町大字半田字原752-2ほかに所在している。八郷町は、茨城県のほぼ中央部、新治郡の北部に位置し、八溝山脈に属する筑波、足尾、加波、吾国、難台、愛宕の各連峰に囲まれ、概して起伏の多い盆地を呈する。東方は、東茨城郡の美野里町、石岡市、千代田町と接し、南は筑波山（標高876m）を隔てて筑波郡と境し、西は足尾山（628m）、加波山（709m）の峰つづきで真壁郡真壁町と接し、北は、吾国山（516m）、難台山（553m）、愛宕山（306m）を境として笠間市、岩間町、岩瀬町と接している。

八郷町の地形を概観すると、八溝山地に属する筑波山塊に周囲を囲まれ、町の中央部を恋瀬川がほぼ南北に流れる。筑波山塊は、八溝山地の南端部を占め、関東平野の中に半島状に突出し、柿岡盆地を囲み東列（吾国、難台の諸山）と西列（加波、足尾、筑波の諸山）に分かれ、南北23km、東西約15kmに及ぶ。柿岡を中心とした盆地の低地以外の大部分は洪積層で、現在は畑地や松林になっている。恋瀬川、及びその支流の低地は沖積世で一般に水田となっており、丘陵の間を樹枝状に伸びている。山地あり、台地あり、低地ありと変化にとんでいる地形である。

半田原遺跡は、筑波山（標高876m）から南東に延びる山塊に続く台地であり、恋瀬川と小桜川によって開析された北方に張り出す台地上に位置し、恋瀬川低地との比高は約25mとかなり高く、台地の標高は36m前後である。調査区の東側は恋瀬川の低地へ急激に落ち込んで崖状を呈する。東側の恋瀬川低地は水田となっている。調査前の現況は畑地及び栗畑であった。

#### 参考文献

日本地誌研究所 「日本地誌」 関東地方総論 1975年3月

大山年次峰須紀夫 「茨城の地学ガイド」 1991年7月

茨城県八郷町 「八郷町史」 1970年7月

### 第2節 歴史的環境

八郷町は、恋瀬川により開析された小支谷が複雑に入り込んで、高地、台地、低地と起伏に富んだ地形である。遺跡の立地もこれら小支谷をはさむ台地上に多く立地する傾向が見られる。

「茨城県遺跡地図」によると、町内には53の遺跡が確認されている。ここでは、当地域の主な遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡は、八郷町東部恋瀬川支流の南山崎地区で尖頭器が、恋瀬川上流の小見地区で石刃が確認されているのみである。発掘資料としては、当半田原遺跡<33>の発掘資料が唯一のものである。恋瀬川支流の起伏に富んだ地形を考えたとき、この遺跡の発見が契機となり今後数多く発見される可能性は非常に高いものと思われる。

縄文時代の遺跡としては、恋瀬川左岸の林地区下林遺跡<19>や足尾山麓の大塚地区じょうねり遺跡、吉生地区吉生遺跡<13>、大塚地区大塚遺跡、小山田地区小山田遺跡<3>、恋瀬川支流の南山崎遺跡から早・前期の土器が確認されている。中・後期の遺跡としては、恋瀬川上流の大塚地区板敷遺跡、柿岡盆地西端の吉生

地区宮下遺跡<12>、足尾山東麓の小山田地区高原遺跡<1>、盆地中央部の八郷高校内遺跡<11>、筋防遺跡<21>、筑波山東麓の国神遺跡<24>などがあげられる。

弥生時代の遺跡としては、恋瀬川流域に確認されている。左岸の台地上では佐久地区の佐自遺跡<9>、右岸の台地上では柿岡の中道遺跡<18>、鹿島台遺跡、金指遺跡などがあり、支流域では南山崎地区の南山崎遺跡、小屋地区の葦穂小学校内遺跡<24>、柿岡盆地西端の吉生遺跡などがあげられる。この内、後期十王式土器を出土する遺跡として、葦穂小学校遺跡、中道遺跡、南山崎遺跡、吉生遺跡等が知られている。

古墳時代になると、恋瀬川支流の台地上に数多くの古墳が形成されるようになる。大型の古墳を伴う大規模な古墳群は、丸山古墳群<10>、中戸古墳群、瓦釜古墳群、加生野古墳群<30>の4つが著名である。丸山古墳群<1>は、恋瀬川主流柿岡盆地北端に位置し、昭和27年明治大学後藤守一氏によって調査され、現在県指定史跡の丸山古墳をはじめ自塚古墳、二子塚古墳などの前方後円墳を主墳としている。中戸古墳群は、恋瀬川支流吾岡山南麓に位置し、前方後円墳2基をはじめとする概して小規模な古墳群である。瓦釜古墳群は恋瀬川支流で柿岡盆地北端に位置する。前方後円墳であるカプト塚を主墳として、円墳10余基から形成される古墳群である。加生野古墳群は恋瀬川支流の川又川右岸の台地上に位置し、古墳時代後半の群集墳である。古墳の数は100余基を数えるが閉塞その他によってかなりの数が壊されてしまっている。これ以外の古墳としては、毛無山古墳群<6>、栄松古墳群<7>、小倉古墳群<14>、下宿古墳群<17>、細谷古墳群<26>、御申塚古墳群<27>、阿弥陀ヶ古墳群<28>、原表古墳群<29>、月岡古墳群<31>、遠見塚古墳群<32>などが知られている。この時代の集落跡としては、柿岡中学校内遺跡や中道遺跡などがあげられる。

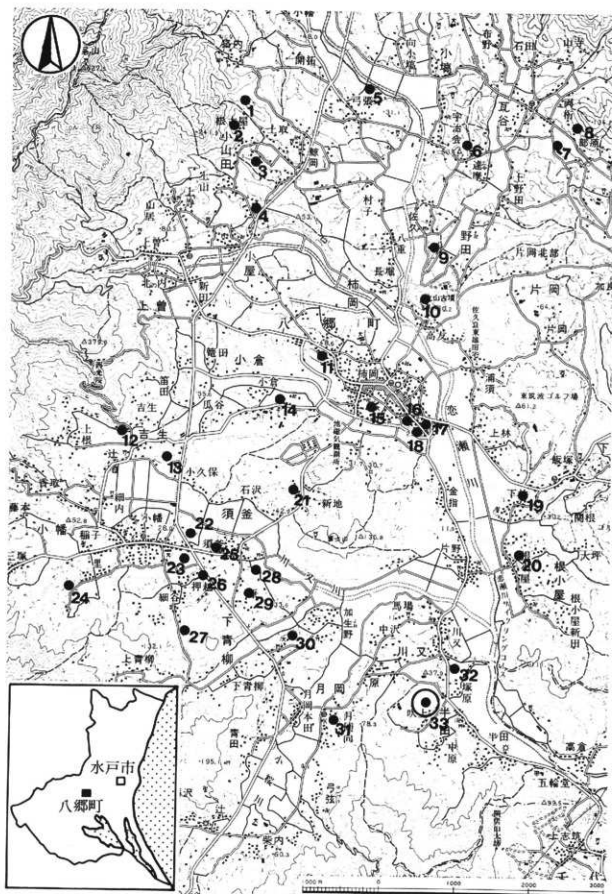
奈良・平安時代遺跡としては、恋瀬川流域の台地上を中心に発見されている。当時の時代背景を考えたとき、恋瀬川を主な流通路として、常陸国府（石岡市）との関連遺跡である瓦塚窯跡がある。瓦塚窯跡は恋瀬川支流の愛宕山南西斜面部に20基ほど存在する瓦窯である。うち2基が調査され、有段登窯であることが確認されている。瓦は軒丸瓦、軒平瓦、平瓦で四分寺出土瓦と同種、同範であり、官寺造営に当たり瓦類の供給地として重要な役割を果たした遺跡として、昭和12年茨城県史跡に指定されている。また、山岳寺院の色彩を帯びた山王台鹿寺跡や上山鹿寺などが筑波山東麓に発見されている。

中世の遺跡・史跡としては、恋瀬川右岸の柿岡下宿火葬墓跡<16>、小田城主八田知家の十男八田時知が開城した柿岡城跡<15>や上曾朝俊が築いた上曾孫壑城跡<2>、下川部政義が築いた権現山城跡、八代奨監が築いた片野城跡<20>などの他に、親聖聖人「関東教化中法難の遺跡」として知られる板敷山大覚寺などがあげられる。

#### 参考文献

- ・八郷町誌編さん委員会『八郷町誌』1970年7月
- ・茨城県史編さん原始古代史部会『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』1974年2月
- ・茨城県史編纂会『茨城県史 中世編』1976年3月
- ・茨城県史編さん第一部会『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』1979年3月
- ・茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』1990年3月
- ・茨城県史編纂会『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』1991年3月
- ・茨城県史編纂会『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』1995年3月





第3図 半田原遺跡周辺遺跡分布図

表1 半田原遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺跡名	県遺跡 番号	時 代						番 号	遺跡名	県遺跡 番号	時 代					
			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良・ 平安	鎌倉・ 室町				江 戸	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良・ 平安
1	高屋遺跡	1976		○					18	中道遺跡	1982				○		
2	上曾根環城跡	2002						○	19	下林遺跡	2859		○				
3	小山田遺跡	2864		○					20	片野城跡	2001						○
4	芦穂小学校内遺跡	1979			○				21	踊坊遺跡	4009		○				
5	備中遺跡	1980				○			22	大塚山古墳	1986				○		
6	毛無山古墳群	1992				○			23	下宿道跡	1981				○		
7	栄松古墳群	1987				○			24	国神道跡	1983		○				
8	瓦塚宮跡	2007					○		25	難訪山古墳	1995				○		
9	佐自遺跡	1973			○	○			26	細谷古墳群	1996				○		
10	丸山古墳群	2005				○			27	御中塚古墳群	1993				○		
11	八郷高校内遺跡	1977		○					28	阿弥陀ノ古墳群	1994				○		
12	宮下古墳群	1984				○			29	原表古墳群	1991				○		
13	占生遺跡	2862		○					30	加生野古墳群	1997				○		
14	小倉古墳群	1988				○			31	月岡古墳群	1990				○		
15	梅岡城跡	2000						○	32	遠貝塚古墳群	1989				○		
16	下宿火葬墓跡	1998						○	33	半田原遺跡		○	○		○	○	○
17	下宿古墳群	2006				○											

## 第3章 遺 跡

### 第1節 遺跡の概要

半田原遺跡は、新治郡八郷町の南寄りに位置し、町内を南北に流れる恋瀬川右岸のつくば山塊から北側に張り出した標高約36mの台地上に位置している。調査区は、南北10～33m、東西約320m、面積7,703㎡である。現況は、畑地である。調査区東側は恋瀬川の低地へ急激に落ち込んで崖状を呈している。

今回の調査によって確認された遺構は、旧石器時代の集中地点3か所、縄文時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡3軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡33軒、掘立柱建物跡2棟、土坑94基、地下式墳1基、溝2条、炉穴（ファイアーピット）6基、柵列3か所、道路跡1条、塚1基である。旧石器時代の集中地点は、調査区東側で確認され、竪穴住居跡は調査区の東部と西部に集中する傾向がある。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）で42箱出土している。旧石器時代の遺物としては、ナイフ形石器、礫器、ハンマー、台石、砥石、剥片などがあげられる。縄文時代の遺物としては、縄文土器、石鏃、打製石斧、磨石などがあげられる。古墳時代から奈良・平安時代の遺物としては、土器器須恵器の甕、壺、坏、甗、高坏のほか、紡錘車、灰釉陶器、刀子などがあげられる。中・近世の遺物としては、銅銭、鉄釘、煙管などがあげられる。

### 第2節 基本層序

調査区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った。（第4図）

第1層は、40cm前後の厚さの耕作土層であり、黒褐色をしている。

第2層は、40cm前後の厚さで、褐色をしたハードローム層である。

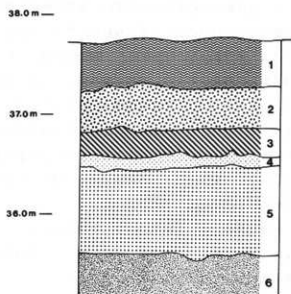
第3層は、25～30cmほどの厚さで、少量のガラス質微粒子を含有した褐色のハードローム層である。

第4層は、10～15cmの厚さで、少量の鹿沼バミスを含有した褐色のハードローム層である。

第5層は、90cm前後の厚さで、少量のガラス質微粒子を含有した褐色のハードローム層である。

第6層は、40cm前後の厚さで、少量のガラス質微粒子を含有した褐色の粘土質の土層である。

住居跡等の遺構は、第2層上面で確認した。旧石器は、第2～3層にかけて出土している。



第4図 半田原遺跡基本土層図

## 第3節 遺構と遺物

### 1 旧石器時代

当遺跡における旧石器時代の遺物は、A区東側（B11j<sub>1</sub>～C11d<sub>5</sub>区）から集中して出土している。中でも、特に1～3号の3つの地点に分かれて石器が集中している。いずれも第2層から第3層にかけての広義のハードローム層中からの出土である。3つの集中地点とその付近から出土した石器総数は、1,800点に及ぶ。石器の内訳は、ナイフ形石器6点、台形様石器2点、石斧2点、礫器16点、二次加工痕のある剥片21点、砥石3点、台石1点、ハンマー21点、石核206点、剥片1,576点である。以下、確認された石器集中地点とそこから出土した主な遺物について記載する。

#### 第1号石器集中地点（第5図）

位置 B11j<sub>1</sub>区からC11b<sub>3</sub>区。特に遺物の密集する地点は中央部である。

規模 東西約9.50m、南北9.00mの不整形の範囲に集中して出土している。

確認土層 第2層から第3層の範囲で集中して確認された。

遺物 本石器集中地点は剥片類を主体とし、ナイフ形石器4点、台形様石器1点、石斧1点、礫器2点、二次加工痕のある剥片10点、砥石2点、ハンマー3点、石核59点が出土している。

1～4はナイフ形石器である。1はホルンフェルスを石材としており、縦長剥片の打面を基部にあたるように用いて、両側縁の基部のみに加工が施されている。2は安山岩を石材としており、縦長剥片の打面を基部に用い、基部の両側縁に加工を施している。先端部は折れている。3はホルンフェルスを石材としており、縦長剥片の打面を基部に用い、基部両側面と片側縁の全辺に加工が施されている。4は安山岩を石材としており、縦長剥片の打面を基部に用い、基部と側縁先端部に加工が施されている。斜刃で切出形ナイフ形石器の範ちゅうにはいるものと考えられる。2・3は小型のナイフ形石器である。5は台形様石器で安山岩を石材とし、多方面からの打撃を加え、基部が両側縁と直行する。6は石斧でホルンフェルスを石材としており、両面からの調整によって、刃部を作り出している。刃部の反対側の端部は、厚みを持ち鈍い。7・8は礫器でどちらもホルンフェルスの円礫を石材としている。7は1方向からの打点を2か所に持ち、尖った刃部を作り出している。8は両側縁に打撃を加え刃部を作り出している。刃部は平坦である。9は二次加工痕のある剥片で、安山岩を石材として1方向から加えられた打撃で得られた剥片に異方向からの剝離が行われている。10・11は砥石でどちらも砂岩である。側面と表裏面が研磨されている。11は台石として用いられたと思われる凹痕を中央部に持つ。12～14はハンマーである。12は頁岩、13はチャート、14は流紋岩である。いずれも縦長の礫を用い、両端部に細かい打痕が集中している。15～19は石核である。15・16・19はホルンフェルス、17は安山岩、18は頁岩である。打面は一側縁に加えられているものが多く、礫皮面を残している。

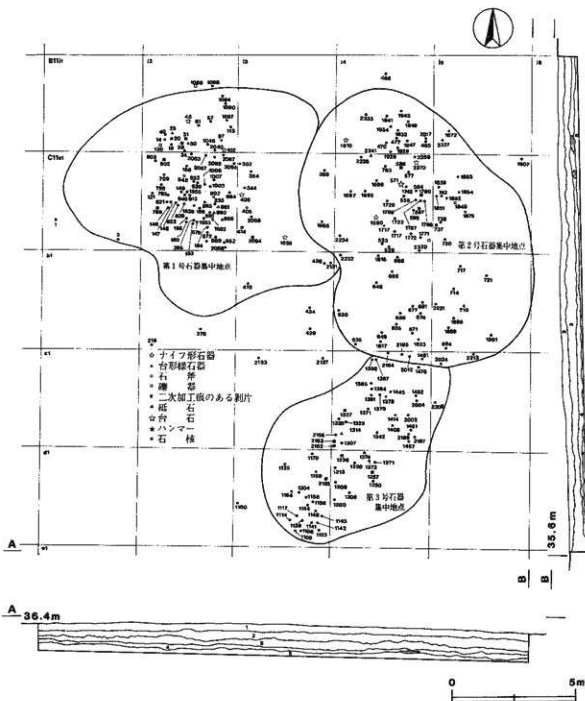
所見 本石器集中地点は剥片類が主体であり、ハンマー、砥石など特異な石器類が出土していることから、石器の製作肆的な色彩の濃いものと考えられる。

#### 第2号石器集中地点（第5図）

位置 B11j<sub>1</sub>からB11b<sub>3</sub>区。特に遺物の密集地点は中央部である。

規模 東西約9.50m、南北11.0mの不整形の範囲に集中して出土している。

確認土層 第2層から第3層の範囲で集中して確認された。



第5図 旧石器出土地点平面・土層図

遺物 本石器集中地点も剥片類を主体とし、ナイフ形石器2点、台形様石器1点、礫器2点、二次加工痕のある剥片5点、台石1点、ハンマー7点、石核77点が出土している。

20・21はナイフ形石器である。20は頁岩、21は安山岩を石材としている。20は縦長剥片の打面を基部にあたるように用いている。片側縁先端部にのみ加工が施されている。21は縦長剥片の打面を基部に用いている。斜刃で切出形ナイフ形石器の範疇にはいるものと思われる。22は台形様石器で、ホルンフェルスを石材とし、

素材の剥離面を利用した斜刃のタイプである。23・24は礫器でどちらもホルンフェルスの円礫を石材としている。23・24とも両側縁から打撃を加え刃部を作り出している。25は二次加工痕のある剥片で、頁岩を石材としている。厚めの剥片の表裏両面から剥離調整がなされている。26は台石で石材は砂岩である。表裏に凹の打撃痕が残る。側縁は研磨されており、砥石との複合石器である。27～29はハンマーである。27はチャート、28・29は砂岩を石材とし、縦長の小礫の端部に細かい打撃が集中している。30～33は石核である。30は安山岩、31・33はホルンフェルス、32はチャートを石材としている。30・32・33は礫皮面を残し、両側縁から打撃を加えている。31は多方面から打撃が加えられている。

所見 本石器集中地点は、第1号石器集中地点と同様、ハンマー、台石などが出土していることから石器の製作跡的な色彩が濃いものと考えられる。

### 第3号石器集中地点（第5図）

位置 C11cからC11d区。特に遺物の密集する地点は中央部から南部にかけてである。

規模 東西7.0m、南北7.5mの不整形の範囲に集中して出土している。

確認土層 第2層から第3層の範囲で集中して確認された。

遺物 本石器集中地点も剥片類を主体とし、二次加工痕のある剥片6点、砥石1点、ハンマー6点、石核47点が出土している。

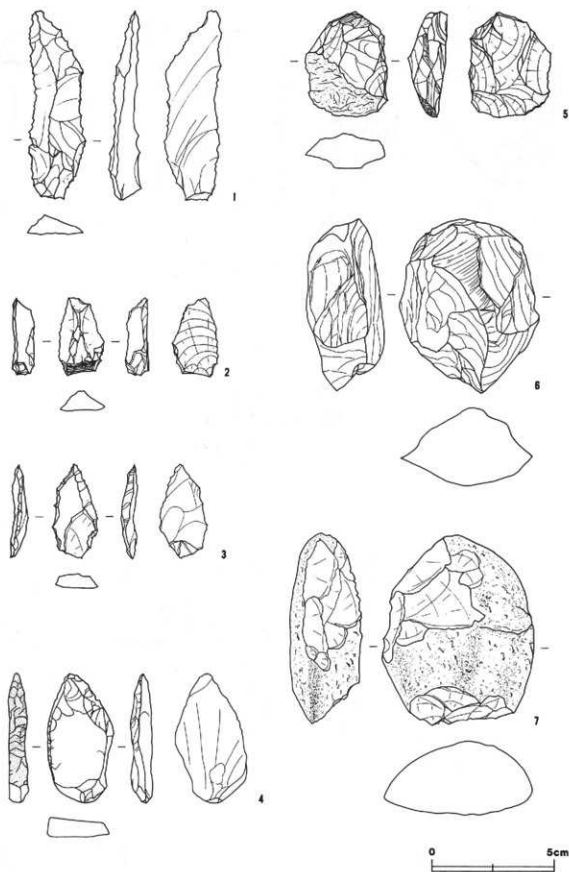
34・35は二次加工痕のある剥片で、34は安山岩を石材とし、礫皮面を残した剥片の一端に剥離が施されている。35はホルンフェルスを石材とし、1方向からの打撃で得られた剥片の一端に異方向の剥離が施されている。36は砥石で砂岩を石材としている。表裏、両側縁とも研磨された痕跡を残す。端部は1方向からの打撃を受け剥離している。37～40は石核である。37・40はホルンフェルス、38・39はトロトロ石を石材としている。37は礫皮面を残した残核である。多方向から打撃が加えられている。38は小礫の側縁端部に多方向から打撃が加えられている。39は小礫の端部に1方向からの打撃が加えられている。40は側縁の一端に両方向からの打撃が加えられている。

所見 本石器集中地点は第1、2石器集中地点と同様に石器の製作跡的な色彩の濃いものと考えられる。

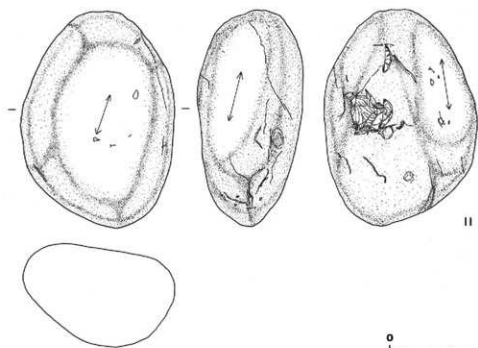
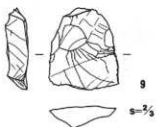
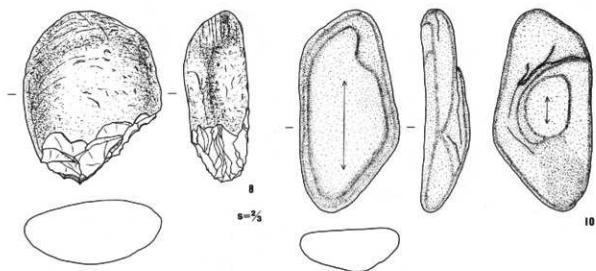
なお、第14図41～43は、トレンチ内から出土したものである。

旧石器出土遺物観察表

図版番号	種別	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第6図 1	ナイフ形石器	7.8	2.4	1.3	16.0	ホルンフェルス	45	Q52
第6図 2	ナイフ形石器	3.2	1.8	1.0	4.98	安 山 岩	406	Q53
第6図 3	ナイフ形石器	3.9	1.8	0.6	3.76	ホルンフェルス	1656	Q55
第6図 4	ナイフ形石器	5.3	2.6	0.9	15.0	安 山 岩	102	Q56
第6図 5	台形礫石器	4.3	3.4	1.6	23.0	安 山 岩	23	Q71
第6図 6	石 斧	7.1	5.7	3.2	136.0	ホルンフェルス	848	Q68
第6図 7	礫 器	7.8	6.1	2.9	168.0	ホルンフェルス	1066	Q65
第7図 8	礫 器	7.0	5.7	2.7	131.0	ホルンフェルス	130	Q64

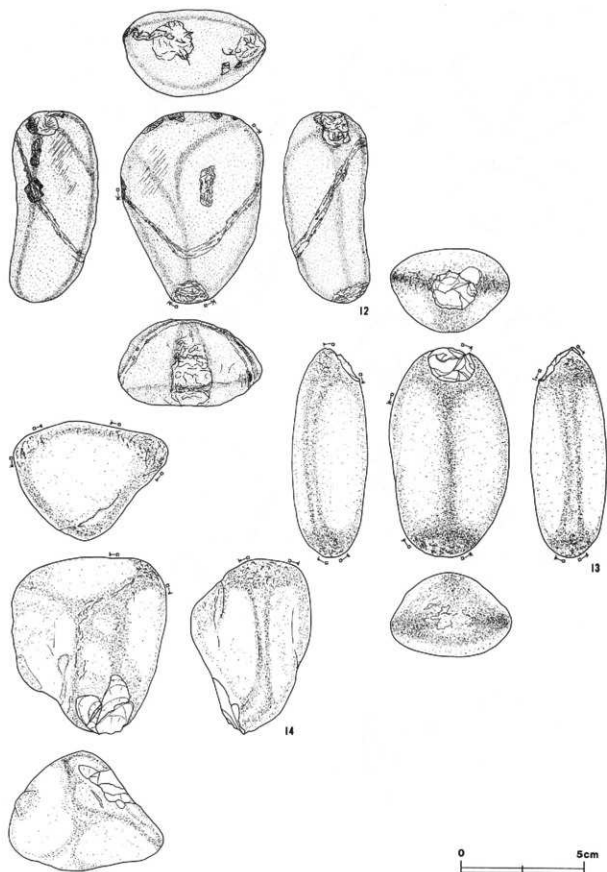


第6图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(1)

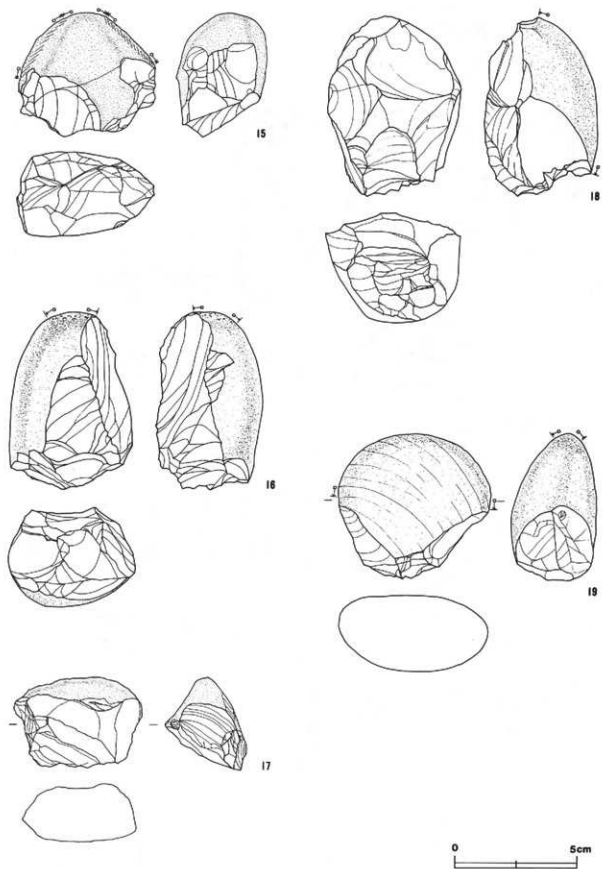


第7图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(2)

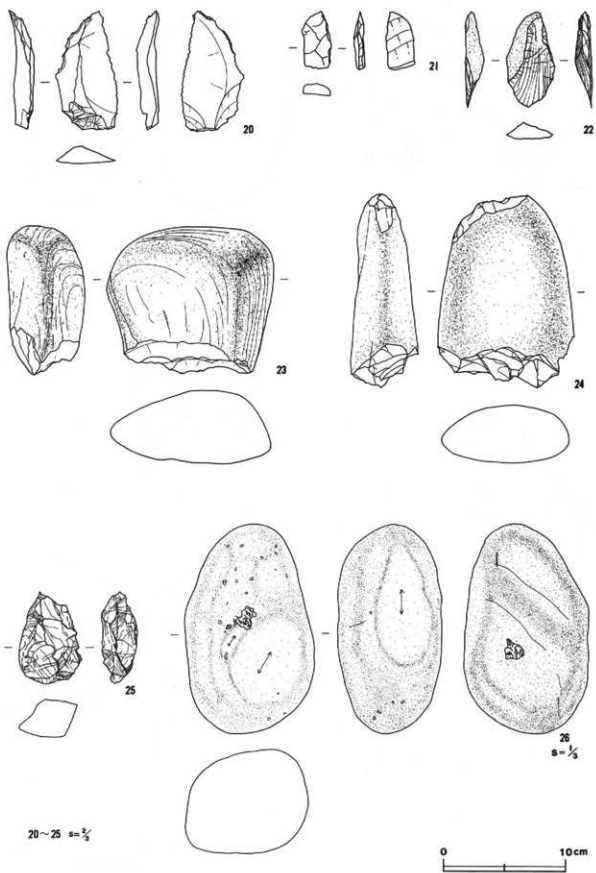




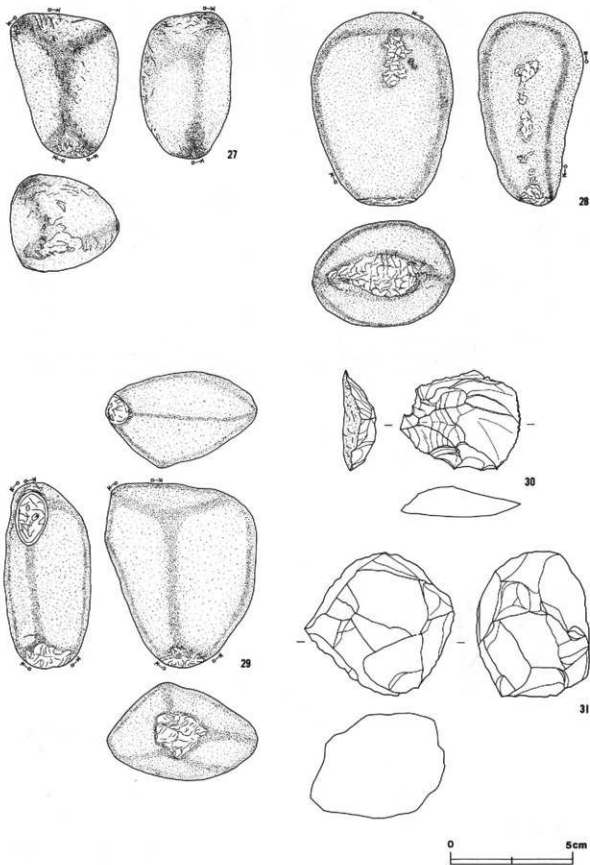
第 8 图 第 1 号石器集中地点出土遺物実測図(3)



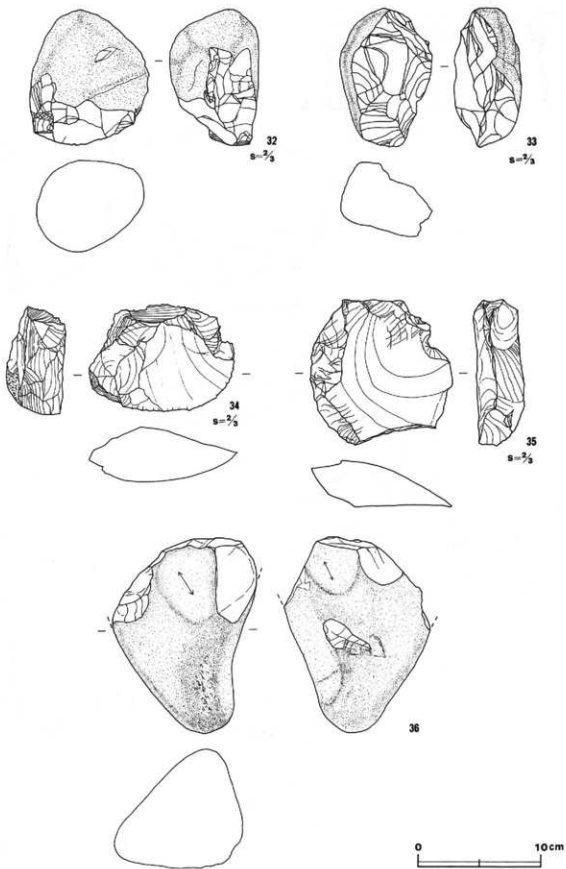
第9图 第1号石器集中地点出土物实测图(4)



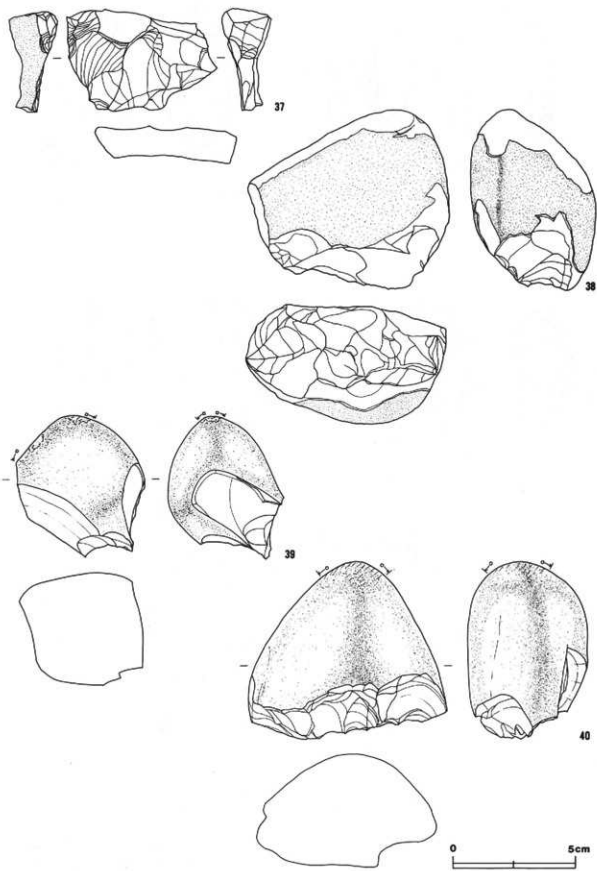
第10图 第2号石器集中地点出土遗物实测图(1)



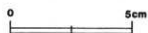
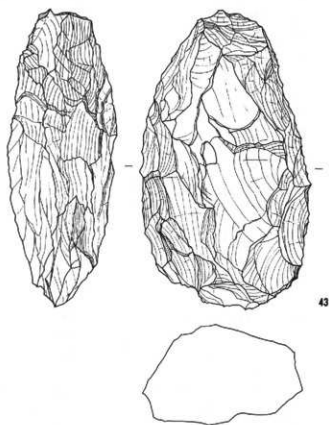
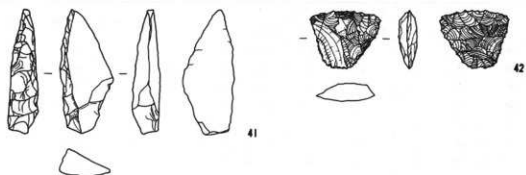
第11图 第2号石器集中地点出土物实测图(2)



第12图 第2·3号石器集中地点出土遗物实测图



第13图 第3号石器集中地点出土物实测图



第14図 トレンチ内出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第7図 9	二次加工のある射石	3.4	2.9	0.9	8.45	安山岩	1007	Q81
第7図 10	砥石	16.6	8.2	4.0	671.0	砂岩	981	Q73
第7図 11	砥石	17.7	12.6	8.7	2500.0	砂岩	880	Q75
第8図 12	ハンマー	7.8	5.8	3.6	213.0	頁岩	30	Q58
第8図 13	ハンマー	8.6	4.8	3.1	171.0	チャート	1087	Q63
第8図 14	ハンマー	7.2	6.3	5.0	234.0	流紋岩	14	Q61
第9図 15	鏝	5.1	5.6	3.7	118.0	ホルンフェルス	344	Q122

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第9図 16	鏝 器	7.3	5.1	4.4	210.0	ホルンフェルス	1506	Q121
第9図 17	鏝 器	3.8	5.2	3.3	61.0	安 山 岩	436	Q119
第9図 18	鏝 器	7.4	5.4	4.7	226.0	頁 岩	146	Q123
第9図 19	鏝 器	5.9	6.2	3.4	164.0	ホルンフェルス	1006	Q125
第10図 20	ナイフ形石器	4.9	2.5	0.9	8.25	頁 岩	2270	Q57
第10図 21	ナイフ形石器	2.4	1.2	0.5	1.44	安 山 岩	1910	Q54
第10図 22	台形鏝石器	3.9	1.9	0.7	4.58	ホルンフェルス	710	Q72
第10図 23	鏝 器	6.1	6.7	3.2	172.0	ホルンフェルス	1852	Q66
第10図 24	鏝 器	8.0	5.7	2.9	149.0	ホルンフェルス	2316	Q67
第10図 25	二次加工の石器	3.8	2.5	1.45	13.0	頁 岩	61	Q79
第10図 26	台 石	17.1	10.6	8.6	2240.0	砂 岩	571	Q76
第11図 27	ハンマー	6.0	4.4	3.6	132.0	チャート	1717	Q59
第11図 28	ハンマー	7.9	5.8	4.4	264.0	砂 岩	1722	Q60
第11図 29	ハンマー	7.6	6.1	3.5	208.0	砂 岩	1590	Q62
第11図 30	二次加工の石器	4.1	4.9	1.4	24.0	安 山 岩	485	Q80
第11図 31	鏝 器	5.9	6.1	4.6	197.0	ホルンフェルス	2269	Q128
第12図 32	鏝 器	5.6	4.9	3.7	119.0	チャート	1787	Q118
第12図 33	鏝 器	5.7	3.8	2.7	68.0	ホルンフェルス	2241	Q117
第12図 34	二次加工の石器	4.5	6.0	2.5	67.0	安 山 岩	20	Q77
第12図 35	二次加工の石器	6.0	5.8	2.1	78.0	ホルンフェルス	2024	Q78
第12図 36	砥 石	( 16.0 )	( 11.8 )	( 12.0 )	1890.0	砂 岩	1314	Q74
第13図 37	鏝 器	4.2	6.1	2.0	51.0	ホルンフェルス	1133	Q120
第13図 38	鏝 器	7.4	8.2	5.2	339.0	トロトロ石	1125	Q124
第13図 39	鏝 器	3.8	5.2	4.7	137.0	トロトロ石	1141	Q126
第14図 40	鏝 器	7.2	8.1	5.0	332.0	ホルンフェルス	1106	Q127
第14図 41	ナイフ形石器	5.1	2.1	1.1	11.0	安 山 岩	トレンチ	Q51
第14図 42	台形鏝石器	2.4	2.9	0.8	4.42	風 礫 石	トレンチ	Q70
第14図 43	石 斧	12.2	7.0	4.5	423.0	—	トレンチ	Q69
PL 10	石 核	4.88	4.65	2.75	55.0	安 山 岩		Q82, 写真のみ掲載
PL 10	石 核	4.99	5.26	2.44	49.0	安 山 岩		Q83, 写真のみ掲載
PL 10	石 核	7.32	6.61	3.31	313.0	ホルンフェルス		Q84, 写真のみ掲載
PL 10	石 核	5.04	5.36	2.89	83.0	ホルンフェルス		Q85, 写真のみ掲載
PL 10	石 核	7.5	6.73	3.2	145.0	ホルンフェルス		Q86, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	6.15	6.84	1.79	70.0	ホルンフェルス		Q87, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	6.26	2.0	0.95	13.0	安 山 岩		Q88, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	5.6	3.0	0.84	16.0	安 山 岩		Q89, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	6.0	5.9	0.9	33.0	安 山 岩		Q90, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	6.81	4.8	1.23	41.0	ホルンフェルス		Q91, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	4.42	3.24	0.68	9.75	安 山 岩		Q92, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	3.6	3.38	1.04	3.45	頁 岩		Q93, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	4.31	3.22	0.9	10.0	頁 岩		Q94, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	4.51	3.12	0.7	12.0	ホルンフェルス		Q95, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	4.53	3.32	1.31	16.0	安 山 岩		Q96, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	5.91	4.41	0.96	29.0	安 山 岩		Q97, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	7.25	5.24	1.22	52.0	安 山 岩		Q98, 写真のみ掲載
PL 10	剥 片	6.5	2.95	0.93	18.0	ホルンフェルス		Q99, 写真のみ掲載



図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
PL 10	剥片	5.43	4.02	1.12	23.0	ホルンフェルス		Q100. 写真のみ掲載
PL 10	剥片	5.77	2.8	1.42	27.0	安山岩		Q101. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	5.9	2.04	0.64	8.35	安山岩		Q102. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	5.58	2.39	0.75	8.05	チャート		Q103. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	5.79	2.53	0.81	14.0	安山岩		Q104. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	5.06	2.78	0.73	10.25	頁岩		Q105. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	7.20	3.92	1.45	32.0	安山岩		Q106. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	4.56	5.0	1.29	35.0	安山岩		Q107. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	5.12	2.01	0.56	4.8	メノウ		Q109. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	3.49	2.34	0.73	4.95	メノウ		Q110. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	4.92	2.1	0.89	7.80	チャート		Q111. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	5.64	1.35	0.78	6.0	安山岩		Q112. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	3.86	2.15	0.8	5.95	安山岩		Q113. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	6.33	2.97	1.5	23.0	頁岩		Q114. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	5.04	3.7	0.91	16.0	安山岩		Q115. 写真のみ掲載
PL 11	剥片	5.46	4.87	0.8	23.0	安山岩		Q116. 写真のみ掲載

## 2 竪穴住居跡

当遺跡からは、縄文時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡3軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡33軒が検出された。以下、検出された竪穴住居跡と、そこから出土した主な遺物について記載する。

### (1) 縄文時代の住居跡

#### 第37号住居跡 (第15図)

位置 A区西部, C8b区

規模と平面形 ビットの配列から、長さ [4.80] m, 短径 [3.80] mの楕円形と考えられる。

長軸方向 N-98°-W

床 ほぼ平坦で、全体的に軟弱である。

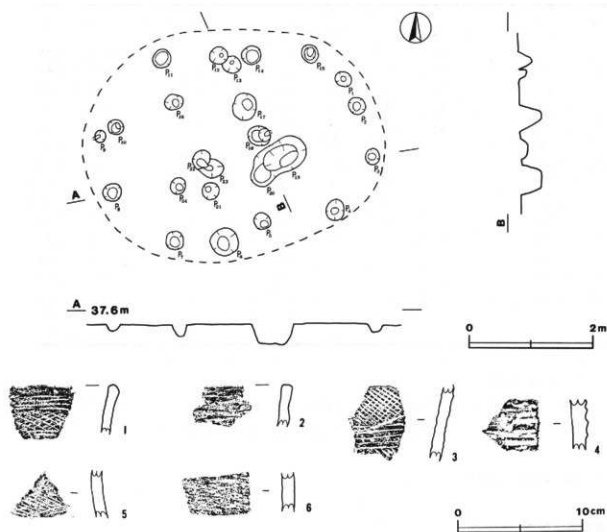
ビット 24か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>24</sub>)。P<sub>16</sub>は径約30cmのほぼ円形で、深さ15cmである。P<sub>17</sub>は径約40cmのほぼ円形で、深さ36cmである。P<sub>20</sub>はP<sub>19</sub>と重複しているが、径約35cmのほぼ円形を呈し、深さ36cmである。P<sub>24</sub>は径約30cmのほぼ円形で、深さ20cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P<sub>1</sub>~P<sub>12</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>15</sub>・P<sub>18</sub>・P<sub>19</sub>・P<sub>21</sub>~P<sub>23</sub>は補助柱穴と考えられる。

覆土 遺構確認時に縄文土器が出土し、精査したところ楕円形のプランが確認されたもので、覆土は存在しなかった。

遺物 床面から縄文土器片が少量出土している。土器は無文のものが中心である。1・2は口縁部片である。

1は口縁部に沈線による平行線文と格子目文を施している。口唇は、カマボコ状に整形されている。2は棒状工具による横ナデが施され、口唇は角頭状に整形されている。3~6は胴部片である。3は格子目文と平行線文が配されている。4は棒状工具で横位の太沈線が施されている。5は平行線と斜行沈線が施されている。6は無文土器で、横位のナデが行われている。

所見 本跡は、壁、か跡等を確認することができなかったが、柱穴の配列および遺物の散布状態から住居跡と



第15図 第37号住居跡・出土遺物実測図

判断した。時期は、縄文時代早期（三戸式期）と考えられる。

## (2) 古墳時代の住居跡

### 第4号住居跡（第16図）

位置 A区東部，C11c区

重複関係 本跡の北西部で第3号溝と重複している。本跡を第3号溝が掘り込んでいるので、本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.30m，短軸5.20mの方形である。

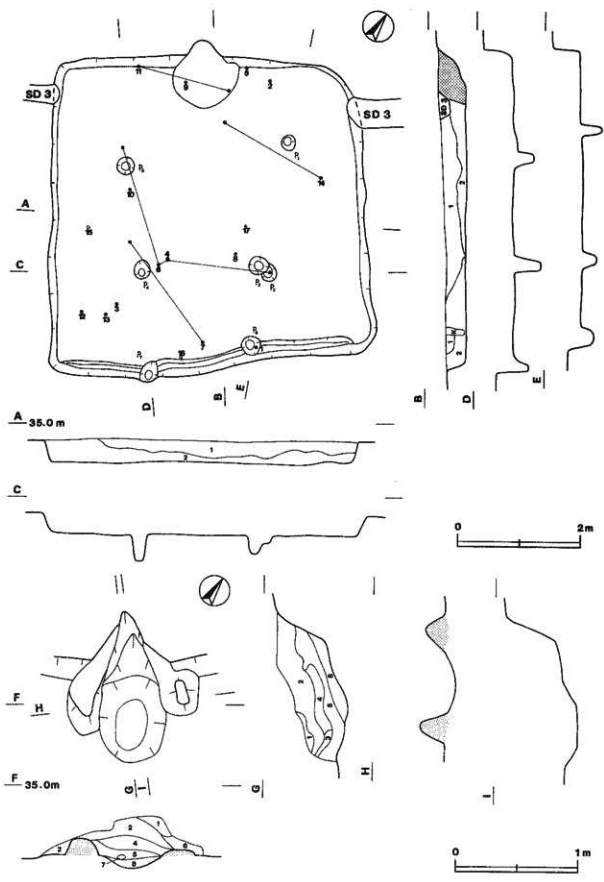
主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は35～45cmであり，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南壁下のみに見られる。上幅25～30cm，深さ15cm程度で，断面は「U」字状である。

床 平坦であり，特に竈部から南壁にかけての中央部が踏み固められている。

ピット 7か所（P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>）。P<sub>1</sub>は径15cmのほぼ円形で，深さ35cmである。P<sub>2</sub>は径30cmのほぼ円形で，深さ25cmである。P<sub>3</sub>はP<sub>2</sub>を切って掘られている。径30cmのほぼ円形で，深さ30cmである。P<sub>4</sub>は径30cmのほ



第16图 第4号住居跡実測图

ほぼ円形であり、深さ45cmである。P<sub>2</sub>は径30cmのほぼ円形で、深さ35cmである。P<sub>6</sub>は径35cmのほぼ円形で深さ20cmである。P<sub>7</sub>は径30cmのほぼ円形で、深さ30cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>は主柱穴と考えられる。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は出入り口関係の柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部を壁外に50cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ125cm、幅105cmで、袖部の遺存状態が良い。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は火床部から外傾して立ち上がっている。覆土は8層からなる。

#### 覆土層解説

- |                                |                           |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1 暗灰黄色 焼土粒子微量、山砂質              | 6 赤褐色 焼土粒子少量、焼土中ブロック微量、砂質 |
| 2 におい黄褐色 黒色土小ブロック・焼土粒子微量       | 7 におい橙色 焼土粒子少量、砂質を帯びる     |
| 3 黒褐色 焼土粒子微量、砂質を帯びる            | 8 におい赤褐色 焼土粒子多量、砂質を帯びる    |
| 4 におい黄褐色 焼土中ブロック少量、砂質を帯びる      |                           |
| 5 におい赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量、砂質を帯びる |                           |

覆土 2層からなり、自然堆積とみられる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 黒色土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 灰褐色 焼土粒子微量

遺物 土師器片958点、須恵器片23点、土製支脚1点、羽口1点、手捏土器4点、石製紡錘車1点、鉄製品2点、石34点が出土している。1の土師器片は、P<sub>6</sub>上部から出土している。2の土師器片は、竈部東側から、3の土師器片は南側コーナー付近から出土している。10の土師器片はP<sub>5</sub>の南側から押しつぶされたような状態で一括出土している。14の須恵器平瓶は北東部覆土下層から、16の紡錘車は南壁中央部下からそれぞれ出土している。12・13の手捏土器は、南西部覆土中・下層から出土している。

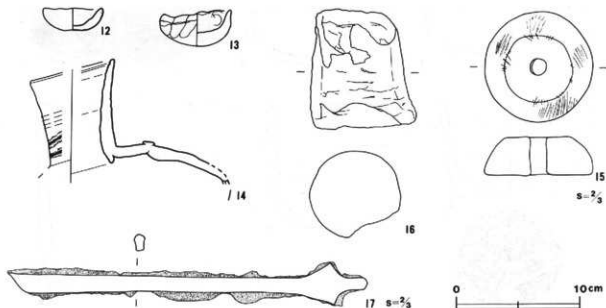
所見 本跡は、古墳時代後期（7世紀後半）の住居跡である。

### 第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	環 土師器	A 14.0 B 5.1	丸底。底部はやや厚く、体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内彎する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面、底部ヘラ削り。	長石・雲母 におい黄褐色 普通	P15 90% P <sub>6</sub> 覆土
2	環 土師器	A 11.2 B 4.7	丸底。体部は丸味を持って立ち上がる。口縁との境に強い段を持ち、口縁はやや内彎しながら立ち上がる。	内・外面ナデ。	スコリア・雲母 におい黄褐色 普通	P16 85% 床面
3	環 土師器	A [15.2] B (4.6)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直線的に立ち上がり、強い段を持つ。	口縁部内・外面、体部内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。	石英・雲母 灰黄褐色 普通	P17 20% 覆土下層 内外黒色処理
4	鉢 土師器	A 12.3 B 8.0 C 8.2	体部は直線的に立ち上がる。	体部内・外面、底部内面ヘラ磨き。 底部本葉痕	長石・石英・雲母 におい黄褐色 普通	P20 95% 床面
5	鉢 土師器	A 11.0 B 10.2 C 8.6	丸底気味。体部は直線的に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り、体部内面に輪痕 風が残る。	長石・石英 褐色 不良	P21 40% 竈右袖部
6	壺 土師器	A [18.4] B (15.6)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面指 頭印痕。	長石・石英 暗灰色 普通	P22 30% 床面
7	壺 土師器	A [19.8] B (10.5)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は強く外反し、肩部はつまみあげられる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 褐色 普通	P23 10% 覆土中層
8	壺 土師器	A [21.6] B (10.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外へ大きく折れ、肩部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 におい黄褐色 普通	P24 5% 床面



第17图 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第18図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 9	壺 土師器	A [ 14.8 ] B ( 6.7 )	体部から口縁部の破片。体部はなだらかに立ち上がる。口縁部は外反し、頸部直下に沈線が通る。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 普通	P25 10% 臈部
10	瓶 土師器	A 24.4 B ( 26.2 )	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。底部欠損。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き、体部内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母 小礫 にふい黄褐色 普通	P28 80% 床面
11	瓶 土師器	A 21.4 B 20.1	体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。無底式。	口縁部内面横ナデ。口縁部外面、体部内・外面縦位のヘラ磨き。	長石・石英・雲母 褐色 良好	P29 50% 臈部
第18図 12	手捏土器 土師器	A 4.8 B 1.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面指頭圧痕。底部ヘラ削り。	長石・石英・雲母 にふい褐色 不良	P31 100% 覆土中層
13	手捏土器 土師器	A 5.3 B 3.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面指頭圧痕。	雲母 にふい褐色 不良	P32 95% 覆土下層
14	平須 直須器	A [ 6.8 ] B ( 11.2 )	口縁部、体部片。天井部は丸味をもち、外周寄りに口頸部が付く。頂部にボタン状の貼り付け。頸部は直線的に立ち上がり、中位に二条の沈線が通る。口縁部直下に一条の沈線。	口縁部、体部内・外面クロコナデ。天井部を粘土板で塞いでいる。天井部に自然釉。	長石 自然釉部暗オリーブ 色 良好	P35 20% 覆土下層

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		最大幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第18図15	紡錘車	4.4	1.6	0.7	36.0	粘板岩	床面	Q2

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第18図16	支脚	( 9.8 )	7.3	( 6.9 )	451.0	覆土中層	DP1

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第18図17	鉄鏝	14.4	1.8	0.4	13.0	M4 覆土下層

## 第5号住居跡（第19図）

位置 A区東部, B12j区

規模と平面形 本跡は、北側が調査区域外にあり、東、南、西側が擾乱を受けているため、規模と平面形は不明である。

主軸方向 [N-57°-W]

壁 竈右袖部で一部残存している壁面から判断すると、ほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。

床 ほぼ平坦であり、特に竈前部が固く踏み固められている。

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は一部が調査区域外にかかっているため正確に分からないが、おおよそ径60×40cmの楕円形で、深さ35cmである。P<sub>2</sub>は径50×35cmで、深さ30cmである。P<sub>3</sub>は径40×35cmで、深さ35cmである。全体のプランが明確ではないが、P<sub>1</sub>は主柱穴、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は補助柱穴と考えられる。

竈 西壁を壁外に40cmほど掘り込み、山砂や粘土で構築されている。規模は、長さ130cm、幅110cmであり、遺存状態は良い。火床は床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は、火床部から外傾して立ち上がっている。覆土は7層からなる。

### 竈土層解説

- |                               |                               |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 におい黄褐色 焼土ブロック・焼土粒子微量、山砂質    | 4 明 赤 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量、砂質    |
| 2 灰 褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量、山砂質 | 5 明 赤 褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量、砂質    |
| 3 明 赤 褐色 焼土粒子少量、砂質            | 6 におい赤褐色 焼土粒子中量、砂質            |
|                               | 7 明 赤 褐色 焼土ブロックを主体とし、砂質を帯びている |

覆土 8層からなり、自然堆積である。

### 土層解説

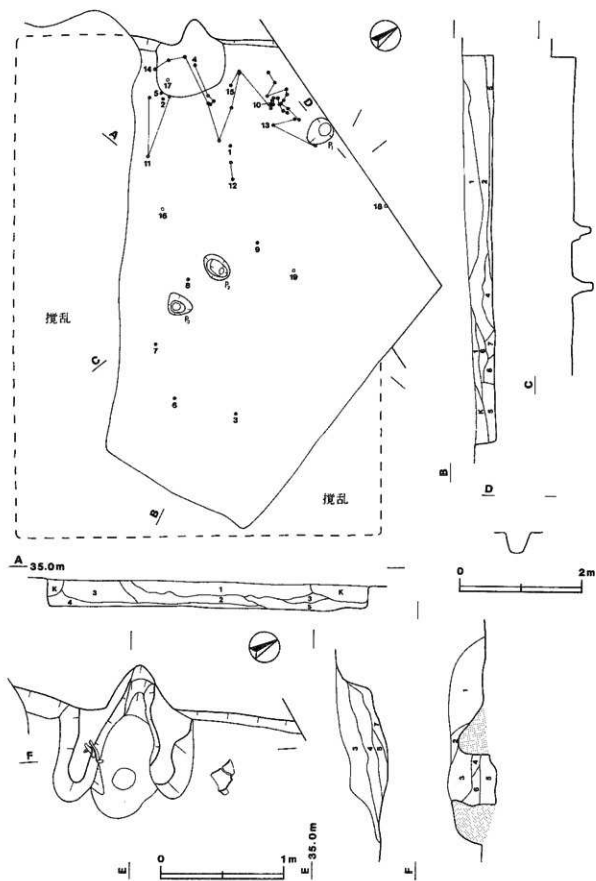
- |                                   |                                     |
|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 1 灰 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・黒色小ブロック微量     | 6 におい褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量      |
| 2 褐色 ローム小ブロック少量、黒色小ブロック・焼土小ブロック微量 | 7 灰 褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量       |
| 3 におい褐色 炭化粒少量、焼土中ブロック微量           | 8 灰 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 |
| 4 におい褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土粒子少量       |                                     |
| 5 灰 褐色 ローム粒子少量、焼土中ブロック・炭化粒子微量     |                                     |

遺物 土師器片1,612点、須恵器片80点、土製支脚1点、滑石製勾玉1点、大型の砥石1点が出土している。1・3・4・6の土師器環、8の土師器手捏土器、15の土師器甕、19の砥石は床面から出土している。14の土師器甕は竈部から出土している。2の土師器環、12の土師器甕、18の滑石製勾玉は覆土下層から、9の手捏土器は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、古墳時代後期（6世紀後半）の住居跡である。

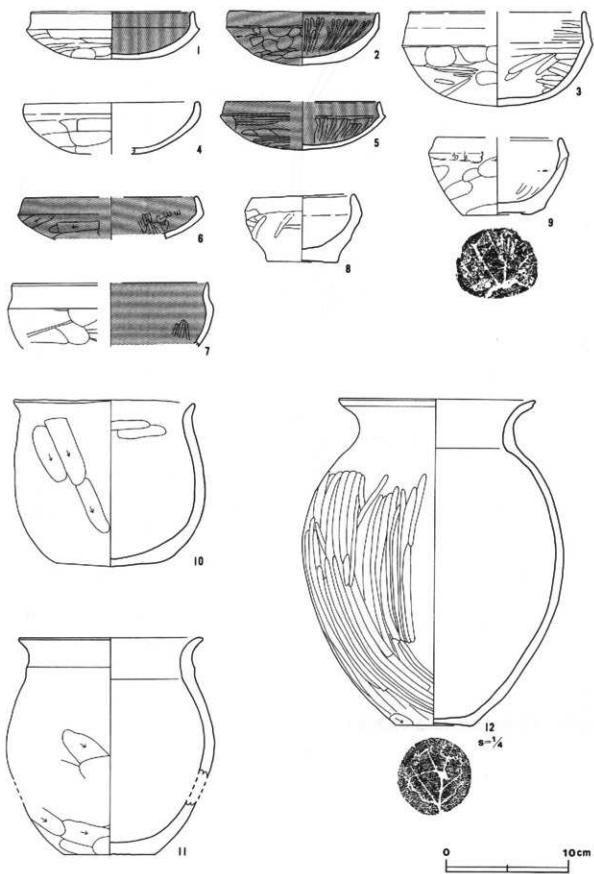
## 第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測例 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第200図 1	土師器 環	A 13.3	平底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内面ナデ。体部外面へウ磨り後、へウ磨き。	長石・石英・褐色 普通	P36 95% 床面 内外面黒色処理
		B 3.9				
2	土師器 環	A 12.2	丸底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内面へウ磨き。体部外面へウ磨り。	長石・石英・雲母 スコリア におい褐色 普通	P37 90% 覆土下層 内外面黒色処理
		B 4.4				
3	土師器 環	A {14.4}	丸底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内湾気味に直立する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内面へウ磨き。体部外面へウ磨り後、へウ磨き。	長石・雲母 スコリア におい黄褐色 普通	P38 70% 床面
		B 7.7				
4	土師器 甕	A 14.2	口縁部、体部一部欠損。丸底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内面ナデ、外面へウ磨り。	スコリア 褐色 普通	P39 50% 床面
		B ( 4.2)				

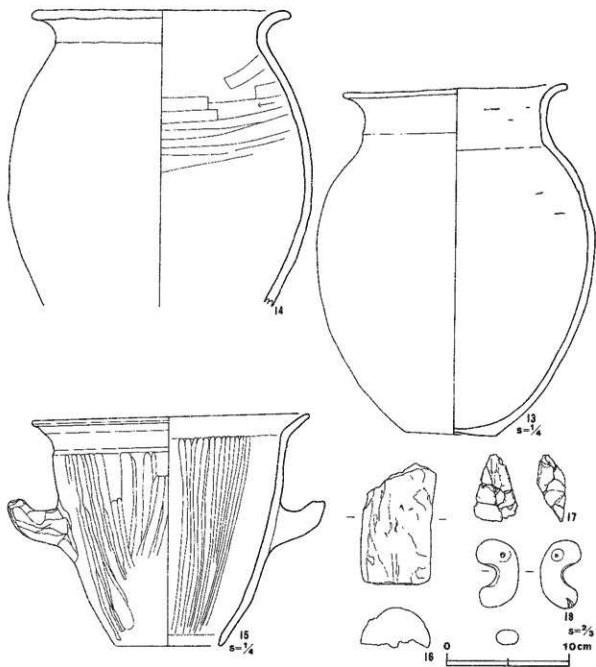


第19图 第5号住居跡実測图

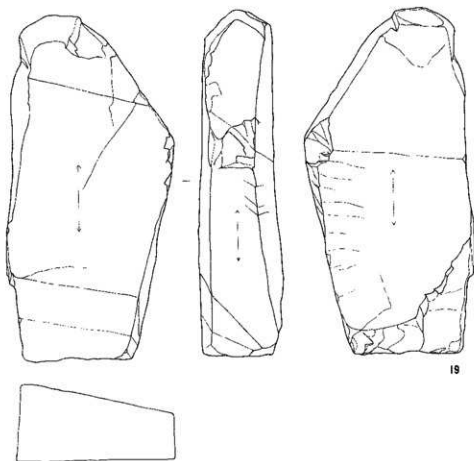




第20图 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第21图 第5号住居跡出土遺物実測図(2)



19

0 10cm

第22図 第5号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 5	坏 土器器	A [12.6] B 4.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内彎気味に直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面へラ削り後、へラ磨き。	長石・石英・雲母 におい黄褐色 普通	P40 40% 覆土中層 内外面黒色処理
6	坏 土器器	A [14.0] B (3.5)	口縁部、体部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	長石・雲母 オリーブ黒色 普通	P42 20% 床面 内外面黒色処理
7	坏 土器器	A [15.8] B (5.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面へラ削り後、へラ磨き。	長石・石英 におい橙黄色 普通	P43 20% 覆土下層 内面黒色処理
8	手捏土器 土器器	A 8.4 B 5.6 C 5.8	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラナデ。	長石・石英・雲母 におい橙黄色 普通	P44 100% 床面
9	手捏土器 土器器	A [10.2] B 6.4 C 5.6	口縁部、体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラナデ、外側指摺り痕。底部木葉成。	長石・雲母 におい黄褐色 普通	P45 50% 覆土中層
10	小形 土器器	A 14.7 B 13.6 C 8.6	口縁部、体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部横ナデ。体部内・外面へラ削り。	長石・石英・雲母 におい赤褐色 普通	P46 70% 床面
11	糜 土器器	A 14.8 B [17.7] C 7.4	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持ち、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母 におい橙黄色 普通	P47 40% 覆土中層

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第20図 12	壺 土師器	A 21.2 B 35.2 C 8.2	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き、内面ナデ。	長石・石英・雲母 において褐色 普通	P48 90% 覆土下層
第21図 13	壺 土師器	A 24.4 B 38.0 C 9.4	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨り、内面ナデ。	長石・石英・雲母 において褐色 普通	P49 90% 覆土下層
14	壺 土師器	A 20.4 B (24.3)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラナデ。	長石・石英 において褐色 普通	P50 40% 壺部
15	甌 土師器	A 30.0 B 25.3 C 11.3	口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。体部ほぼ中央に把手が付く。無底式。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面縦位のへラ磨き。	長石・石英・雲母 において褐色 普通	P56 90% 床面

図版番号	種 別	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第21図16	支 脚	( 9.8)	5.5	( 3.3)	230.0	覆土中層	DP3
第21図17	不明土製品	5.5	3.4	2.3	25.0	覆土中層	DP4

図版番号	種 別	計 測 値					石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第21図18	勾 玉	2.3	1.7	0.6	0.15	4.1	滑 石	覆土下層	Q5

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第22図19	砥 石	36.7	18.2	8.2	8310.0	凝 灰 岩	床 面	Q6

## 第14号住居跡 (第23図)

位置 A区西部, C9d<sub>2</sub>区

重複関係 本跡は、第13号、15号住居跡と重複している。本跡の床面を第13号住居跡と第15号住居跡が掘り込んでいるので、本跡はこれらの住居跡より古い。

規模と平面形 長軸 5.00m, 短軸 3.50m の方形と推定される。

主軸方向 N-35°-W

壁 壁高は5~20cmであり、特に北東面の壁が低く、外傾して立ち上がる。

床 平坦であり、特に壺部前面が踏み固められている。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>) P<sub>1</sub>は径25cmの円形で、深さ20cmである。P<sub>2</sub>は径30cmの円形で、深さ20cmである。いずれも主柱穴と考えられる。この2か所以外に柱穴は確認できなかった。

竈 北西壁西寄り壁外に30cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ100cm, 幅80cmであり、袖部の遺存状態は良い。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は壁高が低いため、火床からほんのわずかに立ち上がる程度である。覆土は3層からなる。

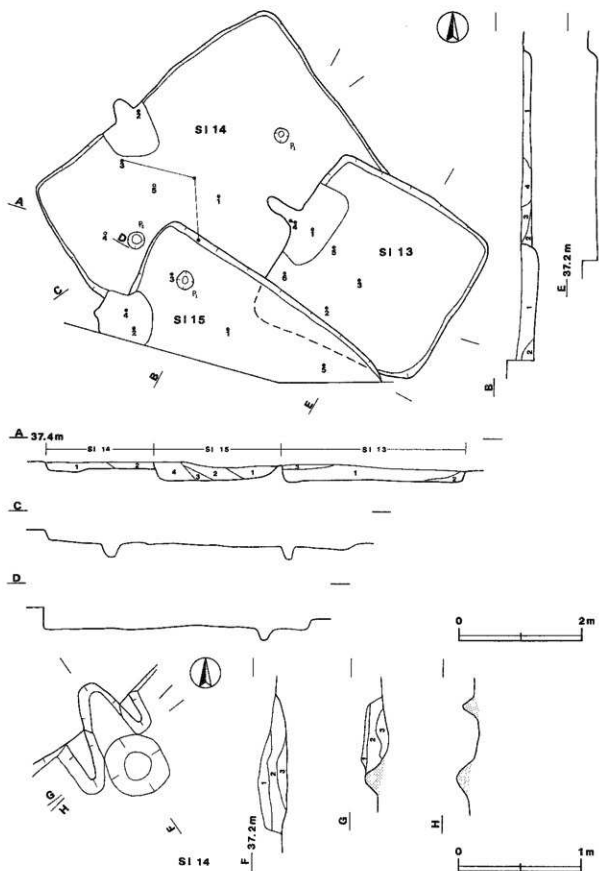
### 壺土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量 3 において赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量
- 2 において褐色 焼土ブロック少量、砂質を帯びる

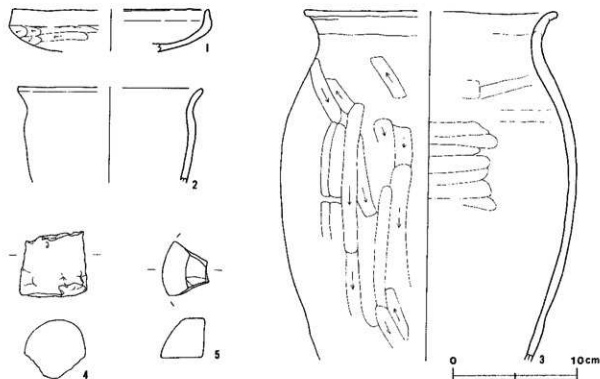
覆土 4層からなり、自然堆積である。

### 土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック微量 4 褐色 ローム小ブロック少量



第23图 第13・14・15号住居跡実測図



第24図 第14号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片143点、須恵器片10点、土製支脚1点、石製紡錘車1点、石12点が出土している。1の土師器環、3の土師器壺は中央部床面から、2の土師器壺は竈部からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、古墳時代後期（6世紀後半）の住居跡である。

#### 第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図1	土師器 環	A [15.6] B (3.4)	高部欠損。体部は大きく開いて立ち上がり、屈曲して口縁部に至る。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ナデ。	長石・雲母・小礫 パミス 褐色 普通	P123 20% 床面
2	土師器 壺	A [14.8] B (7.7)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は軽く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母 にふい藍色 普通	P126 5% 竈内
3	土師器 壺	A [20.2] B (28.2)	体部下位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反して、端部は丸く収めている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位斜位のヘラ削り。中位以下縦位のヘラ削り。体部内面横位のヘラナデ。	長石・石英・雲母 パミス・小礫 にふい褐色 普通	P124 30% 床面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第24図4	支脚	(3.3)	4.9	(4.7)	130.0	床面	DP5

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		最大幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第24図5	紡錘車	1.8	1.6	[2.5]	6.55	粘板岩	床面	Q11

### (3) 奈良・平安時代の住居跡

#### 第1号住居跡 (第25図)

位置 A区東部, B11j区

規模と平面形 長軸3.70m, 短軸3.50mの方形である。

主軸方向 N-4°-W

壁 壁高は30~40cmであり, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南・西壁下及び北・東壁の一部に見られる。上幅10~20cm, 深さ15cm程度で, 断面形は「U」字状である。

床 平坦であり, 特に竈前面が踏み固められている。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は径18cmのほぼ円形で, 深さ20cmである。出入口部関連のピットと考えられる。P<sub>2</sub>は径20×15cmの楕円形で, 深さ20cmである。

竈 北壁中央部 (第1竈) と東壁中央部 (第2竈) の2か所に竈を有している。第1竈の残存状況から第1竈廃絶後, 第2竈が構築されたものである。

第1竈は煙道部が調査区域外にかかっているため, 煙道部の掘り込みは不明であるが, 袖部幅は80cmで, 左袖部のみが残存している。構築材としては, 山砂や粘土が使用されている。覆土は2層からなる。

#### 第1竈土層解説

- 1 ぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 砂質を帯びる
- 2 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 砂質を帯びる

第2竈は, 東壁中央部を壁外に80cmほど掘り込み, 構築材として, 山砂や粘土が使用されている。規模は, 長さ140cm, 幅100cmで, 遺存状態は良い。火床は, 床面をわずかに掘り窪めた程度で, 赤変硬化している。煙道部は火床から緩やかに立ち上がる。覆土は3層からなる。

#### 第2竈土層解説

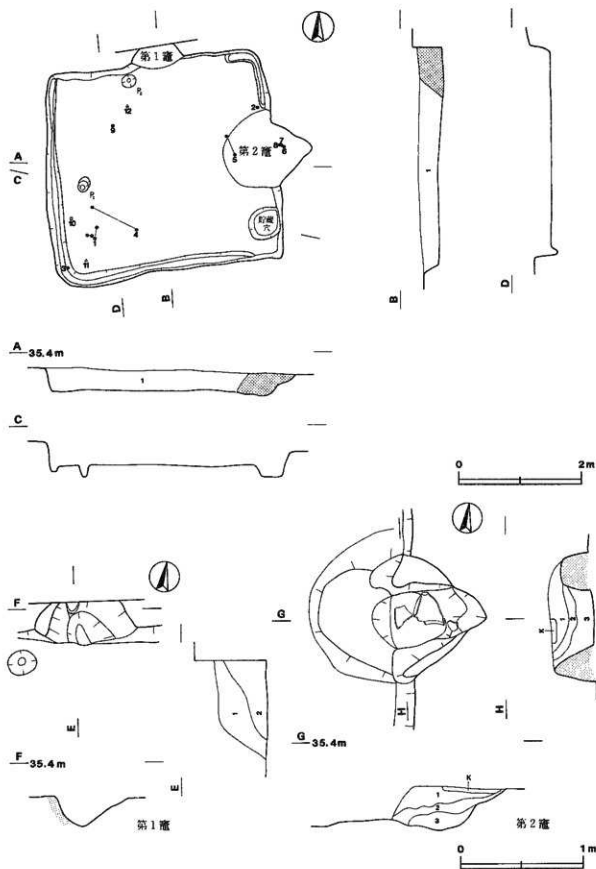
- 1 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 砂質を帯びる
- 2 棕色 焼土粒子少量, 山砂質
- 3 赤褐色 焼土多量, 砂質

貯蔵穴 南東コーナー付近に付設されている。径約50cmの円形で, 深さ20cmである。覆土は単一層であり, 炭化粒子・焼土粒子少量, 砂質の褐色土で, 自然堆積と思われる。

覆土 単一層であり, ロームブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量を含むぶい褐色土で, 自然堆積と思われる。

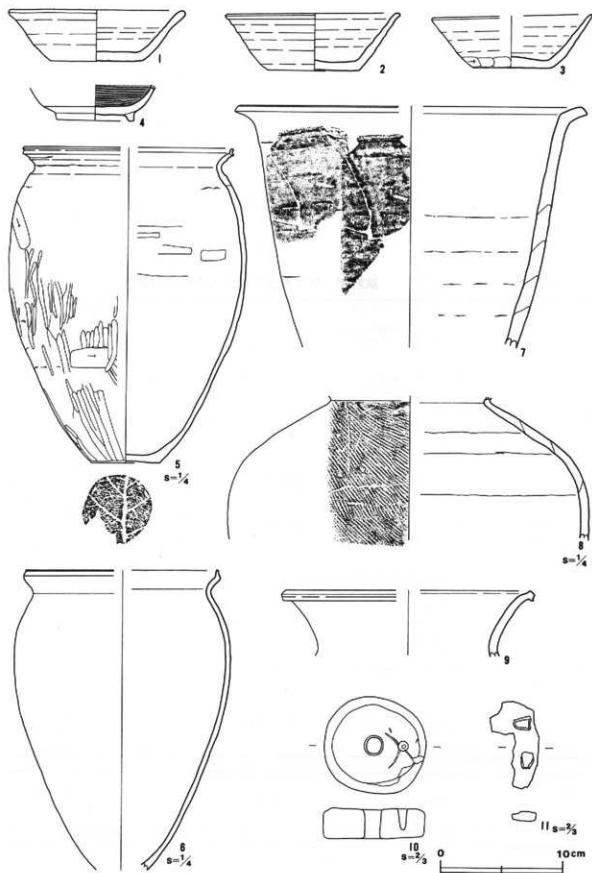
遺物 土師器片524点, 須恵器片118点, 紡錘車1点, 鉄製品2点, 鉄滓1点, 石6点が出土している。1の須恵器環, 4の土師器高台付杯, 10の紡錘車が南西部床面から出土している。3の須恵器環は南西コーナーから出土している。9の須恵器壺, 11の鉄製品は北西部から出土している。5・6の土師器壺, 7の須恵器鉢, 8の須恵器壺はいずれも第2竈部からの出土である。

所見 本跡は, 平安時代中期 (10世紀中葉) の住居跡である。

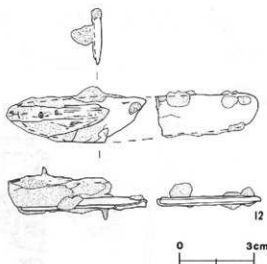


第25图 第1号住居跡実測图





第26图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)

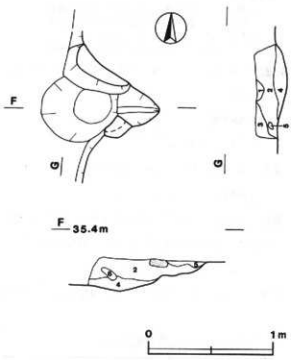
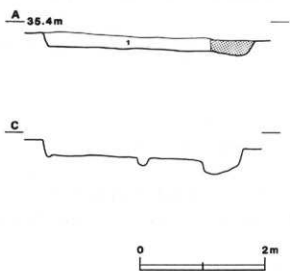
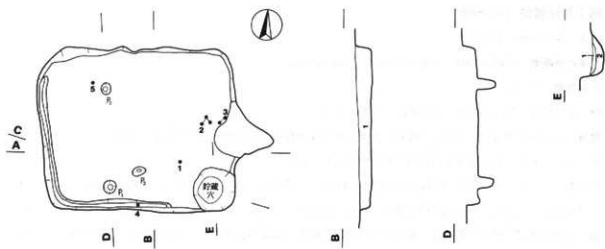


第1号住居跡出土遺物観察表 第27図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

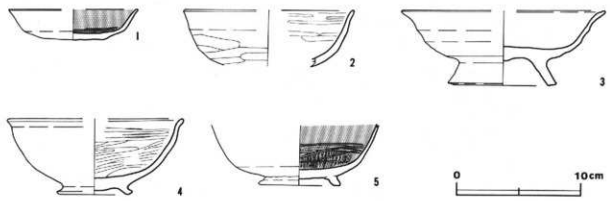
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	環須恵器	A 14.0 B 4.2 C 7.4	体部は外傾して直線的に立ち上がり口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部横ナデ。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	長石・雲母 灰白色 不良	P4 90% 床面
2	環須恵器	A 14.1 B 4.8 C 7.4	体部は外傾して直線的に立ち上がり口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部横ナデ。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P5 80% 覆土下層
3	環須恵器	A 13.0 B 4.4 C 6.4	体部は外傾して直線的に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部、体部横ナデ、体部下端横位のヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	長石・石英 灰色 普通	P6 50% 覆土下層
4	高台付環土器	B ( 2.9) D 6.4 E 0.8	体部上半欠損。体部は内彎気味に外傾する。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部外面横ナデ。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り後、高台部貼り付け。	スコリア・針状鉱物 褐色 普通	P1 50% 床面 内面黒色処理
5	糜土器	A [22.8] B 34.1 C 7.4	体部一部欠損。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は上方につまみ上げられている。	口縁部横ナデ。体部外面上位から下位にかけて縦位のヘラ磨き。体部下端横位のヘラ削り。底部木炭灰。	石英・長石・雲母 灰赤褐色 普通	P3 40% 第2層 二次加熱痕
6	糜土器	A 21.0 B (32.3)	体部一部、底部欠損。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は上方につまみ上げられている。	口縁部横ナデ。体部外面上位から下位、縦位のヘラ削り、下端横位のヘラ削り。	長石・石英 黒褐色 普通	P2 60% 第2層
7	鉢須恵器	A [28.0] B (19.7)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部縦位のヘラ削り。	石英・雲母 灰白色 普通	P7 20% 第2層
8	糜須恵器	B (15.5)	体部上部片。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面平行引き。	雲母 灰色 不良	P8 20% 第2層
9	糜須恵器	A [20.0] B ( 5.3)	口縁部片。口縁部は外反し、端部直下に沈線が走る。	口縁部内・外面クロコナデ。	長石・石英 暗灰色 普通	P9 10% 覆土下層

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		最大幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第26図10	紡錘車	4.2	1.2	0.7	31.0	凝灰岩	床面	Q1

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第26図11	切羽	3.6	0.9	0.4	3.7	M2 覆土下層
第27図12	磨銅線	[10.1]	1.9	1.8	14.0	M1 床面 木質残存



第28図 第2号住居跡実測図



第29図 第2号住居跡出土遺物実測図

## 第2号住居跡（第28図）

位置 A区東部，B11j7区

規模と平面形 長軸3.20m，短軸2.60mの長方形である。

主軸方向 N-87-W

壁 壁高は15～25cmであり，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南～西壁下に見られる。上幅10～20cm，深さ5cm程度で，断面は「U」字状である。

床 平坦であり，特に竈部前面が固く踏み固められている。

ピット 3か所（P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>）。P<sub>1</sub>は径20cmのほぼ円形で，深さ26cmである。P<sub>2</sub>は径20cmの円形で，深さ30cmである。P<sub>3</sub>は径25×15cmの楕円形で，深さ15cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は主柱穴，P<sub>3</sub>は補助柱穴と考えられる。

竈 東壁中央部を壁外に60cmほど掘り込み，山砂と粘土で構築されている。規模は，長さ95cm，幅約100cmである。右袖部は確認できなかった。覆土は6層からなる。

### 竈土層解説

- |       |                      |        |                       |
|-------|----------------------|--------|-----------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量  | 5 ぶい褐色 | 山砂                    |
| 2 灰褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量  | 6 黒褐色  | ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 3 灰褐色 | 炭化粒子少量，焼土粒子微量，砂質を帯びる |        |                       |
| 4 褐色  | 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量  |        |                       |

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径70cmの円形で，深さ25cmである。覆土は2層からなり，自然堆積である。

### 貯蔵穴土層解説

- |       |                      |
|-------|----------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子中量，炭化物・焼土ブロック微量 |
| 2 褐色  | 炭化物極少量               |

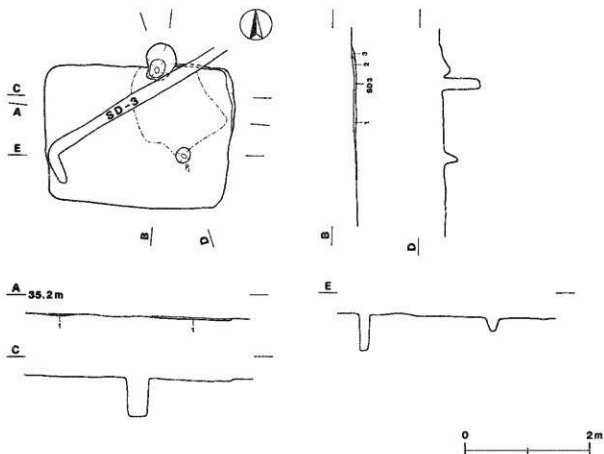
覆土 単一層であり，ローム粒子中量，ロームブロック・炭化材少量，焼土粒子微量を含むぶい褐色土で，自然堆積と考えられる。

遺物 土師器片276点，須恵器片28点，石7点が出土している。1の土師器環は南東部床面から，2，3の土師器環は竈部西床面から，4の土師器高台付環は南壁覆土下層から，5の土師器高台付環は北西部覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は，平安時代中期（10世紀中葉）の住居跡である。

## 第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第28図 1	環 土師器	A [10.2]	底部と体部の境が明確。口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はわずかに外反する。	体部外面横ナデ・内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。	長石・雲母 床面 ぶい黄褐色 普通	P10 60% 床面 内面黒色処理
		B 2.5				
		C 5.4				
2	環 土師器	A [13.6]	底部欠損。体部は内湾して立ち上がり。口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。底部子持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 スコリア 灰褐色 普通	P11 20% 床面
		B (4.5)				
3	高台付環 土師器	A [16.3]	体部は内湾しながら立ち上がり，口縁部は外反する。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り後，高台部貼り付け。	長石・石英・金雲母 スコリア ぶい褐色 良好	P12 40% 床面
		B 6.0				
		D 8.6				
		E 2.0				
4	高台付環 土師器	A [14.0]	体部は内湾しながら立ち上がり，口縁部は外反する。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部外面横ナデ・内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後，高台部貼り付け。	長石・石英 ぶい褐色 普通	P13 20% 覆上下層
		B 6.0				
		D 6.0				
		E 0.8				
5	高台付環 土師器	B (5.1)	口縁部欠損。体部は内湾しながら立ち上がり。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部外面横ナデ・内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後，高台部貼り付け。	雲母 ぶい褐色 普通	P14 40% 覆上下層 内面黒色処理
		D 6.6				
		E 0.8				



第30図 第3号住居跡実測図

### 第3号住居跡 (第30図)

位置 A区東部, C11c区

重複関係 北東コーナー付近から南西コーナー付近にかけて第3号溝が掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 (3.00) m, 短軸 (2.20) mの長方形である。

主軸方向 N-85°-W

壁 北東コーナーと南東コーナー部のみ壁高4cmであり, それ以外は床面と同レベルである。

床 平坦であり, 北東部が特に踏み固められている。

ピット 1か所 (P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径20cmの円形で, 深さ20cmであり, 支柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部を壁外に40cmほど掘り込んで構築されているが, ほとんどの部分が削平されてしまっている。

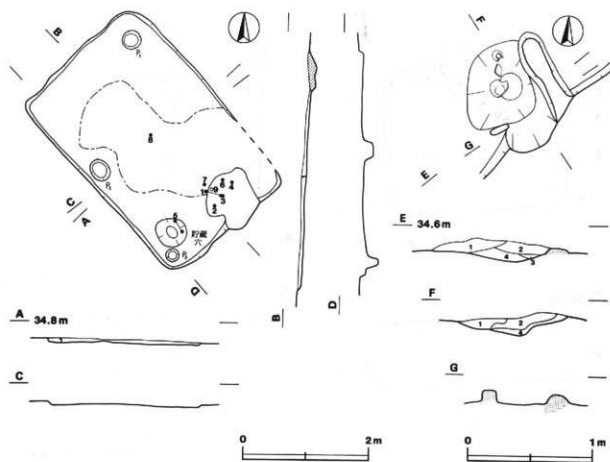
覆土 3層であり, 4cm前後とかなり薄い。自然堆積と考えられる。

#### 土層特徴

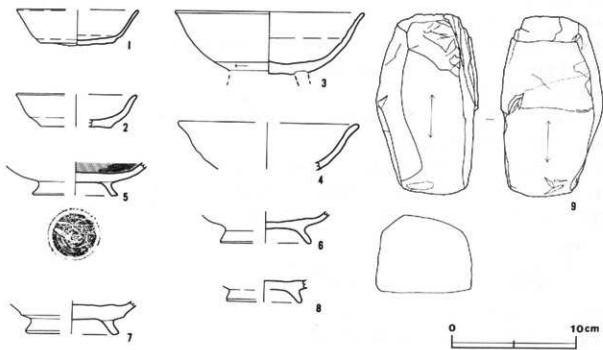
- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 灰赤褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量 (竈部の残存と考えられる)
- 3 におい赤褐色 焼土粒子中量, 焼土ブロック微量 (竈部の残存と考えられる)

遺物 14点の土器器が出土している。小片のため図示できるものはない。

所見 平安時代中期 (10世紀代) の住居跡と考えられる。



第31图 第6号住居跡実測図



第32图 第6号住居跡出土遺物実測図

## 第6号住居跡 (第31図)

位置 A区東部, C11b区。

重複関係 本跡は第1号塚下で確認されたことから, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.70m, 短軸2.47mの長方形である。

主軸方向 N-36°-E

壁 壁高は5cm前後とかなり浅い。

床 ほぼ平坦であり, 特に竈部前面から中央部にかけて踏み固められている。

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は径30cmの円形で, 深さ20cmである。P<sub>2</sub>は径35×30cmの楕円形で, 深さ15cmである。P<sub>3</sub>は径20cmの円形で深さ20cmである。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>ともに支柱穴と考えられる。

竈 南東壁ほぼ中央部を壁外に15cmほど掘り込み, 山砂と粘土で構築されている。袖部は左袖部のみしか残存していない。覆土は4層からなる。

### 覆土層構成

- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| 1 灰褐色 ローム粒子少量, 焼土中ブロック微量 | 3 赤灰色 焼土粒子少量, 焼土中ブロック微量 |
| 2 濃い赤褐色 焼土粒子中量           | 4 灰褐色 焼土粒子少量, 砂質を帯びる    |

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径50cmの円形で, 深さ33cmである。覆土は単一層であり, 少量の焼土粒子, 炭化粒子を含む砂質を帯びた土層である。

覆土 覆土は5cm前後とかなり薄いため単一層で, ローム粒子少量を含むにぶい褐色土である。

遺物 土師器61点, 須恵器12点, 磁石1点, 石2点が出土している。1・2の土師器坏は, いずれも竈内からの出土である。5・7・8の土師器高台付坏は床面からの出土である。

所見 本跡は, 平安時代中期 (10世紀中葉) の住居跡である。

## 第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第32図 1	坏 土師器	A [ 9.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部にかけて内・外面ロクロナデ。底部4転へが削り。	石英・金剛母 スコリア 明褐色 普通	P59 60% 竈内
		B 2.8				
		C 6.0				
2	坏 土師器	A [ 9.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部は内傾して立ち上がり, 口縁部は短く外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部4転へが削り。	雲母・長石 ア 明赤褐色 普通	P60 20% 竈内
		B 2.6				
		C [ 5.6]				
3	高台付坏 土師器	A 15.0	高台部欠損。体部は内傾して立ち上がり, 口縁部は短く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へが削り。	長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P61 65% 竈内
		B ( 5.0)				
4	坏 土師器	A [ 14.4]	底部欠損。体部は内傾して立ち上がり, 口縁部は短く外反する。	口縁部、体部内・外面ナデ。	雲母・長石・スコリア ア にぶい褐色 普通	P62 20% 竈内
		B ( 3.7)				
5	高台付坏 土師器	B ( 2.7)	体部、口縁部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。	内面へが磨き, 外面ロクロナデ。底部に「大」の線刻。	雲母・長石・スコリア ア 明赤褐色 普通	P63 30% 床面 内面黒色処理
		D [ 6.8]				
		E 1.1				
6	高台付坏 土師器	B ( 2.5)	高台部から体部下平の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。	雲母・長石・スコリア ア にぶい褐色 普通	P64 20% 竈内
		D 7.2				
		E 1.4				
7	高台付坏 土師器	B ( 2.7)	高台部から体部下平の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。	雲母・石英・スコリア ア 褐色 普通	P65 20% 床面
		D [ 7.4]				
		E 1.3				
8	高台付坏 土師器	B ( 1.3)	高台部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。	高台部内・外面ロクロナデ。	雲母・スコリア 褐色 普通	P66 5% 床面
		D [ 6.0]				
		E 0.9				

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第32図9	砥石	14.5	8.3	6.8	1230.0	凝灰岩	電部	Q7

### 第7号住居跡 (第33図)

位置 A区東部, C11d<sub>9</sub>区

規模と平面形 長軸3.40m, 短軸3.13mの方形である。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は45cmであり, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北西壁電部右側壁下を除き, ほぼ全周する。上幅10~20cm, 深さ10cm程度で, 断面は「U」字状である。

床 ほぼ平坦であり, 特に電部前面と中央部が踏み固められている。

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は径20cmの円形で, 深さ15cmである。P<sub>2</sub>は径25cmの円形で, 深さ10cmである。P<sub>3</sub>は径20cmの円形で, 深さ10cmである。P<sub>4</sub>は径20×25cmの楕円形で, 深さ15cmである。P<sub>5</sub>は径20×15cmの楕円形で, 深さ20cmである。位置的にP<sub>2</sub>~P<sub>5</sub>は主柱穴, P<sub>1</sub>は補助柱穴と考えられる。

竈 北西壁中央部を壁外に40cmほど掘り込み, 山砂と粘土で構築されている。規模は, 長さ80cm, 幅110cmであり, 遺存状態は良い。火床は, 床面をわずかに掘り窪めた程度で, 赤色硬化している。煙道部は, 火床から緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は3層からなる。

#### 竈土層解説

- 1 におい褐色 焼土小ブロック少量, 山砂質
- 2 におい褐色 焼土粒子少量, 山砂質
- 3 微色 焼土粒子・焼土小ブロック少量, 砂質

覆土 3層からなり, 自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 におい褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 黒色粒子微量
- 2 におい褐色 ローム粒子少量
- 3 微色 ローム小ブロック少量

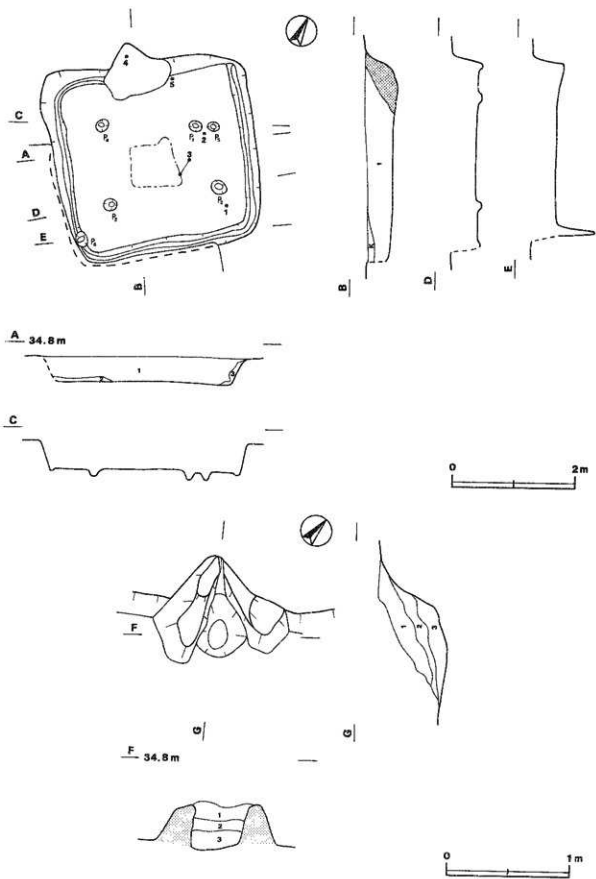
遺物 土師器片323点, 須恵器片117点, 磁石1点, 石2点が出土している。3の須恵器壺は, 中央部床面から出土している。4の土師器壺は電部から, 5の須恵器甕は電部右袖近くから出土している。2の須恵器高盤は, 覆土下層からの出土である。

所見 本跡は, 平安時代前期 (9世紀後半) の住居跡である。

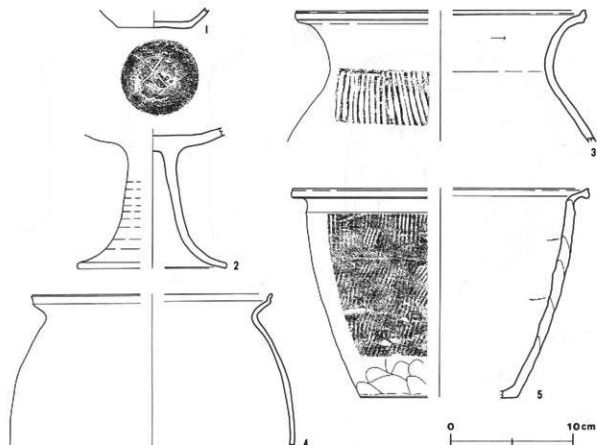
### 第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	土師器 環	B (1.6)	底面片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底面回転へつ切り。底面に「又」の線刻。	長石・石英・小礫 におい黄色 普通	P69 20% 覆土下層
		C 6.0				
2	高須恵器 壺	B (11.4)	坏部欠損。胴部は円柱形で, 底部は「ハ」の字状に強く開く。	胴部内・外面ロクロナデ。	長石・雲母・小礫 灰白色 普通	P71 30% 覆土上層
		D [12.0]				
3	須恵器 壺	A [23.6]	体部から口縁部の破片。体部は内湾して立ち上がり, 口縁部は外反する。口唇部内・外面に紋線が通る。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面旋位の平行印キ。	長石・石英・白雲母 灰色 不良	P72 20% 床面
		R (10.7)				





第33图 第7号住居跡実測图



第34図 第7号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 4	甕 土師器	A [19.6] B (12.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反し、端部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英 にふい橙色 普通	P68 20% 甕部
5	甕 須恵器	A [24.4] B 17.1 C [12.8]	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位の平行印き。内面ナデ。	長石・石英・金雲母 にふい黄褐色 普通	P73 45% 床面

### 第8号住居跡 (第35図)

位置 A区西部, C9d区

規模と平面形 長軸2.84m, 短軸2.55mの方形である。

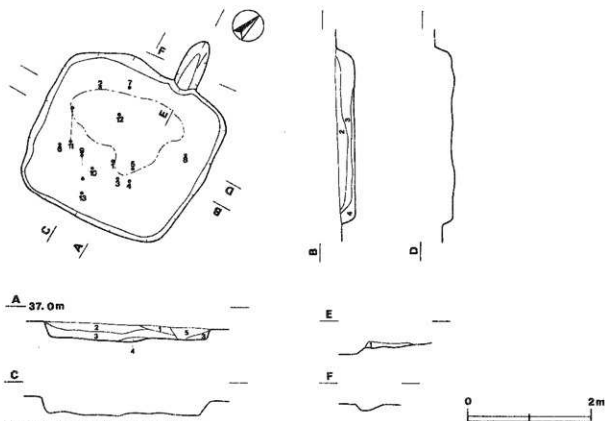
主軸方向 N-46°-W

壁 壁高は20~25cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、甕部前から中央部付近が特に踏み固められている。

竈 北壁面の東寄りを壁外に80cmほど掘り込み、山砂で構築されていたと思われるが、袖部の確認ができなかったので規模などは不明である。煙道の始まりから50cmほど手前に、焚口と思われる赤変硬化している部分が確認されている。覆土は単一層で、ローム粒子少量、黒色小ブロック微量を含む褐色土である。

覆土 5層に分けられ、自然堆積である。



第35図 第8号住居跡実測図

土層解説

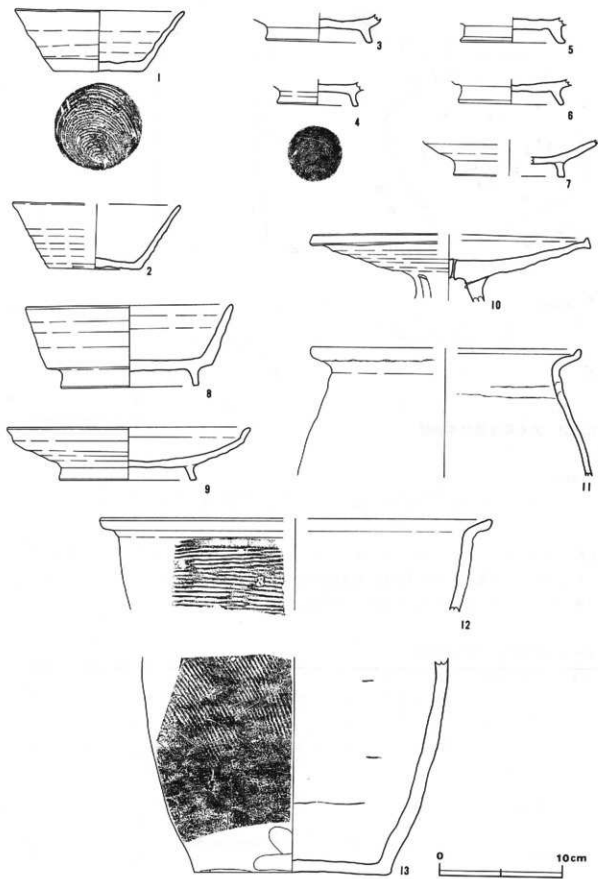
- |   |       |                    |   |        |                       |
|---|-------|--------------------|---|--------|-----------------------|
| 1 | にぶい褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量     | 4 | にぶい褐色  | ローム小ブロック多量            |
| 2 | にぶい褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量 | 5 | にぶい赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量、砂質を帯びる |
| 3 | 褐色    | ローム粒子少量、炭化粒子微量     |   |        |                       |

遺物 土師器片86点、須恵器片48点、石9点が出土している。8の須恵器高台付環は、東側床面から正位の状態で、9の須恵器盤、10の須恵器高盤は南西部床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、平安時代前期（9世紀前半）の住居跡である。

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第36図 1	環 須恵器	A 14.0	口縁部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転 糸切り。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	P77 98% 床周
		B 5.0				
		C 7.0				
2	環 須恵器	A [13.6]	体部は外傾して立ち上がり、口縁部 に至る。	体部内・外面ロクロナデ。体部下 半へく削り。底部回転へく削り。	長石・石英・金雲母 灰白色 普通	P78 40% 床面
		B 5.3				
		C 7.6				
3	高台付環 須恵器	B (2.4)	底部片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転へく削り後、高台部貼り付 け。内面ナデ。	長石 赤灰色 普通	P79 30% 覆土下層
		D 8.6				
		E 1.2				
4	高台付環 須恵器	B (1.4)	底部片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転糸切り後、高台部貼り付 け。内・外面ロクロナデ。	長石・石英 灰色 普通	P81 30% 覆土下層
		D 6.7				
		E 1.0				
5	高台付環 須恵器	B (2.1)	底部片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転へく削り後、高台部貼り付 け。内面ナデ。	長石・石英 灰色 普通	P80 30% 覆土下層
		D 8.4				
		E 1.4				



第36图 第8号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 6	高台付環須恵器	B ( 2.1) D 8.6 E 1.1	底部片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ切り後、高台部貼り付け。	長石・石英 灰色 普通	P82 20% 覆土下層
7	盤須恵器	B ( 3.1) D [ 9.0] E 1.2	底部から体部下端の破片。体部は外傾して立ち上がり、体部下平に横をもつ。高台部は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ切り後、高台部貼り付け。外面ロクロナデ。	長石 灰色 普通	P83 20% 覆土中層
8	高台付環須恵器	A 16.9 B 6.6 D 11.3 E 1.6	体部は外傾して立ち上がり、体部下平に明確な横をもつ。高台は「ハ」の字状に開く。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英 黄灰色 普通	P86 100% 床面
9	盤須恵器	A 19.8 B 4.3 D 11.2 E 1.3	口縁部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、底部で上方に屈曲する。高台は「ハ」の字状に開く。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英 青灰色 良好	P85 95% 床面
10	高須恵器	A [22.5] B ( 5.2) E ( 1.9)	脚部下平欠損。脚部に三方透かしをもつ。蓋部は外傾して立ち上がり、底部で上方に強く屈曲する。	蓋部、脚部とも内・外面ロクロナデ。	長石 灰色 良好	P84 25% 床面
11	土師器	A [22.0] B (10.3)	体部は内傾して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に折れ、口縁部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・雲母 スコリア 褐色 普通	P76 20% 覆土下層
12	鉢須恵器	A [31.8] B ( 7.5)	体部下平欠損。体部は緩く外反しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位の平行叩き。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P87 10% 床面
13	鉢須恵器	B (17.6) C 16.0	体部から底部にかけての破片。平式。体部は緩く外反しながら立ち上がる。	体部外面斜位の平行叩き。体部下端ヘラ削り。	長石・石英・小礫 灰色 普通	P89 20% 覆土下層

### 第9号住居跡 (第37図)

位置 A区西部, C9d1区

規模と平面形 長軸2.66m, 短軸2.57mの方形である。

主軸方向 N-26°-W

壁 壁高は10~20cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。南壁は壁高が低い。

床 平坦であり、各コーナー部を除いて踏み固められている。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1からP4は径20cm程度の円形で、深さ7~11cmといずれも浅いが、主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部を壁外に45cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ95cm, 幅70cmであり、遺存状態は良い。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は、火床から緩やかに立ち上がる。覆土は5層からなる。

#### 電土層解説

- |                        |                     |
|------------------------|---------------------|
| 1 褐色 ローム粒子少量、砂質を帯びる    | 4 褐色 焼土粒子微量、粘土質     |
| 2 褐色 焼土粒子微量、砂質を帯びる     | 5 赤褐色 焼土粒子少量、砂質を帯びる |
| 3 褐色 ローム小ブロック少量、砂質を帯びる |                     |

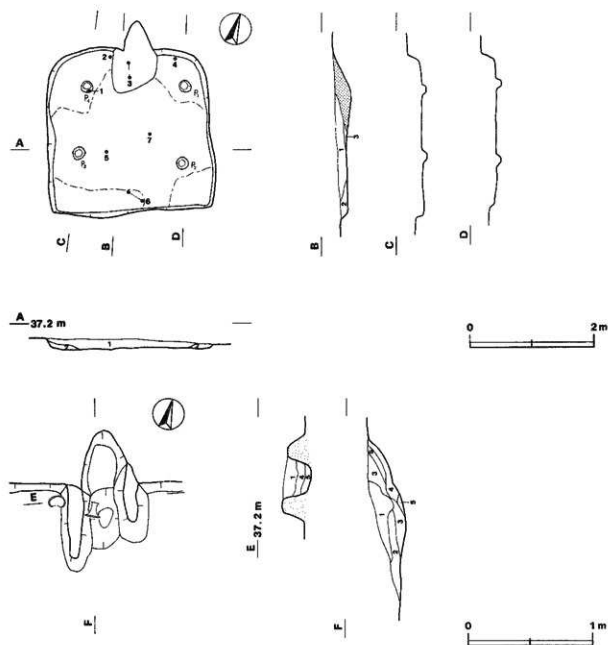
覆土 3層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

- |                      |                         |
|----------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒を微量 | 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、砂質を帯びる |
| 2 褐色 ローム小ブロック少量      |                         |

遺物 土師器片54点, 須恵器片48点, 石4点が出土している。1の須恵器環はP4上部から、4の須恵器蓋は竈部右側から、6の土師器壺は南側壁寄りから、7の須恵器甕は中央部床面から、いずれも出土している。3の須恵器高盤は竈上部からの出土であり、二次的な加熱痕が見られる。

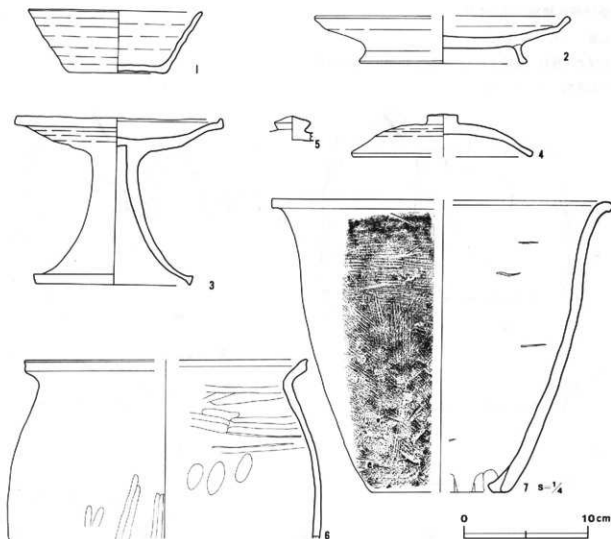
所見 本跡は、平安時代前期（9世紀前半）の住居跡である。



第37図 第9号住居跡実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	坏 須恵器	A 13.6	口縁部 薄欠損。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。胎部回転へく裡り。	長石多量 灰色 良好	I'91 85% 床面
		B 4.8				
		C 7.6				
2	盤 須恵器	A [20.2]	底部から口縁部にかけての破片。盤部は外傾して立ち上がり、端部で上方に屈曲する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英 灰色 普通	I'92 50% 床面
		B 3.8				
		D 13.2				
		E 1.7				



第38図 第9号住居跡出土遺物実測図

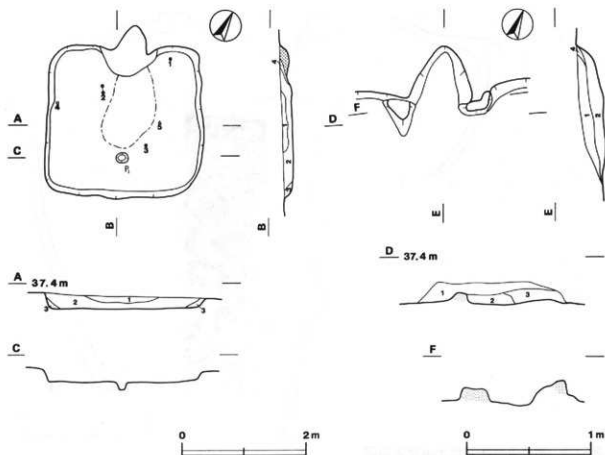
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 3	高 須 恵 器	A 16.2 B 13.2 D 12.0	腹部は外傾して立ち上がり、端部で上方に屈曲する。脚部は下方に伸び端部で屈曲する。	体部、脚部内・外面ロクロナデ。二次加熱を受けている。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P95 80% 底部
4	蓋 須 恵 器	A [14.3] B 3.4 F 2.5 G 0.8	天井部はやや丸味を持ち、緩やかに口縁部に至る。口縁部は屈曲し、短く垂下する。扁平なつまみが付く。	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 灰色 普通	P93 50% 床面
5	蓋 須 恵 器	B ( 2.2) F 2.8 G 1.2	つまみ部。宝珠状を呈する。	つまみは貼り付け。	長石・石英 灰色 普通	P94 10% 床面
6	壺 土 師 器	A [22.0] B (14.1)	体部下半欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。口唇部はつまみ上げられ、外面に沈線が通る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き、内面ナデ。	長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P90 20% 床面
7	甕 須 恵 器	A [36.2] B 31.2 C [14.6]	体部は内彎筒状に立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。多孔式。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。	長石・石英 灰色 普通	P96 30% 床面

第10号住居跡 (第39図)

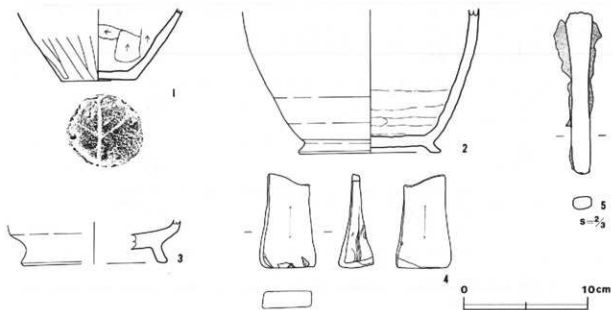
位置 A区西部, C8d7区

規模と平面形 長軸2.45m, 短軸2.40mの方形である。

主軸方向 N-26°-W



第39図 第10号住居跡実測図



第40図 第10号住居跡出土遺物実測図



壁 壁高は、15～20cmであり、緩やかに外傾して立ち上がる。北東側の壁は15cm前後と浅い。

床 平坦であり、竈部前面からP<sub>1</sub>付近にかけて特に踏み固められている。

ピット 1か所(P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は南東部に位置し、径18cmのほぼ円形で、深さ15cmである。位置から出入り口部関連の柱穴と考えられる。

竈 北西壁中央部を壁外に50cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ約80cm、幅約80cmである。袖部、天井部ともに遺存状態は悪い。覆土は4層からなる。

竈土層解説

- |                                 |                    |
|---------------------------------|--------------------|
| 1 灰褐色 焼土小ブロック少量                 | 3 灰褐色 焼土ブロック少量、山砂質 |
| 2 じよい褐色 焼土小ブロック少量、焼土粒子微量、灰質を帯びる | 4 じよい褐色 焼土粒子中量、山砂質 |

覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- |                 |              |
|-----------------|--------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量   | 3 褐色 ローム粒子少量 |
| 2 褐色 ローム小ブロック少量 | 4 褐色 焼土粒子微量  |

遺物 土師器片91点、須恵器片45点、磁石1点、鉄製品1点、石15点が出土している。1の土師器片は竈右袖部付近、2の須恵器短頸蓋は竈部前面、3の須恵器高台付坏は南東部の、いずれも床面から出している。

所見 本跡は、奈良時代(8世紀代)の住居跡である。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図1	甕 土師器	B ( 5.6) C 5.6	体部から底部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラナデ。内面指頭によるナデ。底部木製痕。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P98 20% 床面
2	短頸 須恵器	B (11.4) D [11.0] E 0.8	体部から底部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開く。	体部外面中位。内面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ振り。高台貼り付け。	長石・石英・針状鉱物 灰白色 普通	P97 30% 床面
3	高台付坏 須恵器	B ( 3.3) D [11.2] E 1.4	体部から高台部にかけての破片。体部下端部に鈍い稜をもつ。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。	長石・雲母 灰白色 普通	P99 10% 床面

図版番号	種別	計測値				Zi質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第40図4	磁石	7.5	4.5	2.8	70.0	凝灰岩	覆土中	Q9

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第40図5	甕	6.5	0.89	0.54	18.0	M5 覆土上層 底部

第11号住居跡 (第41図)

位置 A区西部、C8c7区

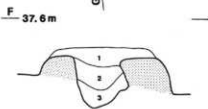
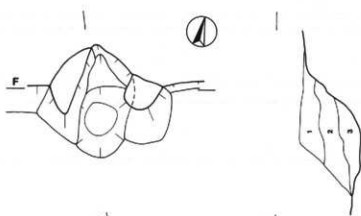
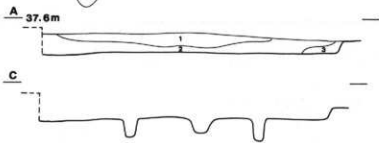
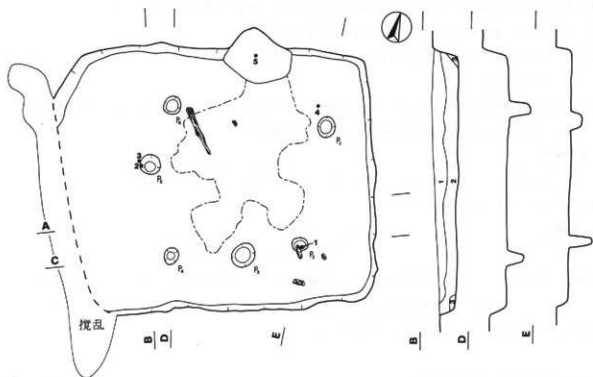
規模と平面形 西側は攪乱を受けているが、長軸4.25m、短軸(4.20)mの方形である。

主軸方向 N-17-W

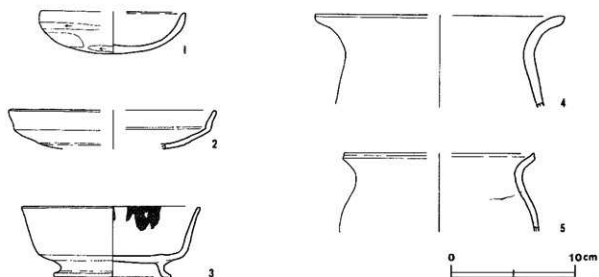
壁 壁高は、20～40cmであり、外傾して立ち上がる。西壁は攪乱を受けており、不明である。

床 平坦であり、竈部から中央部付近にかけて特に踏み固められている。

ピット 6か所(P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>)。P<sub>1</sub>は径約30cmのほぼ円形で、深さ20cm。P<sub>2</sub>は径約20cmのほぼ円形で、深さ40cmである。P<sub>3</sub>は径約35cmのほぼ円形で、深さ20cm。P<sub>4</sub>は径約25cm、深さ30cmの円形である。P<sub>5</sub>は径約35



第41图 第11号住居跡实测图



第42図 第11号住居跡出土遺物実測図

cmの円形で、深さは8cmと浅い。P<sub>6</sub>は径30cmの円形で、深さは35cmである。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>は支柱穴、P<sub>3</sub>は出入り口関連の柱穴、P<sub>5</sub>は補助柱穴と考えられる。

**壁** 北壁のほぼ中央を壁外に約40cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ90cm、幅110cmであり、遺存状態は良い方である。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は、火床から緩やかに立ち上がる。覆土は3層からなる。

**覆土層解説**

- 1 ぶい褐色 焼土小ブロック微量、山砂質  
 2 ぶい赤褐色 焼土小ブロック・炭化物微量、山砂質  
 3 ぶい赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック微量、山砂質

**覆土** 3層からなり、自然堆積である。

**土層解説**

- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量  
 2 暗褐色 ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量  
 3 褐色 ローム小ブロック少量

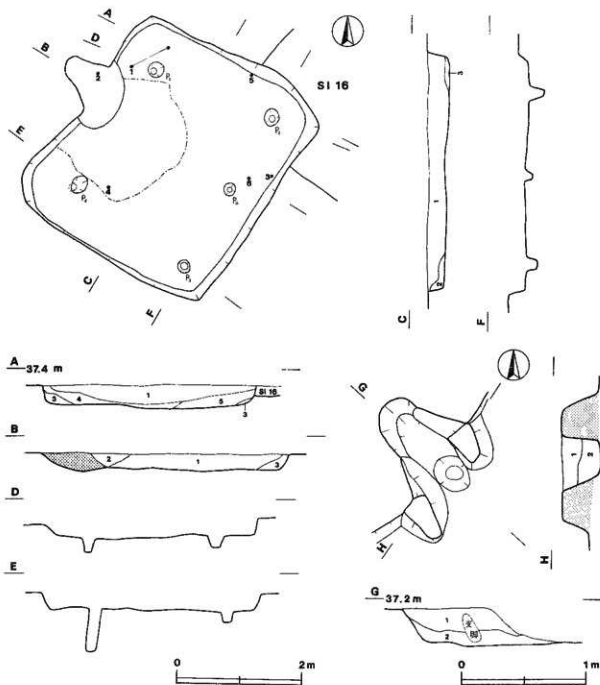
**遺物** 土師器片230点、須恵器片28点、石11点が出土している。1の土師器坏はP<sub>2</sub>上面から、2の須恵器盤と3の土師器高台付坏はP<sub>5</sub>上面から出土している。なお、当住居跡からは炭化材も出土しており、焼失家屋の可能性がある。

**所見** 本跡は、奈良時代（8世紀代）の住居跡である。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	坏 土師器	A [11.4] B 3.3	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内巻して立ち上がり、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り。口縁部、体部内面横ナデ。	長石・雲母 黒褐色 普通	P100 30% P <sub>2</sub> 上面 内面黒色起肌
2	盤 須恵器	A [16.0] B ( 3.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は大きく開いて立ち上がり、強く回曲して口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面回転へラ削り。	長石・雲母・小礫 黄灰色 普通	P104 20% P <sub>5</sub> 上削
3	高台付坏 土師器	A 14.0 B 5.6 D 9.2 E 1.3	口縁部、体部の一部欠損。底部と体部の境で強く屈曲し、体部はわずかに外巻して立ち上がり、口縁部に至る。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面口ロナデ。	長石多量 褐灰色 普通	P105 60% P <sub>5</sub> 上面 口縁部に施釉付着

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図	壺 土師器	A [20.0] B ( 7.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。	長石・石英・雲母 スコリア 棕色 普通	P101 5% 床面
5	壺 土師器	A [15.2] B ( 6.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナゲ。	長石・雲母 赤褐色 普通	P102 10% 床面



第43図 第12号住居跡実測図

## 第12号住居跡 (第43図)

位置 A区西部, C8c区

重複関係 本跡は、東側で第16号住居跡と重複している。本跡が第16号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.76m、短軸3.50mの方形である。

主軸方向 N-57-W

壁 壁高は、25~35cmであり、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦であるが、中央部が若干窪んでいる。電部前面が特に踏み固められている。

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は径25cmの円形で、深さ20cm、P<sub>2</sub>は径30×25cmの楕円形で深さ25cmである。P<sub>3</sub>は径20cmの円形で、深さ10cmである。P<sub>4</sub>は径20cmの円形で、深さ20cmである。P<sub>5</sub>は径35×25cmの楕円形で、深さ70cmとかなり深い。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は支柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>は出入り口関連のピットと考えられる。

竈 北西壁ほぼ中央部を壁外に65cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ95cm、幅110cmであり、袖部の遺存状態は良い。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤炭硬化している。煙道部は火床から緩やかに立ち上がる。覆土は2層からなる。

### 電土層解説

1 ぶい・褐色 焼土ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量、 2 ぶい・褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、砂質を帯びる砂質を帯びる

覆土 5層からなり、自然堆積である。

### 土層解説

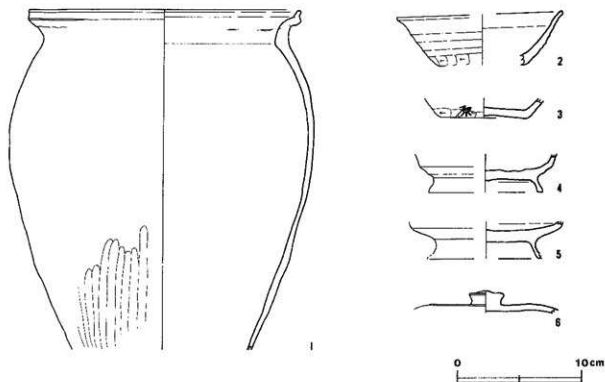
1 暗褐色 ローム粉子・炭化粒子少量 4 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量  
2 褐色 焼土粒子微量、砂質 5 暗褐色 焼土粒子微量  
3 暗褐色 ローム小ブロック少量

遺物 土師器片188点、須恵器片136点、石10点が出土している。1の土師器甕は、電部右側から一括出土している。2の須恵器環は電部から、3の須恵器環は南東部壁際からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、平安時代前期 (9世紀前半)の住居跡である。

## 第12号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 1	土師器 壺	A 21.7 B (27.3)	底部、体部の一部欠損。体部は緩やかに内傾して立ち上がる。口縁部は強く外反し、肩部はつまみあげられ内面直下に紋線が走る。	口縁部内・外面横ナデ。体部下平縁位のヘラ磨き。	長石・石英・雲母 パミス・小礫 ぶい・黄褐色 普通	P106 60% 床面
2	須恵器 環	A [13.4] B 4.3 C 7.1	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部内・外面クロロナデ。体部下位手持ちヘラ磨り。	長石・小礫 灰白色 不良	P108 60% 電部
3	須恵器 環	B (1.6) C (7.0)	底部から体部にかけての破片。平縁。	体部下端手持ちヘラ磨り、「原」の墨磨りあり。	長石・石英・雲母 小礫・パミス 灰白色 不良	P109 20% 床面
4	高台付須恵器 壺	B (3.1) D [9.2] E 1.2	底部から体部にかけての破片。底部と体部の境に鈍い稜をもつ。高台は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面クロロナデ。	長石・石英・小礫 灰黄色 良好	P110 20% 覆土中層
5	高台付須恵器 壺	B (3.0) E 1.6	底部から体部にかけての破片。底部と体部の境に鈍い稜をもつ。高台は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面クロロナデ。	長石・石英 灰黄色 良好	P111 20% 覆土上層
6	須恵器 蓋	B (1.8) F 2.8 G 1.0	天井部の破片。天井頂部は平型で、ボタン状のつまみをもつ。	天井部凹縁ヘラ磨り。	雲母 灰白色 不良	P113 5% 床面



第44図 第12号住居跡出土遺物実測図

### 第13号住居跡 (第23・45図)

位置 A区西部, C9e2区

重複関係 本跡は、第14・15号住居跡と重複している。本跡南側覆土を第15号住居跡が掘り込んでいる。また、

第14号住居跡の床面を掘り込んで本跡竈が構築されているため、第14号住居跡よりも新しく、第15号住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸3.00m、短軸2.85mの方形である。

主軸方向 N-63°-W

壁 壁高20~25cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であり、特に竈前面が踏み固められている。

竈 南西壁中央部を壁外に60cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ110cm、幅135cmであり、袖部の遺存状態は良い。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は、火床から緩やかに立ち上がる。覆土は4層からなる。

#### 竈土層解説

- |       |             |         |             |
|-------|-------------|---------|-------------|
| 1 褐色  | ロームブロック主体   | 3 濃い赤褐色 | 焼土粒子中量      |
| 2 灰白色 | 多量の灰、焼土粒子少量 | 4 褐色    | 少量の灰、焼土粒子微量 |

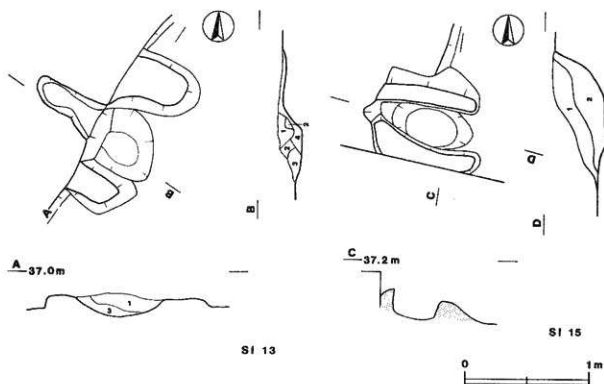
覆土 3層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

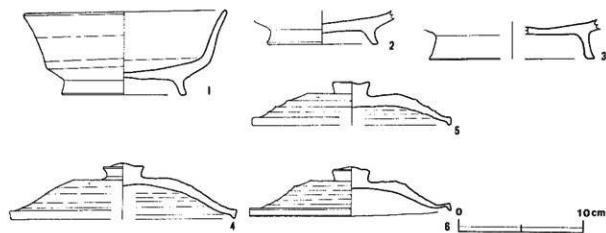
- |       |             |       |               |
|-------|-------------|-------|---------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | 炭化粒子微量、砂質を帯びる |
| 2 褐色  | ローム小ブロック少量  |       |               |

遺物 土師器片108点、須恵器片95点、石5点が出土している。1の須恵器高台付坏、4の須恵器蓋は竈部から、2の須恵器高台付坏は南部から、5の須恵器蓋は竈前面から、6の須恵器蓋は竈左袖付近から、それぞれ出土している。

所見 本跡は、奈良時代（8世紀後半）の住居跡である。



第45図 第13・15号住居跡竈実測図



第46図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測例 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	高台付環須恵器	A 16.0	口縁部、体部の一部欠損。底部と体部の境は鈍い稜をなして円曲し、体部はわずかに外傾して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に開く。	内・外面ロクロナデ。	長石・石英 灰色 良好	P116 70% 電部
		B 6.8				
		D 10.0				
		E 1.2				
2	高台付環須恵器	B ( 2.2)	口縁部、体部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。	内・外面ロクロナデ。	長石・石英 灰色 普通	P117 20% 覆土上層
		D 8.8				
		E 1.2				

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 3	須恵器	B [ 3.1] D [13.2] E 2.0	底面破片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ削り後、高台削り付け。	長石・石英 灰色 良好	P118 5% 床面
4	須恵器	A [20.0] B 4.4 F 3.3 G 1.0	天井部一部欠損。天井頂部は平坦で口縁部にむかって緩やかに下降し、口縁部は屈曲し、短く垂下する。頂部にボタン状のつまみをもつ。	天井頂部回転ヘラ削り。大井外周部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・スコリア 灰色・よび褐色 普通	P120 50% 甕部
5	須恵器	A [16.0] B 3.5 F 3.0 G 1.2	天井部から口縁部にかけての破片。大井頂部は平坦で、緩やかに下降し、口縁部は屈曲し、短く垂下する。ボタン状のつまみをもつ。	天井頂部回転ヘラ削り。大井外周部内・外面ロクロナデ。	長石 灰白色 良好	P121 30% 床面
6	須恵器	A 16.0 B 3.9 G 1.3 F 3.0	天井部一部欠損。天井頂部は平坦で緩やかに下降し、口縁部は屈曲し短く垂下する。ボタン状のつまみをもつ。	大井頂部回転ヘラ削り。天井外周部内・外面ロクロナデ。	長石・石英 良好	P119 85% 床面

### 第15号住居跡 (第23・45図)

位置 A区西部, C9e区

重複関係 本跡は、第13・14号住居跡と重複している。それぞれの住居跡の床面を本跡が掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸 (4.35) m, 短軸 (1.93) mで、南側の2/3が調査区域外のため、平面形は不明である。

主軸方向 N-63°-W

壁 壁高は30cm前後であり、ほぼ垂直に立ち上がる。南西壁、南東壁および北西壁の一部は複乱により、確認できない。

床 平坦であり、特に甕部周辺が踏み固められている。

ピット 1か所 (P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径約30cmの円形で、深さは25cmである。主柱穴と考えられる。

竈 南側が土取りにより壊されているが、北西壁を壁外に45cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。

左袖の一部は壊されているものの遺存状態は良い。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は、火床面から外傾して立ち上がる。覆土は2層からなる。

#### 覆土層解説

- 1 におい黄褐色 焼土中ブロック微量、砂質を帯びる
- 2 におい褐色 焼土粒子微量、砂質を帯びる

覆土 4層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 褐色 炭化粒子微量、砂質を帯びる 3 褐色 焼土小ブロック少量
- 2 褐色 炭化粒子・焼土粒子微量 4 褐色 ローム粒子少量

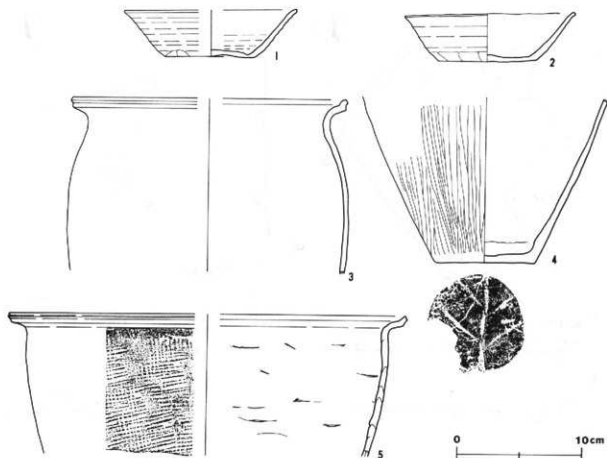
遺物 土師器片133点、須恵器片75点、石1点が出土している。1の須恵器片は床面から、2の須恵器片、4の土師器片は竈内からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、平安時代前期 (9世紀前半)の住居跡である。

### 第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	須恵器	A [13.8] B 3.8 C 7.2	底部平坦。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は軽く外反する。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部は、切り離した後ヘラ削り。	長石・石英・密母 赤褐色 普通	P128 40% 床面





第47図 第15号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第47図 2	坏 須恵器	A 13.6 B 4.0 C 8.0	底部平式。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は、軽く外反する。	体部内・外面クロコナダ。体部下端手持ちヘラ削り。底部は、回転切り離して不調整。	長石・石英 灰色 普通	P132 70% 壺内
3	壺 土器	A [22.0] B (13.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は丸く屈曲し、端部はつまみ上げている。端部直下に沈線が走る。	口縁部内・外面横ナダ。体部内・外面ナダ。	長石・石英・雲母 におい・橙色 普通	P129 5% 覆土上層
4	壺 土器	B (13.2) C 8.0	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	体部外面縦位のヘラミガキ。内面ナダ。底部木葉痕。	長石・石英・雲母 におい・橙黄色 普通	P130 20% 壺内
5	鉢 須恵器	A [31.8] B (11.3)	体部中位から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎して立ち上がり口縁部は外方へ強く屈曲し、端部はつまみ上げている。	口縁部内・外面クロコナダ。体部外面縦位の平行叩き。内面ナダ。	長石・石英・雲母 灰黄色 普通	P134 5% 覆土下層

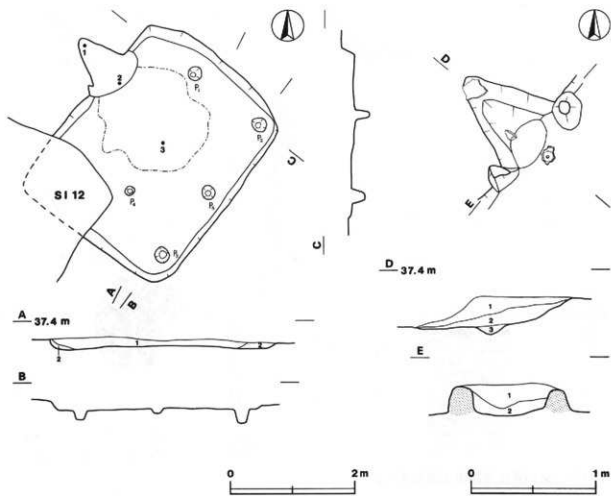
### 第16号住居跡 (第48図)

位置 A区西部, C9d<sub>1</sub>区

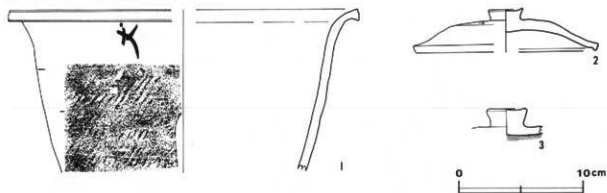
重複関係 本跡の北西コーナー部で、第12号住居跡と重複している。本跡の覆土を第12号住居跡が掘り込んであるので、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.60m, 短軸2.90mの長方形である。

主軸方向 N-50°-W



第48図 第16号住居跡実測図



第49図 第16号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は、10～20cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であり、竈部前面から住居跡中央部にかけて特に踏み固められている。

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>は径20cmの円形で、深さ25cmである。P<sub>2</sub>は径25cmの円形で、深さ20cmである。P<sub>3</sub>は径25cmの円形で、深さ15cmである。P<sub>4</sub>は径20cmの円形で、深さ15cmである。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は15cmと浅く、位置的な点も考慮すると、出入り口関連の柱穴である可能性が高い。P<sub>4</sub>は13cmと浅く、補助柱穴と考えられる。

竈 北西壁北側寄りを壁外に70cmほど掘り込み、山砂主体で構築している。左右袖部とも小さい。規模は、長さ90cm、幅100cmである。火床は床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は、火床から緩やかに立ち上がる。焚口奥に、自然石を利用した支脚が立ったままの状態に残っていた。覆土は3層からなる。

覆土層解説

- 1 濃い黄褐色 山砂中量、焼土小ブロック・焼土粒子少量      3 濃い褐色 ローム中ブロック少量、砂質を帯びる  
2 濃い黄褐色 山砂多量、焼土粒子少量

覆土 2層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量  
2 褐色 ローム小ブロック少量

遺物 土師器片66点、須恵器片49点、石2点が出土している。1の須恵器鉢は煙道部端からの出土であり、口縁部付近に墨書が施されている。2の須恵器蓋は焚口前面から、3の土師器蓋は中央部床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は平安時代前期（9世紀前半）の住居跡である。

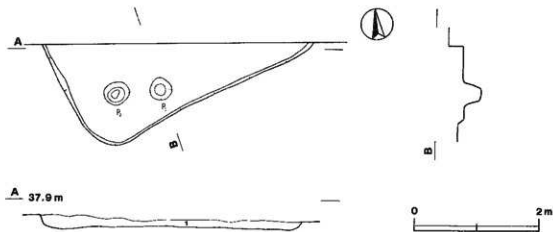
第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第49図 1	鉢 須恵器	A [28.0] B (13.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎しながら立ち上がる。口縁部は強く外反し、端部は上下に突き出している。	口縁部内・外面、体部内面輪ナデ。体部外面段位の平行印き。体部上位外面に「火」の墨書あり。	長石・石英・雲母 灰色 良好	P127 10% 電燈道部
2	蓋 須恵器	A [14.4] B 3.5 F 2.8 G 1.0	天井部は平型で、口縁部は短く前曲する。ボタン状のつまみが付く。	天井部回転へう削り。口縁部横ナデ。	長石・石英・雲母 スコリア 灰色 普通	P137 4% 電灯門
3	蓋 土師器	B (2.2) F 3.2 G 1.5	つまみ部片、つまみ頂部はやや窪む。	内面へう磨き。	長石・雲母 濃い褐色 普通	P135 5% 床面 内面黒色処理

第17号住居跡（第50図）

位置 A区西部、C8n7区

規模と平面形 本跡は、南西コーナーと南東壁のみの確認であり、正確な規模や平面形は不明であるが、方形、



第50図 第17号住居跡実測図

あるいは長方形であったと思われる。

主軸方向 N-68°-E

壁 壁高は、15~25cmであり、外傾して立ち上がる。

床 平坦であり、あまり踏み固められておらず、全体的に軟弱である。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>は径40cmの円形で、深さ30cmである。P<sub>2</sub>は径40×35cmの楕円形で、深さ15cmである。P<sub>1</sub>は補助支柱穴、P<sub>2</sub>は位置的に見て支柱穴と考えられる。

覆土 単一層であり、ローム粒子少量、炭化粒子微量を含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から、土師器片20点、須恵器片1点、石1点が出土している。小片のため図示できるものはない。

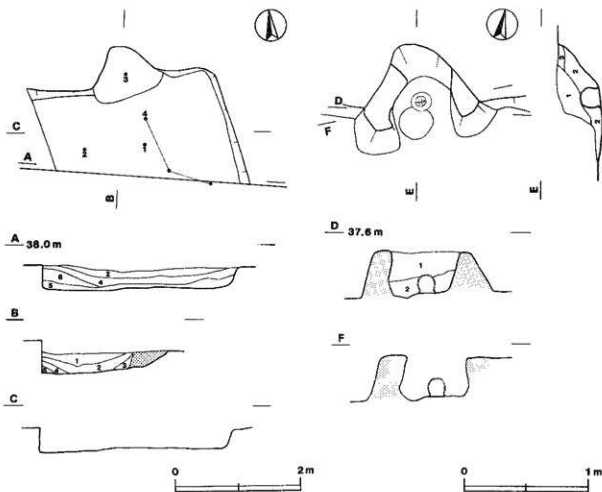
所見 本跡は、出土遺物が少なく時期は不明である。

### 第18号住居跡 (第51図)

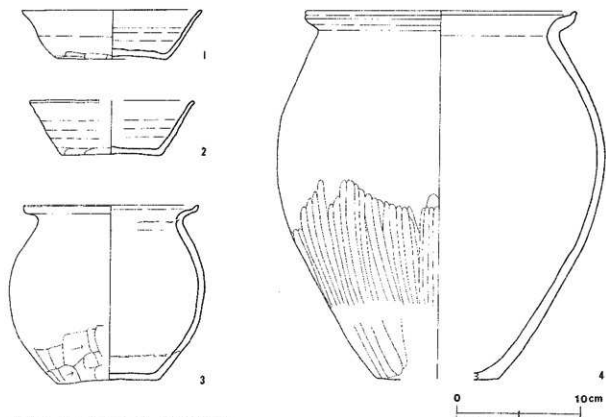
位置 A区西部、C7d<sub>3</sub>区

規模と平面形 本跡は、北東コーナー部付近のみの確認であり、正確な規模や平面形は不明であるが、方形、あるいは長方形であったと思われる。

主軸方向 N-16°-W



第51図 第18号住居跡実測図



第52図 第18号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、特に竈部前面が踏み固められている。

竈 北壁東寄りを壁外に50cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ80cm、幅110cmである。袖部の遺存状態が良い。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で赤硬化している。煙道部は火床から外傾して立ち上がる。火床部奥から小型甕が逆位の状態で出土している。支脚に転用したものと考えられる。覆土は3層からなる。

甕土層解説

- |                                 |                       |
|---------------------------------|-----------------------|
| 1 褐色 山砂粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量         | 3 におい褐色 山砂粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 におい褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、山砂粒子微量 |                       |

覆土 6層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子少量       | 6 暗褐色 ローム粒子少量        |
| 3 褐色 焼土粒子少量        |                      |
| 4 暗褐色 ローム粒子少量      |                      |

遺物 土師器片26点、須恵器片10点、石1点が出土している。1、2の須恵器片は覆土下層から、3の土師器小形甕は竈火床から、4の土師器甕は床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、平安時代前期（9世紀前半）の住居跡である。

### 第18号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	坏 須惠器	A 14.5 B 4.1 C 8.8	体部は外傾して直線的に開き、口縁部で軽く外反する。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへつ削り。底部回転へつ切りで不調整。	長石・石英 灰白色 普通	P140 100% 覆土下層
2	坏 須惠器	A [13.2] B 4.9 C 8.0	体部は外傾して直線的に開き、口縁部で軽く外反する。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへつ削り。底部回転へつ切りで不調整。	長石・石英 灰色 普通	P141 20% 覆土下層
3	小形壺 土師器	A 14.0 B 14.0 C 8.2	体部は内彎して立ち上がり、頸部で「く」の字状に折れ、口縁部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面下半横位のへつ削り。底部本葉煎。	長石(多量)・白霞母 にぶい赤褐色 不良	P139 85% 竈火床
4	壺 土師器	A 21.8 B 29.7 C [ 9.6]	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は端部をつまみ上げている。端部直下に沈線。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面下半横位のへつ削り。体部外面上位及び内面ナゲ。	長石・雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P138 70% 床面

### 第19号住居跡 (第53図)

位置 A区西部, C9a区

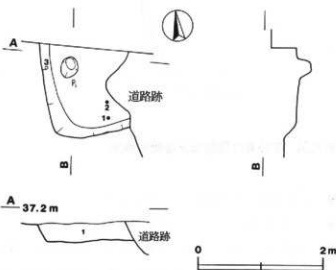
**重複関係** 本跡は、第1号道路跡と重複している。本跡の床面を第1号道路跡が掘り込んでいるので、本跡が古い。

**規模と平面形** 本跡は、西壁と南壁の一部しか確認できず、規模や平面形は不明であるが、方形あるいは長方形であったと思われる。

**壁** 壁高は30cmであり、外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦であるが、全体的に軟弱である。

**ビット** 1か所 (P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径35×25cmの楕円形で、深さ20cmである。位置的にみて支柱穴と考えられる。



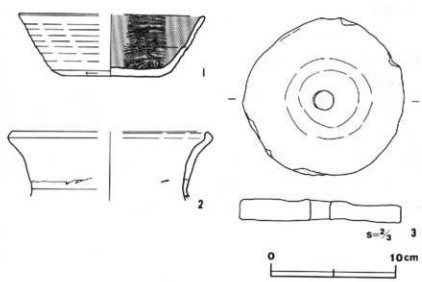
第53図 第19号住居跡実測図

**覆土** 単一層であり、ローム粒子

中量、黒色粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子微量を含む褐色土で、自然堆積と考えられる。

**遺物** 土師器片21点、須惠器片

13点、土製紡錘車1点、石2点が出土している。1の土師器坏、2の須惠器壺は床面から、3の土製紡錘車は覆土中層からそれぞれ出土している。



**所見** 本跡は、壁および床の状況から住居跡と判断した。時期は、平安時代前期 (9世紀中葉) である。

第54図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	坏 土師 陶	A { 14.7	底部平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラミガキ。体部下端部軟ヘテ削り。底部手持ちヘテ削り。	長石・石英 黒色 (灰白・黄褐色) 良好	P142 50% 床面 内面黒色地埋
		B 4.9				
		C 7.6				
2	須恵器	A { 15.6	口縁部破片。口縁部は幅広く、外反する。肩部は内傾する。	口縁部内・外面ロクロナデ。	長石・石英 灰色 普通	P143 5% 床面
		B ( 4.3)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		最大幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第54図3	紡錘車	6.3	0.8	0.8	36.0	覆土中層	DP6

第20号住居跡 (第55図)

位置 A区西部, C9c区

規模と平面形 竈部のみ確認であり、耕作による擾乱が深度に及び、床や壁面が確認できないため、規模と平面形は不明である。

主軸方向 N-70°-W

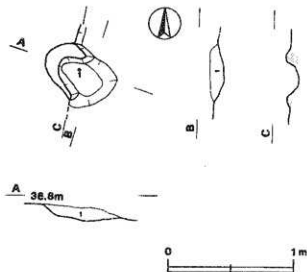
竈 竈袖部付近のみしか残存していないので、不明である。

床 ほとんどが削平されてしまっており、不明である。

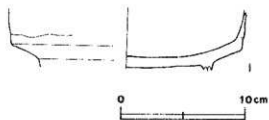
竈 西壁を壁外に25cmほど掘り込み、山砂で構築されている。削平されている部分が多いので、正確な規模は不明である。火床も焼土が若干みられる程度で遺存状態は悪い。覆土は単一層で、山砂多量、焼土粒子微量を含むにぶい褐色である。

遺物 土師器片4点、須恵器片4点が出土している。1の須恵器高台付坏は、竈部から出土している。

所見 本跡は竈部のみであり、詳細は不明であるが、竈部出土の高台付坏から平安時代前期 (8世紀末) の住居跡と考えられる。



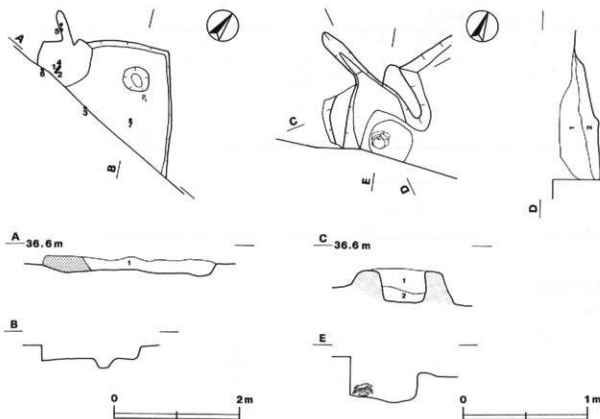
第55図 第20号住居跡実測図



第56図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	高台付坏 須恵器	B ( 4.9)	口縁部、高台部欠損。底部と体部の境は、鋭い線をなして屈曲し、体部は直立する。	体部内・外面ロクロナデ。	石英・小礫 パミス 灰黄色 良好	P144 10% 竈部
		E ( 0.7)				



第57図 第21号住跡実測図

### 第21号住跡 (第57図)

位置 A区西部, C9f区

規模と平面形 電部および北側コーナー部のみ確認であり, しかも南側が調査区外にかかっているため, 規模および平面形は不明である。

主軸方向 N-42°-W

壁 壁高は20cmであり, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 南西方向に緩やかに傾斜するが, ほとんど平坦である。電部周辺のわずかな部分のみが踏み固められている。

ピット 1か所 (P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径40cmの円形で, 深さ15cmである。位置から見て主柱穴と考えられる。

竈 南側が調査区外で正確な位置は不明であるが, 北西壁を壁外に60cmほど掘り込み, 山砂と粘土で構築されている。規模は, 長さ120cm, 幅85cmであり, 袖部の遺存状態は良い。火床は, 床面とほぼ同じレベルである。煙道部は火床から緩やかに立ち上がり, 長さ60cm, 幅10cmと細長い。火床部からは, 円礫を下にし, その上に高台付坏2個, さらにその上に竈の底部がそれぞれ逆位の状態で出土している。支脚として使用したものと考えられる。覆土は2層からなる。

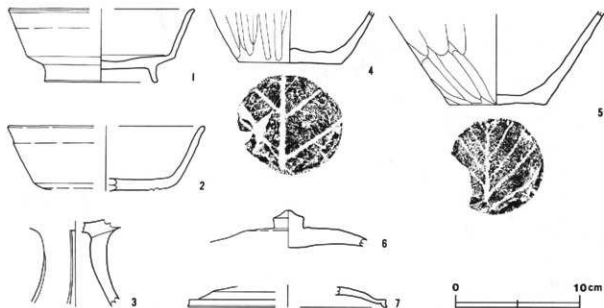
#### 竈土層解説

- 1 区 褐色 山砂中量, 焼土小ブロック少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・山砂粒子少量

覆土 単一層であり, ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量を含む褐色土で, 自然堆積と考えられる。

遺物 土器器片83点, 須恵器片92点, 石1点が出土している。1, 2の須恵器高台付坏, 4の土器器壁は竈火





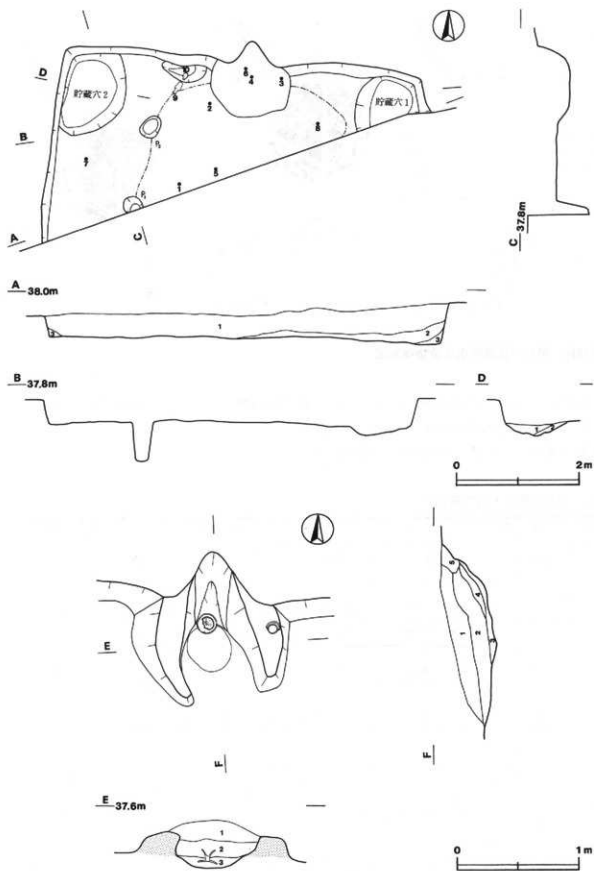
第58図 第21号住居跡出土遺物実測図

床部から、3の須恵器高盤は覆土下層から、5の土師器甕は電煙道部から、7の須恵器蓋は覆土中層から、6の須恵器蓋は電煙道部からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、奈良時代（8世紀後半）の住居跡である。

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	高台付環須恵器	A [ 14.8 ]	底部と体部の境は線をなして屈曲し、体部は外傾して立ち上がる。口縁部は、わずかに外反する。高台は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰白色 良好	P147 50% 電煙部
		B 5.9				
		D 9.1				
		E 1.2				
2	高台付環須恵器	A [ 15.6 ]	底部から口縁部にかけての破片。高台部欠損。底部から体部にかけては丸味をもって移行し、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削りの後、高台貼り付け。	長石・石英・小礫 パミス 黄灰色 良好	P148 30% 電煙部
		B ( 5.2 )				
3	高盤須恵器	B ( 6.9 )	脚部片。脚部はラッパ状に開き、四方に長方形の透かしを有する。	脚部外面ロクロナデ。	長石 灰色 良好	P149 5% 覆土下層
4	壺土師器	B ( 4.3 )	底部から体部下半にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ磨き。底部木葉痕。体部内面二次加熱により剥離。	長石・石英 明褐色 普通	P145 5% 電煙部
		C 8.0				
5	壺土師器	B ( 7.4 )	底部から体部下半にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面斜位のヘラ磨き。内面ナデ。底部木葉痕。	長石・石英・雲母 スコリア 橙色 普通	P146 5% 電煙道部
		C 7.8				
6	蓋須恵器	B ( 3.1 )	口縁部欠損。天井頂部は平坦で、宝珠状のつまみをもつ。	天井部回転ヘラ削り。	長石・石英・小礫 灰色 良好	P150 70% 電煙部
		F 2.5				
		G 1.5				
7	蓋須恵器	A [ 16.0 ]	口縁部破片。天井部は緩やかに下降し、口縁部で屈曲し、短く垂下する。	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・外面ロクロナデ。	長石 灰オリーブ色 良好	P151 20% 覆土中層
		B ( 1.6 )				



第59図 第22号住居跡実測図

## 第22号住居跡（第59図）

位置 B区東部，C7a9区

規模と平面形 本跡は，北側部のみを確認であり，正確な規模や平面形は不明であるが，方形もしくは長方形であったと思われる。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は，35～65cmであり，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり，竈前面から住居跡中央部にかけて特に踏み固められている。

ピット 2か所（P<sub>1</sub>，P<sub>2</sub>）。P<sub>1</sub>は径30cmのほぼ円形で，深さ50cmである。P<sub>2</sub>は径30～40cmの楕円形で，深さ65cmである。共に支柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部を堺外に40cmほど掘り込み，山砂と粘土で構築されている。規模は，長さ130cm，幅130cmである。遺存状態は良い。火床は，床面をわずかに掘り窪めた程度で，赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに立ち上がる。火床部奥から，逆位の状態で高盤が出土している。支脚に転用したものと考えられる。覆土は5層からなる。

### 覆土層解説

- |       |   |                     |         |               |
|-------|---|---------------------|---------|---------------|
| 1 褐色  | 色 | ローム粒子・焼土粒子少量，砂質を帯びる | 4 濃い赤褐色 | 焼土粒子中量，砂質を帯びる |
| 2 赤褐色 | 色 | 焼土ブロック少量，砂質を帯びる     | 5 濃い褐色  | 焼土粒子微量，砂質を帯びる |
| 3 赤褐色 | 色 | 焼土土体，砂質を帯びる         |         |               |

貯蔵穴 2か所。北東コーナー部（貯蔵穴1）と，北西コーナー部（貯蔵穴2）に付設されている。貯蔵穴1は，径100×120cmの楕円形で，深さ10cm，断面は皿状を呈している。貯蔵穴2は，南側部が調査区外にあるが，径100cm前後の円形もしくは楕円形と思われる。深さは25cm程度で，断面は皿状を呈する。

### 貯蔵穴土層解説（貯蔵穴1，2共に覆土は2層である。）

- 1 灰褐色 ローム粒子少量，ローム大ブロック・焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

覆土 3層であり，自然堆積と考えられる。

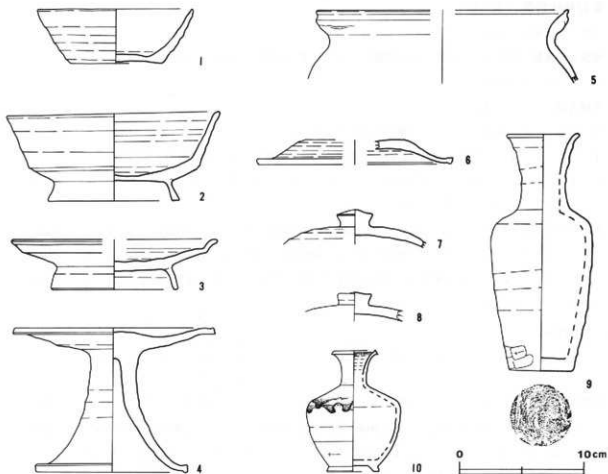
### 土層解説

- |       |                |      |            |
|-------|----------------|------|------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量        | 3 褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |      |            |

遺物 土師器片247点，須恵器片162点，灰釉陶器1点が出土している。9の須恵器壺と10の灰釉陶器小形長頸壺は，竈左袖部付近から横転した状態で出土している。1の須恵器坏，2の須恵器高台付坏はいずれも竈南西部床面から出土している。3の須恵器壺は竈右袖部から，4の高盤は竈火床部からそれぞれ出土している。所見 本跡は，平安時代前期（8世紀末）の住居跡である。

## 第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	坏 須恵器	A 12.4	体部は外へ開きながら立ち上がり，口縁部でやや内彎する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り不調整。	長石・石英・小礫 灰色 良	P154 90% 床面
		B 4.4				
		C 7.2				
2	高台付坏 須恵器	A 17.0	底部と体部の境はやや丸味を持って立ち上がり，口縁部に至る。高台は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，高台部貼り付け。	長石・石英・小礫 バミス 灰色 良	P159 80% 床面
		B 7.1				
		D 10.6				
		E 1.6				
3	盤 須恵器	A [16.4]	高台部から體部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり，端部で上方に屈曲する。高台は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ，底部回転ヘラ切り後，高台部貼り付け。	長石・石英 灰色 普通	P166 50% 竈右袖部
		B 4.0				
		D 10.0				
		E 1.6				



第60図 第22号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 4	高須恵器	A 16.0	盤部はほぼ水平に伸び、口縁端部は四角状に収めている。脚部はラップ状に開き、端部は下方につまみ出している。	盤部内・外面、脚部内・外面クロコナダ。	長石多量 灰色 良好	P177 80% 竈火床部
		B 11.5				
		D 12.2				
5	壺土師器	A [20.0]	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部で「く」の字状に折れ、口縁端部をつまみ上げている。口唇部に鋭い沈線が走る。	口縁部内・外面横ナダ。	長石・石英・霞母 明赤褐色 良好	P152 5% 覆土下層
		B ( 5.9)				
6	蓋須恵器	A [15.4]	体部から口縁部にかけての破片。つまみ部欠損。天井部は平坦で、口縁端部に沈線が走る。	天井部回転ヘラ削り。体部内・外面クロコナダ。	長石・石英 灰色 普通	P168 30% 覆土下層
		B ( 2.0)				
7	蓋須恵器	B ( 3.1)	天井部の破片。天井部は丸味を持つつまみは宝珠状を呈する。	天井部回転ヘラ削り。天井部内・外面クロコナダ。	長石・石英 灰色 不良	P173 10% 覆土下層
		F 2.9				
		G 1.4				
8	壺土師器	B ( 2.3)	天井部からつまみにかけての破片。つまみは扁平で、天井部はやや丸味を持つ。	天井部内面ヘラ書き。	長石・石英 ふい褐色 普通	P153 10% 覆土下層 内面黒色処理
		F 2.8				
		G 1.0				
9	壺須恵器	A 5.9	平底。体部はほぼ直立し、肩部は張る。頸部は軽く外反しながら立ち上がり口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面クロコナダ。体部下回転ヘラ削り。底部回転糸切り。	白色粒子・小礫 青灰色 良好	P181 100% 床面
		B 19.1				
		C 5.0				
10	小形長頸蓋 灰陶輪器	A 3.4	体部は内彎気味に立ち上がり、肩部は張る。頸部は外反して立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は内限する面をなす。高台は短く「ハ」の字状に開く。	口頸部から体部上位はクロコナダ。体部下位は回転ヘラ削り。頸部内・外面及び体部上位黒釉。体部下位黒釉。	長石細粒・黒斑 灰色 良好	P182 98% 床面
		B 9.7				
		D 4.2				
		E 0.4				

## 第23号住居跡（第61図）

位置 B区東部，C7c区

規模と平面形 本跡は，南側部が調査区外のため，正確な規模，平面形は不明であるが，長軸3.60m，短軸（3.30）mの方形か長方形であったと思われる。

主軸方向 N-6°-W

壁 壁高は25～40cmであり，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西壁下で確認されている。幅20cm，深さ12cmで，断面形は「U」字状を呈している。

床 西側へ若干傾斜しているが，ほぼ平坦である。周辺部を除き，固く踏み固められている。

ピット 4か所（P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>）。P<sub>1</sub>は径30×20cmの楕円形で，深さ10cmである。P<sub>2</sub>は径35×25cmの楕円形で，深さ30cmである。P<sub>3</sub>は調査区域外にかかってしまい径は不明であるが，深さは30cmである。P<sub>4</sub>は径20cm，深さ10cmである。P<sub>2</sub>以外は，主柱穴と考えられるが，P<sub>2</sub>は位置から見て補助柱穴の可能性が高い。

竈 北壁東寄り（第1竈）と東壁（第2竈）と2か所に竈を持っている。

第1竈は，北壁を壁外に20cmほど掘り込み，山砂を主な構築材としている。規模は，長さ90cmである。幅は，左袖部が確認されていないので不明である。火床は，床面を少し掘り窪めた程度であり，火を焚いた痕跡はあまり顕著ではない。煙道部は，火床から緩やかに立ち上がる。覆土は3層からなる。

### 第1竈土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
- 2 におい褐色 山砂少量，焼土小ブロック微量
- 3 におい褐色 山砂微量

第2竈は，南側半分が調査区域外にかかってしまっており，左袖部と火床部のみの確認であるため，規模や煙道部等は不明である。左袖部は，山砂を主な構築材としている。火床は，床面を少し掘り窪めた程度であり，赤変硬化している。覆土は3層からなる。

### 第2竈土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量，砂質を帯びる
- 2 赤褐色 炭化物（木炭）・焼土小ブロック少量，灰質を帯びる
- 3 褐色 焼土小ブロック少量，砂質を帯びる

覆土 3層であり，自然堆積と考えられる。

### 土層解説

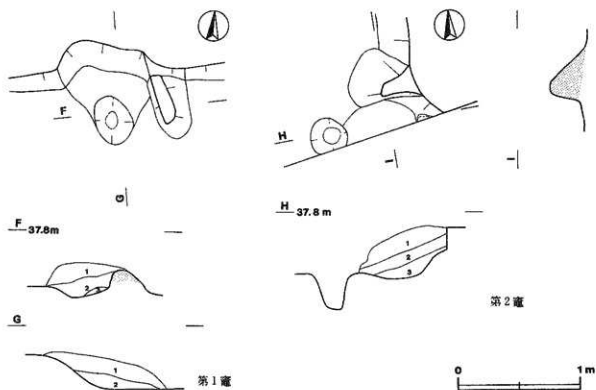
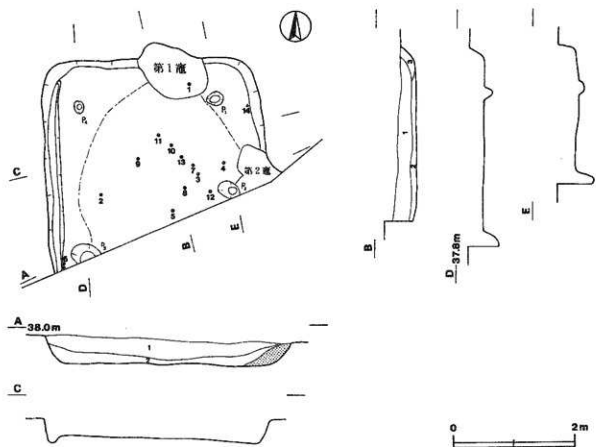
- 1 灰褐色 ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
- 3 褐色 山砂少量，焼土粒子微量

遺物 土師器片342点，須恵器片168点，灰釉陶器片3点，鉄製品1点，石5点が出土している。2，3の土師器器坏，4の須恵器器坏，9の土師器高台付坏，10の灰釉陶器碗，12の土師器壺，13の土師器鉢は，いずれも床面から出土している。

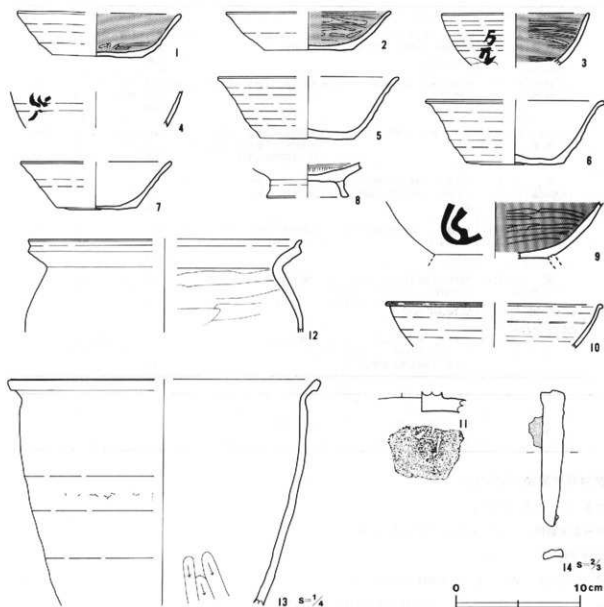
所見 本跡は，平安時代前期（9世紀前半）の住居跡である。

## 第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第61図 1	土師器 土師器	A 13.1 B 3.5 C 7.2	体部は外傾して直線的に立ち上がり口縁部で外反する。	体部外部ロクロナゲ，内面へラ磨り，底部へラ切取り。	長石・石英・雲母 におい褐色 普通	P184 40% 第2層 内面黒色処理



第61图 第23号住居跡実測图



第62図 第23号住居跡出土物実測図

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 2	坏 土器器	A [13.2] B 3.1 C 7.2	底部から口縁部にかけての破片。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁部で外反する。	体部外面ロクロナデ、内面へつ磨き。底部回転へつ削り。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P185 20% 床面 内面黒色処理
3	坏 土器器	A [11.8] B ( 4.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面ロクロナデ、内面へつ磨き。体部外面に墨書。	雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P187 5% 床面 内面黒色処理
4	坏 須器器	B ( 2.9)	体部片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部外面に磨き。	石英・雲母 灰黄色 普通	P188 5% 床面
5	坏 須器器	A [14.4] B 5.0 C 7.4	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾し直線的に立ち上がり、口縁部で弱く外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へつ削り。	長石・雲母 灰黄色 普通	P195 70% 床面
6	坏 須器器	A [14.2] B 5.2 C 8.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾し直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へつ削り。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 不良	P196 30% 覆土下層

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第62図 7	環 頭 蓋 器	A [ 12.0] B 3.7 C 6.4	底部から口縁部にかけての破片。体部は外縁に直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面クロコナデ。底部回転へう削り。	長石・石英・雲母 黄灰色 普通	P197 30% 覆土中層
8	高台付環 土 師 器	B ( 2.7) D [ 6.6] E 1.3	高台部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部内面へう削き。底部回転へう削り後、高台部貼り付け。	雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P192 20% 覆土下層
9	高台付環 土 師 器	B ( 4.4)	体部片。体部は内湾しながら立ち上がる。	体部内面へう削き、外面クロコナデ。底部回転へう削り後、高台部貼り付け。体部外面に黒炭。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P191 30% 床面 内面黒色処理
10	筒 灰 軸 陶 器	A [ 17.2] B ( 3.5)	口縁部片。口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は玉縁状を呈する。	口縁部内・外面クロコナデ。口縁部内・外面に黒炭。	黒炭 にぶい黄色 普通	P205 5% 床面
11	蓋 須 恵 器	B ( 1.6) G ( 0.5)	天井部片。つまみ部欠損。天井部は平坦である。	天井部内・外面クロコナデ。内面に「山」の線刻。	長石・石英 灰黄色 良好	P201 10% 覆土中層
12	蓋 土 師 器	A [ 21.8] B ( 7.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で「く」の字状に屈曲する。口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へう削り。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P193 10% 床面
13	鉢 土 師 器	A [ 32.4] B ( 24.2)	底部欠損。体部は直線的に立ち上がり、体部上半で内湾し、口縁部で外反する。口縁端部に沈線が走る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。体部下端へう削り。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P202 20% 床面

図版番号	器 種	計 測 値				備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第62図14	刀 子	5.5	0.8	0.3	4.5	M7 床面

## 第24号住居跡 (第63図)

位置 B区東部、C6b9区

規模と平面形 一辺3.40mほどの方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は35~40cmであり、外傾して立ち上がる。

床 平坦であり、竈部前面と、住居跡中央部が特に踏み固められている。

ビット 3か所 (P1~P3)。P1は径20×40cmの楕円形であり、深さ15cmである。P2は径18cmの円形で、深さ10cmである。P3は径15cmの円形で、深さ12cmである。いずれのビットもかなり浅い。位置から考えて、P2は出入り口関連のビットと考えられる。P1、P3は主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部を壁外に40cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。袖部の遺存状態は良い。規模は、長さ90cm、幅100cmである。火床は、床面をほんのわずか掘り窪めた程度で、赤変硬化している。煙道部は、緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は3層からなる。

### 竈土層解説

- 1 明灰褐色 焼土小ブロック多量、山砂粒子中量 3 にぶい褐色 焼土粒子少量、ローム小ブロック微量  
2 にぶい赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック微量

貯蔵穴 北東コーナー部に付設されている。径45×60cmの楕円形で、深さ15cmであり、覆土は単一層であり、炭化粒子・焼土粒子を少量含んでいる。

覆土 3層からなり、自然堆積である。

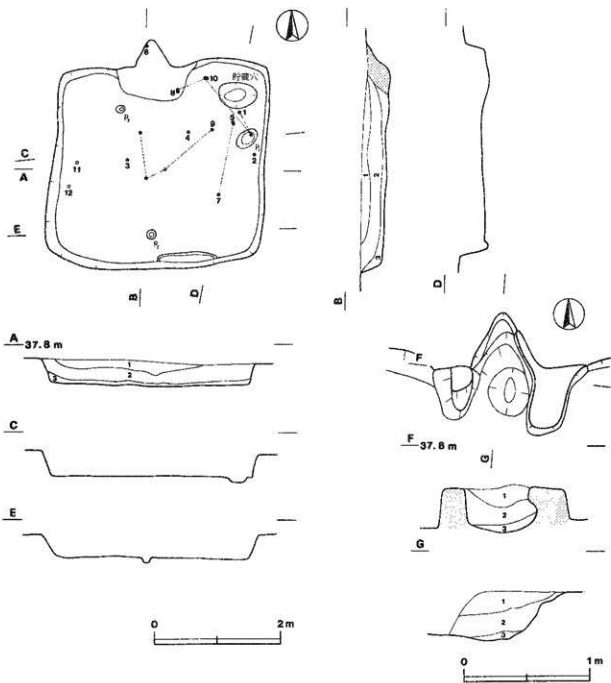
### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量  
2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

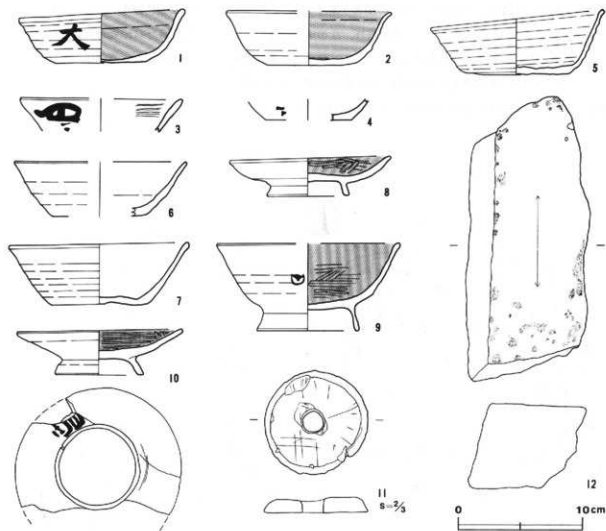


遺物 土師器片341点、須恵器片110点、墨書土器片5点、灰釉陶器片2点、石製紡錘車1点、鉄滓1点、石1点が出土している。1、3、4の土師器杯、9の土師器高台付杯、7の須恵器杯は床面から、8の土師器高台付皿は竈右袖部からそれぞれ出土している。11の紡錘車は西壁下から、12の砥石は西側床面からそれぞれ出土している。覆土中層および床面から5点の墨書土器片が出土している。

所見 本跡は、平安時代前期（9世紀中葉）の住居跡である。



第63図 第24号住居跡実測図



第64図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	土師器 環	A 13.0 B 4.3 C 7.2	体部は、外傾しながら立ち上がり、口縁部で弱く外反する。	体部外面ロクロナデ、体部下端手持ちへら削り。底部回転へら削り。体部外面に「大」の墨書。	長石・石英・雲母スコリア 浅黄褐色 普通	P206 90% 灰面 内面黒色処理
2	土師器 環	A [13.0] B 4.4 C 7.5	体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	体部外面ロクロナデ、内面へら磨き。底部回転へら削り。	長石・石英・雲母スコリア 浅黄褐色 普通	P207 70% 覆土下層 内面黒色処理
3	土師器 環	A [13.0] B (2.6)	口縁部片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部外面横ナデ、内面へら磨き。体部外面に墨書。	石英・雲母 ふい褐色 普通	P209 5% 灰面
4	土師器 環	B (1.7) C [7.0]	底部から体部にかけての破片。体部は丸味を持って立ち上がる。	体部外面ロクロナデ、内面へら磨き。底部回転へら削り。体部外面に墨書。	雲母・石英 ふい褐色 普通	P210 5% 灰面
5	土師器 須恵器 環	A 13.9 B 5.3 C 8.4	体部は外傾して直線的に立ち上がり口縁部でわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。	雲母・長石 灰オリーブ色 不良	P215 90% 覆土下層

図版番号	種別	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64回 6	環 須 形 器	A 13.8 B 4.3 C 7.3	底部欠損。体部は内湾兵隊に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 不良	P219 30% 電部
7	環 須 形 器	A 14.4 B 5.0 C 7.8	体部は外傾して底縁的に立ち上がり口縁部で外反する。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部凹転へく削り。	長石・石英・雲母 にふい黄褐色 普通	P216 70% 床面
8	高台付 土 師 器	A 13.0 B 3.1 D 6.6 E 1.0	体部は外傾して立ち上がり、口縁部で外反する。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部外面ロクロナデ、内面へく磨き。底部凹転へく削り後、高台部貼り付け。	長石・石英・雲母 にふい黄褐色 普通	P212 90% 電部 内面黒色処理
9	高台付 土 師 器	A 11.46 B 7.0 D 8.2 E 2.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は尖味を帯びて立ち上がり、口縁部で弱く外反する。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部外面ロクロナデ、内面へく磨き。底部凹転へく削り後、高台部貼り付け。体部外面に華蓋。	長石・石英・雲母 黄色 普通	P211 60% 床面 内面黒色処理
10	高台付 土 師 器	A 13.2 B 3.7 D 7.0 E 1.4	体部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部外面ロクロナデ、内面へく磨き。底部凹転未切り後、高台部張り付け。体部外面に華蓋。	長石・石英・雲母 スコリア 明赤褐色 良好	P213 70% 覆土下層 内面黒色処理

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		最大幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第64回11	紡錘車	4.1	0.6	0.9	12.0	粘板岩	床面	Q17

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第64回12	砥石	22.9	10.1	6.8	2300.0	花崗岩	床面	Q18

## 第25号住居跡 (第65図)

位置 B区中央部、C6a区

規模と平面形 一辺約3.00mの方形である。

主軸方向 N-80°-E

壁 壁高は、25~45cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、電部前面から住居跡中央部にかけて特に踏み固められている。

ピット 5か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径20cmのほぼ円形であり、深さ15~16cmである。P<sub>5</sub>は、径20cmの円形で、深さ12cmである。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は、位置から考えて出入口関連の柱穴と思われる。

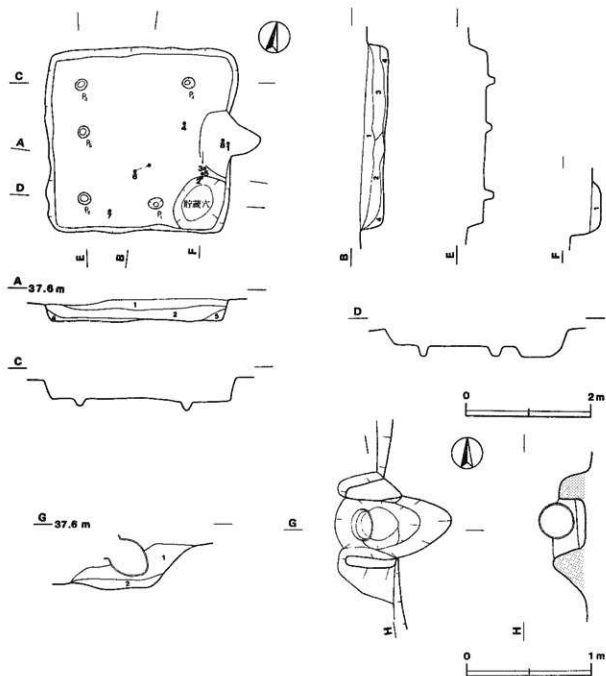
竈 東壁中央部を壁外に40cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。第66図8の竈が電にかけられたままの状態で検出された。遺存状態は良い。覆土は2層からなる。

### 覆土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック微量
- 2 におい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径90×70cmの楕円形で、深さ20cmである。覆土は単一層であり、ローム粒子・ローム小ブロックを少量含む灰褐色の土層である。

覆土 5層からなり、自然堆積と考えられる。



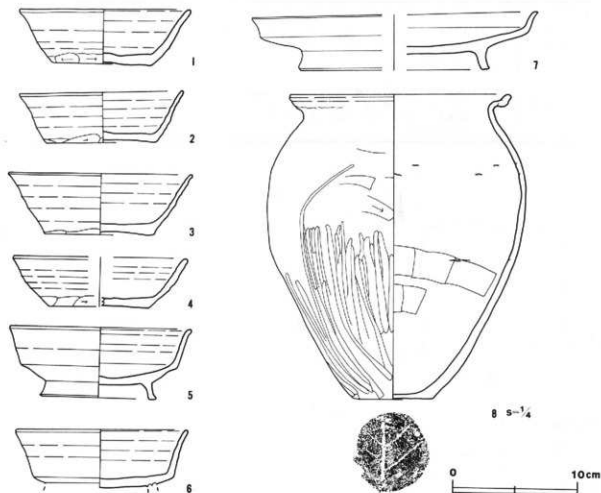
第65図 第25号住居跡実測図

土層解説

- |                       |              |
|-----------------------|--------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量         | 4 褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量         | 5 褐色 ローム粒子少量 |
| 3 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化した微果 |              |

遺物 土師器片29点、須恵器片28点、石1点が出土している。8の土師器甕は、竈にかけられた状態で出土している。2・3の須恵器坏、5の須恵器高台付坏は竈右袖部付近からそれぞれ出土している。4の須恵器坏は覆土下層から、6の須恵器高台付坏は住居跡中央部床面から、7の須恵器盤は南側床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、奈良時代（8世紀中葉）の住居跡である。

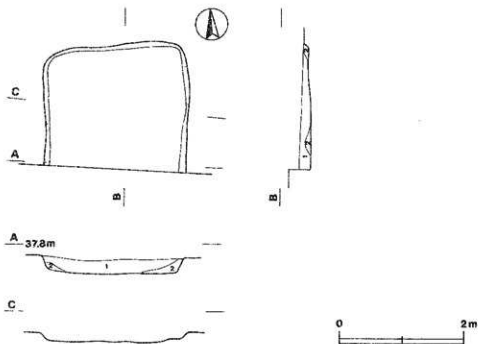


第66図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	坏 須恵器	A 13.6 B 4.4 C 8.0	体部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	体部内面ロクロナデ、体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	長石・石英 灰色 普通	P222 95% 電部
2	坏 須恵器	A 13.2 B 4.9 C 8.7	体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ、体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	長石 灰色 普通	P223 80% 電軸部
3	坏 須恵器	A 14.7 B 4.9 C 8.6	体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ、体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P224 70% 電軸部
4	坏 須恵器	A [13.8] B 4.9 C [ 8.0]	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ、体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	長石・石英 灰色 普通	P225 60% 覆土下層
5	高台付坏 須恵器	A 14.5 B 5.7 D 9.4 E 1.4	口縁部一部欠損。底部と体部の境は緩みをなして屈曲し、体部はわずかに外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台部貼り付け。	長石・石英 灰色 普通	P226 95% 電軸部
6	高台付坏 須恵器	A 13.8 B ( 4.8)	高台部欠損。底部と体部の境は鋭い緩みをなして屈曲し、体部は外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台部貼り付け。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P227 75% 灰面

図版番号	器名	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色・焼成	備考
第66図 7	甕 須恵源	A [22.8] B 4.7 D [15.0] E 1.8	器形は外反して立ち上がり、胴部で上方に強く加曲する。高台部は「ハ」の字状に開く。	体部、口縁部内・外面ロクロナデ。底縁が軽へラ削り後、高台部起り付け。	長石・石英 灰オリーブ色 普通	P228 60% 床面
8	土師器 土師器	A 23.3 B 32.4 C 8.6	口縁部一部欠損。体部は内側しながら立ち上がる。口縁部は強く外反し、臍輪部はつまみ上げられ、外面底下に沈線が流る。	口縁部内・外面傾ナデ、体部内面へラナデ。体部下半外面へラ置き。臍輪木製刷。	長石・石英・雲母 に、灰赤褐色 普通	P221 95% 甕部



第67図 第26号住居跡実測図

### 第26号住居跡 (第67図)

位置 B区中央部, C6b3区

規模と平面形 長軸2.30m, 短軸(2.00)mで、平面形は長方形と推定される。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高12cm前後で、緩やかに立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、全体的に軟弱である。

覆土 2層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、黒色小ブロック・焼土小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

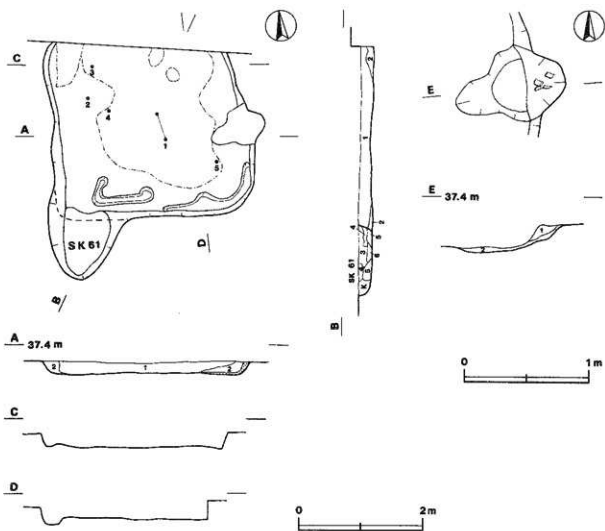
遺物 土師器片1点、須恵器片5点が出土している。いずれも小破片で図示できるものはない。

所見 出土遺物が極端に少なく、しかも小片のため時期は不明である。また、柱穴、竈なども確認できなかったことから、住居跡以外の遺構である可能性も考えられる。

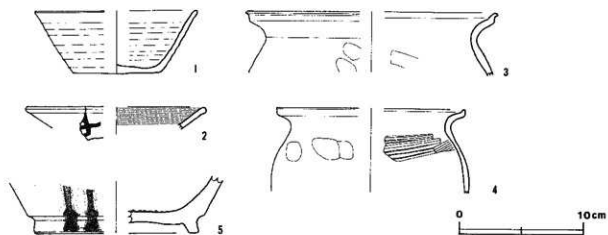
第27号住居跡 (第68図)

位置 B区西部, B5ha区

重複関係 南西壁コーナー部を第61号土坑が掘り込んでいるので, 本跡が古い。



第68図 第27号住居跡実測図



第69図 第27号住居跡出土遺物実測図

規模と平面形 一辺約3.00mの方形である。

主軸方向 N-92°-E

壁 壁高20~30cmであり、外傾して立ち上がる。

壁溝 南東コーナー部付近から南西コーナー部付近にかけて、部分的に確認した。上幅20~30cm、下幅10~24cm、深さ15cmである。

床 ほぼ平坦であり、住居跡中央部と北西壁下が特に踏み固められている。

竈 東壁南寄りを壁外に20cmほど掘り込み構築している。袖部は確認できなかった。規模は、長さ90cm、幅55cmである。火床は床面をわずかに掘り窪めた程度であり、ほとんど赤変酸化は見られない。煙道部は、火床から緩やかに立ち上がる。覆土は2層からなる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量・砂質を帯びる
- 2 褐色 焼土粒子少量、砂質を帯びる

覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック小、炭化物(木炭)少量
- 2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器片100点、須恵器片12点が出土している。2の土師器皿墨書土器は、西側覆土下層から、3の土師器甕は北西部床面から、4の土師器甕、5の須恵器短頸甕は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、平安時代前期(9世紀後半)の住居跡である。

第27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	環 須恵器	A [13.0] B 3.1 C 7.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾し直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部内・外面クロコナデ。底部凹陥ヘラ切り後、手持ちヘラ削り。	長石・石英 黄灰色 普通	P236 30% 覆土下層
2	皿 土師器	A [14.0] B (1.8)	口縁部片。体部は外傾し直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面に黒基。	長石・雲母 に多い褐色 普通	P230 5% 覆土下層 内面黒色処理
3	甕 土師器	A [20.2] B (5.0)	体部下半欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で「く」の字状に屈曲する。口縁部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面指痕圧痕、内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母 に多い褐色 普通	P231 5% 床面
4	甕 土師器	A [15.2] B (6.7)	体部下半欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で「く」の字状に屈曲する。口縁部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面指痕圧痕、内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母 棕色 普通	P232 5% 覆土下層
5	短頸甕 須恵器	B (4.6) D [13.0] E 0.9	底部から体部下半の破片。底部と体部の境に横を持つ。高台はほぼ垂直に付く。	体部内・外面クロコナデ、体部内・外面自然釉。	長石 暗オリーブ色 良好	P237 5% 覆土下層

第28号住居跡 (第70図)

位置 B区東部, C7c3区

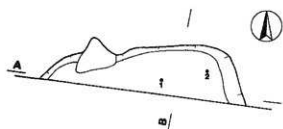
規模と平面形 竈部と北東コーナー部のみの確認であるため、正確な規模と平面形は不明である。

主軸方向 [N-20°-W]

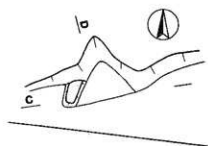
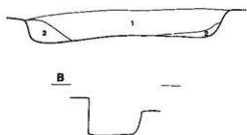
壁 壁高は40cm前後であり、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、全体的に軟弱である。

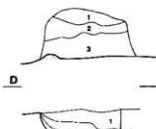




A 38.0m



C 37.8m



第70図 第28号住居跡実測図

竈 北壁ほぼ中央部を壁外に20cmほど掘り込み、山砂を主体に構築されている。調査区域外に焚口部があるため、袖部の状況は不明である。覆土は3層からなる。

竈土層解説

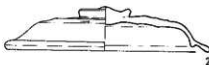
- 1 暗褐色 焼土粒子微量、砂質を帯びる  
2 暗赤褐色 焼土小ブロック少量、砂質を帯びる

- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量、砂質を帯びる

覆土 2層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量  
2 褐色 ローム粒子中量



遺物 土師器片29点、須恵器片16点、石2点が

出土している。1、2の須恵器蓋は、床面から

出土している。

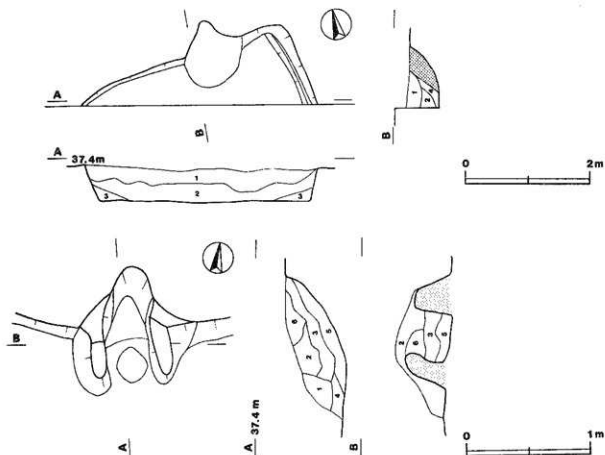
第71図 第28号住居跡出土遺物実測図



所見 本跡は、奈良時代（8世紀前半）の住居跡である。

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	蓋 須恵器	B ( 1.3)	つまみ版。扁平で中央部が窪む。	天井部回転ヘラ削り。	灰石・パミス 灰色 良好	P240 10% 床面
		F 3.8				
		G 0.5				
2	蓋 須恵器	A 16.5	1層部一部欠損。天井頂部は平坦で外周部は外反する。1層部内周に返りを有する。つまみは扁平で周辺が窪み、中央部が突出する。	天井部回転ヘラ削り。1層部内・外面クロコナデ。	灰石・石英・雲母 小礫 灰褐色 普通	P241 80% 床面
		B 3.5				
		G 0.6				
		F 4.1				



第72図 第29号住居跡実測図

第29号住居跡 (第72図)

位置 C区東部, B4hs区

規模と平面形 電部と北西コーナー部のみの確認であり, 正確な規模と平面形は不明である。

主軸方向 [N-5°-W]

壁 壁高は50cm前後であり, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁下のみ確認した。上幅20cm, 下幅5cm, 深さ10cmで, 断面「U」字状を呈する。

床 ほぼ平坦であり, 全体的に軟弱である。

竈 北壁東寄り壁外に50cmほど掘り込み, 山砂を主体として構築されている。袖部の遺存状態は良い。火床は, 床面をわずかに掘り窪めた程度で, 赤変硬化している。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土は6層からなる。

電土層解説

- |                       |                          |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量, 砂質を帯びる | 4 褐色 焼土粒了・炭化粒子微量, 砂質を帯びる |
| 2 褐色 焼土粒了微量, 砂質を帯びる   | 5 暗赤褐色 焼土小ブロック少量, 砂質を帯びる |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子少量, 砂質を帯びる | 6 褐色 焼土粒子微量, 砂質を帯びる      |

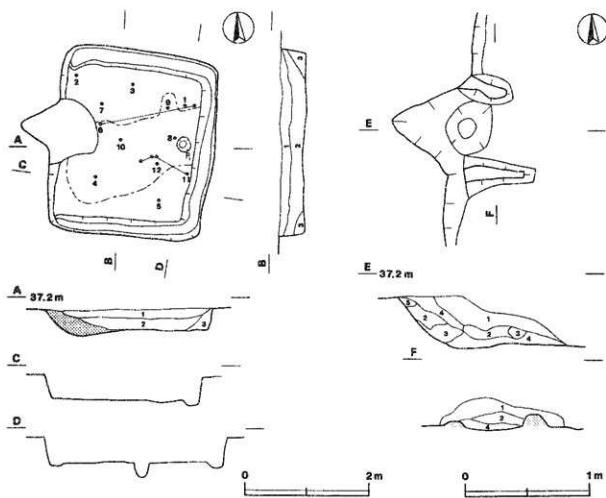
覆土 4層からなり, 自然堆積である。

土層解説

- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量    | 3 褐色 ローム小ブロック少量      |
| 2 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化物(木炭)少量 | 4 暗褐色 炭化粒子微量, 砂質を帯びる |

遺物 土師器片38点, 須恵器片4点, 磁石1点が出土している。いずれも小片で図示できるものはない。

所見 本跡は、出土遺物が小片のため時期は不明である。



第73図 第30号住居跡実測図

### 第30号住居跡 (第73図)

位置 C区西部, B2b7区

規模と平面形 長軸3.03m, 短軸2.56mの長方形である。

主軸方向 N-82°-W

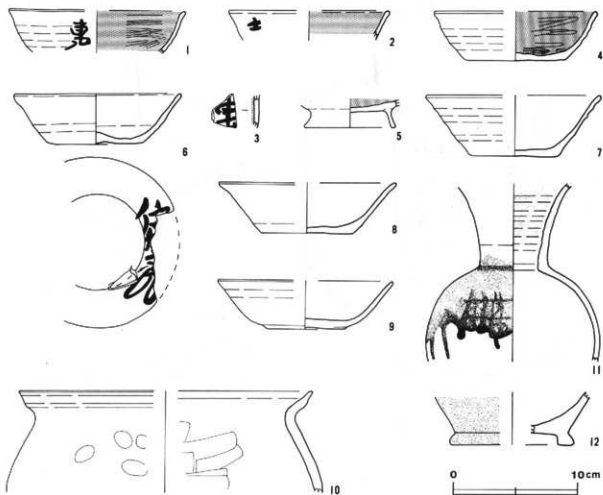
壁 壁高は40cmであり、外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下を除いて巡る。上幅25~30cm, 下幅15cm, 深さ5cmで断面形は「U」字状を呈する。

床 ほぼ平坦であり、竈部から東壁にかけて特に踏み固められている。

ピット 1か所 (P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は径25cmの円形で、深さ25cmである。位置的に見て出入り口関連の柱穴と考えられる。

竈 西壁中央部を壁外に55cmほど掘り込み、山砂を主体として構築されている。袖部の遺存状態は良い。規模は、長さ100cm, 幅90cmである。火床部は、床面をわずかに掘り窪めた程度であり赤変硬化していない。煙道部は火床から外傾して立ち上がる。覆土は5層からなる。



第74図 第30号住居跡出土遺物実測図

甌土層解説

- 1 灰褐色 焼土小ブロック・焼土粒子微量。砂質を帯びる  
 2 黒褐色 焼土小ブロック少量。焼土粒子微量。砂質を帯びる  
 3 灰褐色 焼土小ブロック微量。砂質を帯びる  
 4 灰赤色 焼土小ブロック少量。焼土粒子中量。砂質を帯びる  
 5 灰赤色 焼土粒子中量。砂質を帯びる

覆土 3層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量  
 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量  
 3 暗褐色 ローム中ブロック少量

遺物 土師器片334点、須恵器片47点、灰胎陶器片6点、墨書土器片4点、石6点が出土している。1, 2, 3の土師器は墨書土器である。1は北東部床面から、2は北西コーナー付近から、11の灰胎丸頸甕は東側からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、平安時代前期（9世紀中葉）の住居跡である。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	土師器 環	A [ 14.2 ] B ( 3.4 )	底部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ、内面ヘラ磨き。 体部外面に墨書。	炭石・石美 床面に ふいね色 普通	P242 5% 床面 内面黒色処理

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 2	坏 土 器 器	A [ 12.6 ] B ( 2.4 )	底部欠損。体部は外傾し直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ、内面ヘラ磨き。体部外面に塗布。	長石 黄褐色 普通	P243 5% 床面 内面黒色処理
3	坏 土 器 器	—	体部片。	体部外面ロクロナデ。体部外面に塗布。	雲母・パミス 棕色 普通	P244 5% 床面 内面黒色処理
4	坏 土 器 器	A [ 13.0 ] B 4.0 C ( 2.0 )	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ、内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	長石・石英・雲母 にぶい棕色 普通	P243 40% 覆土下層 内面黒色処理
5	高台付坏 土 器 器	B ( 2.2 ) D 7.4 E 1.5	底部片。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ切り後、高台付けり。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P246 20% 覆土下層 内面黒色処理
6	坏 須 志 器	A 13.4 B 4.1 C 7.8	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。体部外面に塗布。	長石・雲母 スコリア・パミス にぶい褐色 普通	P248 80% 覆土中層
7	坏 須 志 器	A [ 14.0 ] B 4.9 C 7.0	体部は直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	長石・石英・雲母 暗灰黄色 普通	P249 30% 床面
8	坏 須 志 器	A [ 14.2 ] B 4.1 C 7.2	底部から口縁部の破片。体部は外傾し直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	長石・石英・雲母 暗灰黄色 普通	P251 20% 覆土下層
9	坏 須 志 器	A [ 14.0 ] B 3.9 C 6.2	体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	長石・石英・雲母 スコリア 棕色 不良	P250 30% 覆土中層
10	罌 土 器 器	A [ 23.4 ] B ( 8.1 )	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面直削気味。内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母 棕色 普通	P247 5% 床面
11	長 頸 壺 灰 胎 陶 器	B ( 14.2 )	体部から頸部片。体部は丸味を持って立ち上がり、頸部下端に至る。頸部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部、頸部内・外面ロクロナデ。頸部下端から体部上位に施施。	長石・黒炭 灰オリーブ色 良好	P252 30% 床面
12	長 頸 壺 灰 胎 陶 器	B ( 4.3 ) D [ 9.6 ] E 1.0	底部から体部下平にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。高台は短く垂下する。	体部内・外面ロクロナデ。高台は断面カマボコ状を呈する。外面施施。	石英細粒 黒褐色 良好	P263 5% 覆土上層

### 第31号住居跡 (第75図)

位置 C区西部, B2d区

規模と平面形 本跡は、北側部のみ調査であり、全体の規模は不明であるが、長軸4.00m、短軸2.03mの方形もしくは長方形であったと考えられる。

主軸方向 N-11°-E

壁 壁高は35~40cmで、外傾して立ち上がる。

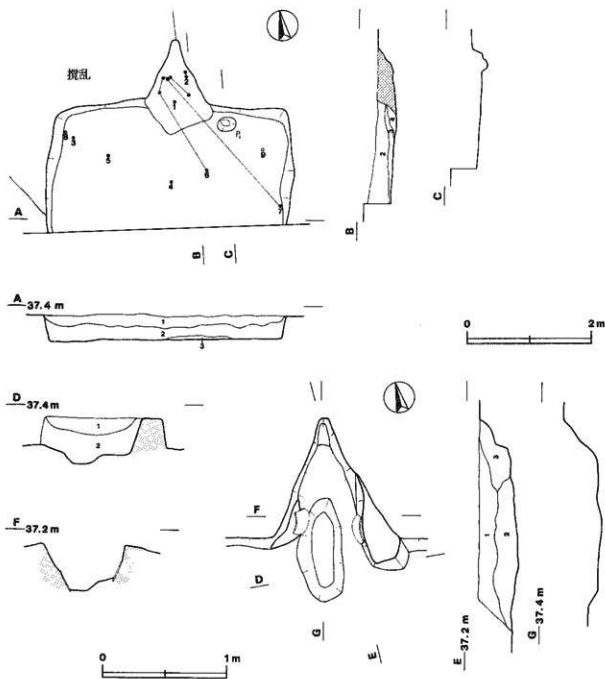
ピット 1か所 (P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は、径30×20cmの楕円形で、深さ15cm。支柱穴と考えられる。

床 ほぼ平坦であり、全体的に軟弱である。

竈 北壁中央部を壁外に95cmほど掘り込み、山砂を主体として構築されている。規模は、長さ150cm、幅130cmである。袖部は山砂で構築されているが、両袖とも補強材として、同一個体の甌の大型片が使われている。火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、あまり赤変硬化は見られない。煙道部は、火床から段をもって立ち上がる。覆土は3層からなる。

#### 覆土層解説

- 1 灰褐色 焼土中ブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量、砂質を併び
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量



第75図 第31号住居跡実測図

覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

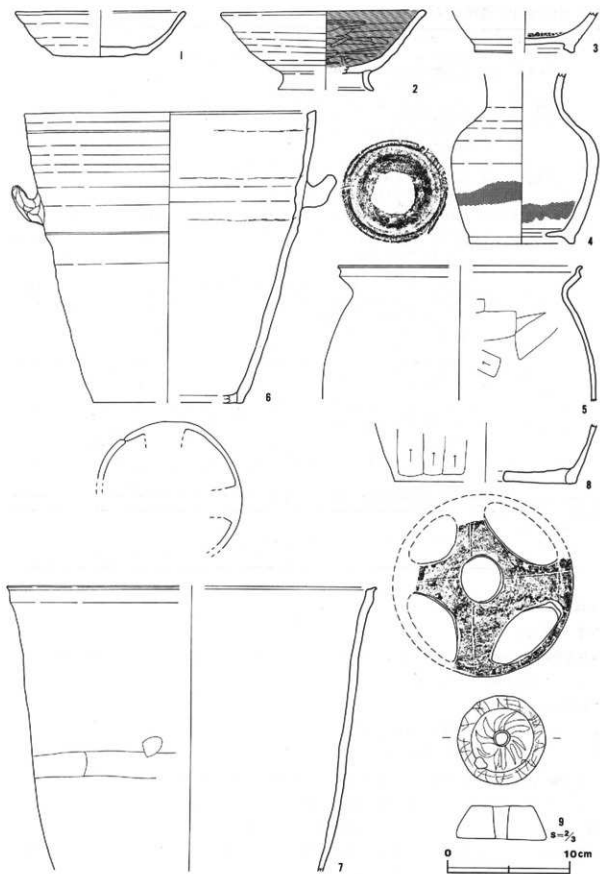
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

3 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量

4 褐色 焼土粒子微量、砂質を帯びる

遺物 覆土中から土師器片365点、須恵器片72点、灰軸陶器片1点、磁石1点、石製紡錘車1点、石1点が出土している。1の土師器坏は竈火床部から、2の土師器高台付坏は右袖部から、3の灰軸陶器長頸甕は北西コーナー付近覆土下層から、4の須恵器長頸甕は竈部前方の床面からそれぞれ出土している。6の土師器甕は袖部左右の補強材として使われていたものである。

所見 本跡は、平安時代前期（9世紀末）の住居跡である。



第76図 第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第76図 1	坏 土師器	A [13.8]	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎頸部に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	長石・石英・雲母 スクリア 褐色 普通	P253 40% 電火床部
		B 3.7				
		C 2.8				
2	高台付坏 土師器	A 16.4	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎頸部に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は「ハ」の字状に開く。	体部外面ロクロナデ、内面ヘラ磨き、底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・石英・雲母 に多い褐色 普通	P254 60% 電火床部 内面灰色処理
		B 6.6				
		D [ 7.8]				
		E 1.5				
3	長頸壺 灰釉陶器	B 3.3	底部から体部下半にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。高台部は低く、ほぼ垂下する。	体部内・外面ロクロナデ。底部内面中央に軸付管。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・黒曜 灰白色 普通	P262 10% 覆土下層
		D [ 8.0]				
		E 0.6				
4	長頸壺 須恵器	B (14.0)	底部から頸部の破片。体部は外傾して立ち上がり、肩部に丸味をもち頸部に至る。頸部は外傾頸部に立ち上がる。底部中央部に焼成後の穿孔。低い高台が付く。	体部 頸部内・外面ロクロナデ。高台部貼り付け後、ロクロナデ。	長石 灰白色 普通	P261 60% 灰面 体部下内外面に 漆付着
		D 8.5				
		E 0.6				
5	罌 土師器	A [20.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。口縁部はつまみ上げられ、内・外面に沈線が走る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英 に多い褐色 普通	P255 10% 覆土下層
		B (11.0)				
6	瓶 須恵器	A 31.2	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。体部上部に把手が付く。	体部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 に多い褐色 普通	P258 60% 電火床部 多孔式
		B 32.0				
		C [16.0]				
7	鉢 須恵器	A [30.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内面ナデ。体部外面中位指置正統。ヘラナデ。下位平行叩き。	長石・石英・雲母 スクリア に多い黄褐色 普通	P259 20% 灰面 磨耗が著しい
		B (23.1)				
8	瓶 須恵器	B ( 4.9)	底部から体部下半の破片。体部は直線的に立ち上がる。	体部下内、内・外面ともヘラナデ。穿孔部ヘラ削り。底部に十文字の線刻。	長石・石英 灰黄色 普通	P260 10% 覆土下層 多孔式
		C [14.8]				

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		最大幅 (cm)	厚 さ (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)			
第76図9	前 編 車	3.6	1.5	0.6	29.0	粘板岩	覆土下層	Q21

第32号住居跡 (第77図)

位置 C区西部、B2b区

規模と平面形 長軸2.85m、短軸2.50mの長方形である。ほぼ中央部に土坑状の掘り込みが確認された。また、南西部を風倒木痕により攪乱されている。

主軸方向 N-12°-E

壁 壁高は13cm前後で、外傾して立ち上がる。

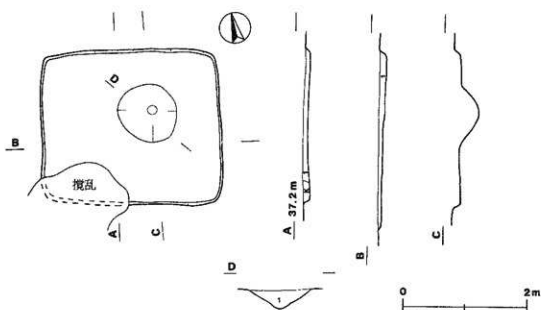
床 ほぼ平坦であり、全体的に軟弱である。

土坑状掘り込み 規模は、径100×85cmの楕円形で、深さ30cmであり、断面形は皿状を呈する。覆土は、ローム大・小ブロックおよびローム粒子を少量含む黒褐色土層1層のみである。

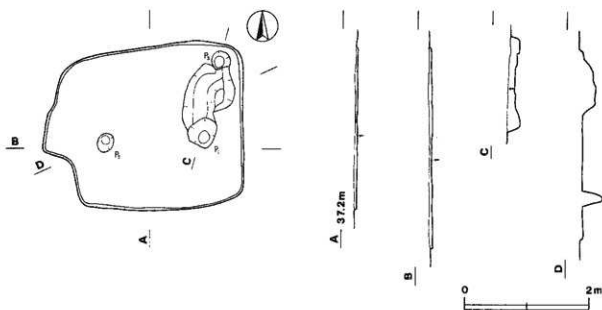
覆土 単一層であり、ローム粒子少量含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

所見 本跡からは、出土遺物が全くなく、時期等は不明である。竈や柱穴もなく、規模から考えて住居跡とするよりは、住居に伴う何らかの設備(倉庫等)と考えたい。





第77図 第32号住居跡実測図



第78図 第33号住居跡実測図

### 第33号住居跡 (第78図)

位置 C区西部, B2b区

規模と平面形 長軸3.05m, 短軸2.58mの長方形である。西側に張り出し部を持つ。

主軸方向 N-90°-W

壁 壁高は5cmと非常に低く, 詳細は不明である。

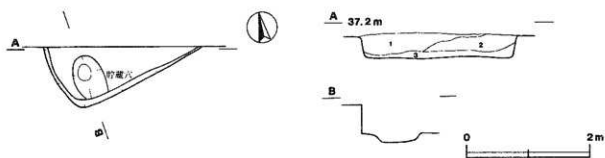
床 平坦であり, 全体的に軟弱である。

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>は径45cmのほぼ円形で, 深さ20cmである。P<sub>2</sub>は径30×25cmの楕円形で, 深さ35cmである。P<sub>3</sub>は径30cmのほぼ円形で, 深さ30cmである。いずれも主柱穴と考えられる。

**覆土** 単一層であり、ローム粒子少量、炭化粒子微量含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

**遺物** 覆土中から土師器片5点、須恵器片1点が出土している。いずれも小破片のため図示できるものはない。

**所見** 本跡は、出土遺物が少なく時期は不明である。



第79図 第34号住居跡実測図

### 第34号住居跡（第79図）

**位置** C区西部，B2a3区

**規模と平面形** 本跡は、南西コーナー部付近のみの確認であり、全容は不明であるが、方形もしくは長方形であったものと考えられる。

**主軸方向** N-75°-E

**壁** 壁高40cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

**床** 平坦であり、部分的に踏み固められたところがある。

**貯蔵穴** 径70×50cmの長楕円形で、深さ10cmである。

**覆土** 3層からなり、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

3 褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム粒子微量

**遺物** 覆土中から土師器片31点、須恵器片16点、石3点が出土している。いずれも小破片で図示できるものはない。

**所見** 本跡は、出土遺物が小片のため時期不明である。

### 第35号住居跡（第80図）

**位置** C区西部，B2c2区

**重複関係** 東側で第71号土坑と重複している。本跡を第71号土坑が掘り込んでいるので、本跡が古い。

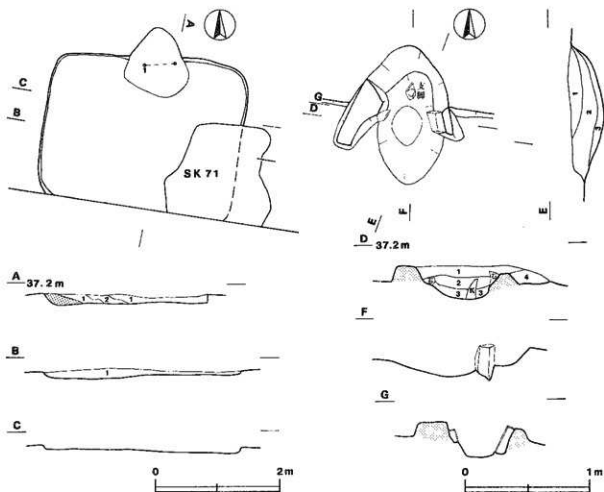
**規模と平面形** 南側部が調査区域外にかかっているため、全容は明らかでないが、長軸3.20m、短軸2.90mの長方形と考えられる。

**主軸方向** N-10°-E

**壁** 壁高は6cmと低い。外傾して立ち上がるものと思われる。

**床** ほぼ平坦であり、全体的に軟弱である。

**竈** 北壁中央部に壁外に50cmほど掘り込み、山砂を主として構築されている。両袖とも、補強材として石が用いられている。火床部奥から自然石が出土しており、支脚として用いられたと考えられる。火床は、床面を



第80図 第35号住居跡実測図

15cmほど掘り深め、赤変硬化している。煙道部は、火床から緩やかに立ち上がる。覆土は4層からなる。

**覆土層解説**

- |                           |                           |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 によい褐色 焼土中ブロック微量、砂質を帯びる  | 3 によい赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック微量 |
| 2 によい褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック少量 | 4 灰褐色 ローム粒子少量、砂質を帯びる      |

**覆土** 2層からなり、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

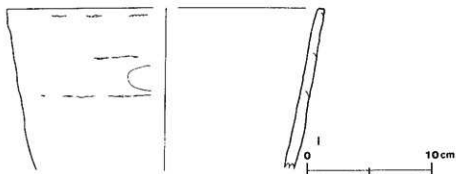
- |                                   |
|-----------------------------------|
| 1 灰褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・黒色粒子微量         |
| 2 黒褐色 ローム大ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量 |

**遺物** 土師器片72点、須恵器片8点、石3点が出土している。1の須恵器鉢は電から出土している。

**所見** 本跡は、平安時代前期（9世紀末）の住居跡である。

第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手丈の特徴	胎土・色裏・焼成	備考
第81図 1	鉢 須恵器	A [25.4] B (12.9)	体部から1縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、1縁部に至る。	1縁部横ナマ。体部外面上位に指摺圧痕。	黄土・石英・雲母 スコリア 褐色 普通	P270 10% 電部



第81図 第35号住居跡出土遺物実測図

### 第36号住居跡 (第82図)

位置 C区西部, A1j9区

規模と平面形 長軸3.35m, 短軸3.10mのほぼ方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は20~30cmであり, 外傾して立ち上がる。

床 平坦であり, 竈部前面から両側壁にかけて特に踏み固められている。

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>は径25cmの円形で, 深さ12cmである。P<sub>2</sub>は径25×20cmの楕円形で, 深さ12cmである。P<sub>3</sub>は径20cmの円形で, 深さ15cmである。P<sub>4</sub>は径20cmの円形で, 深さ10cmである。P<sub>1</sub>~3は主柱穴, P<sub>4</sub>は出入り口関連の柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部を壁外に60cmほど掘り込んで作られている。袖部は山砂を主体に構築されているが, 南側が攪乱を受けているため, 遺存状態は良くない。規模は, 長さ90cm, 幅12cmである。火床は床面をわずかに掘り窪めた程度で赤変硬化している。煙道部は火床から外傾して立ち上がる。覆土は2層からなる。

#### 竈土層解説

- 1 白褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 砂質を帯びる
- 2 灰褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量, 砂質を帯びる

覆土 3層からなり, 自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

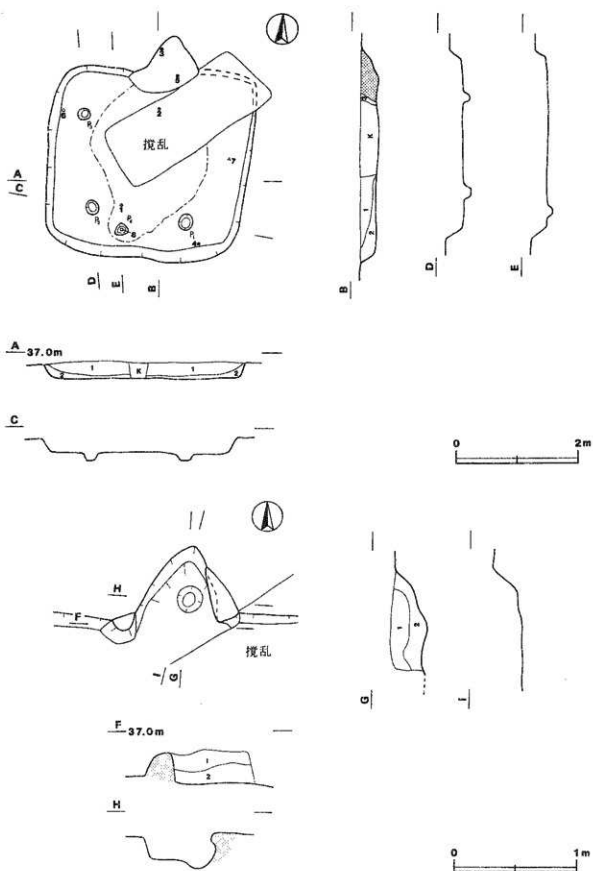
- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量, 砂質を帯びる

遺物 土師器片450点, 須恵器片27点, 土製紡錘車1点, 砥石1点が出土している。3の土師器高台付坏は竈煙道部から, 4の土師器壺は南側床面から, 5の須恵器鉢は竈部から8の砥石はP<sub>4</sub>上面からそれぞれ出土している。

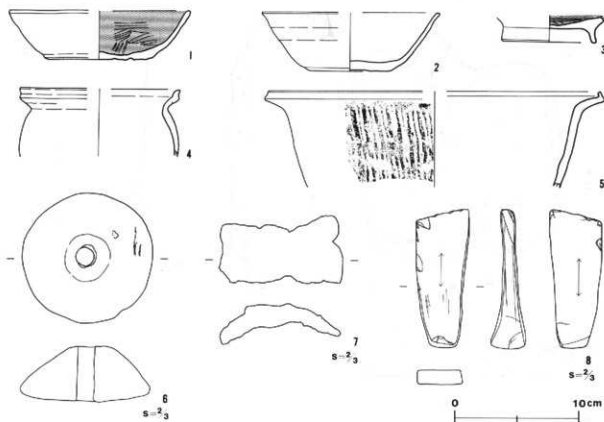
所見 本跡は, 平安時代前期 (9世紀末) の住居跡である。

### 第36号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第83図 1	坏 土師器	A [14.4] B (4.0) C 8.4	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部に至る。	体部外面ロクロナデ, 内面へう磨き。底部回転へう切り。	長石・石英・雲母 灰褐色 青濁	P273 10% 覆土下層 内面黒色処理
2	坏 須恵器	A [14.1] B 4.8 C 6.6	底部から口縁部にかけての破片。体部下半は丸味を持って立ち上がり, 口縁部でわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へう切り後, へう磨り。	長石・石英・雲母 棕色 青濁	P272 40% 床面



第82图 第36号住居跡実測图



第83図 第36号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 3	高台付環土器	B ( 2.2) D 7.6 E 1.1	底片。高台は弱く「ハ」の字状に開く。	内面へラ磨き。高台部貼り付け後、ロクロナデ。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P276 20% 煙道部 内面黒色処理
4	壺土器	A [12.8] B ( 5.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 よい橙色 普通	P277 10% 床面
5	鉢酒器	A [26.6] B ( 7.7)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部、体部内面横ナデ、外面縦位の平行叩き。口縁端部直下外面に比線が印される。	長石・石英・雲母 よい褐色 普通	P279 5% 甕部

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		最大幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第83図6	紡錘車	5.2	2.2	0.7	53.0	覆土中層	DP7

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第83図7	不明鉄製品	2.2	5.0	0.4	17.0	M8 覆土上層

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第83図8	砥石	11.1	4.3	2.8	100.0	凝灰岩	Pi上面	Q22

表2 住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主要方向 (長軸方向)	平面形状	規模(m) (長軸×短軸)	高さ (cm)	基壇	内部施設			欄干	出土遺物	備考 (点検箇所)			
							壁跡	柱礎	出入口						
1	B11a	N 1'-W	方形	3.70 × 3.50	30~40	平礎	無	0	1	0	1	2	自然 土師器、須恵器、石製品、鉄製品、鏡片、鏡石		
2	B11j	N-87° E	長方形	3.20 × 2.60	15~25	平礎	無	3	1	0	0	1	自然 土師器、須恵器、鏡石		
3	C11ca	N-85°-W	(長方形)	(3.00 × 2.20)	2	平礎	無	1	0	1	0	1	自然 土師器	SD-3より古い	
4	C11cb	N 38'-W	方形	5.30 × 5.20	35~45	平礎	無	4	0	1	1	1	自然 土師器、須恵器、石製品、鉄製品、鏡片、鏡石、土師器	SD-3より古い	
5	B12j	(N 57'-W)	不明	-	-	平礎	無	3	0	0	0	1	人為 土師器、須恵器、石製品、鉄製品、鏡片、鏡石		
6	C12ca	N-36° E	長方形	3.70 × 2.47	5	平礎	無	3	1	0	0	1	自然 土師器、須恵器、石製品、鏡石		
7	C11da	N-38'-W	方形	3.40 × 3.13	45	平礎	全周	4	0	2	0	1	自然 土師器、須恵器、石製品、鏡石		
8	C9ds	N 46'-E	方形	2.84 × 2.55	20~25	平礎	無	0	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、鏡石		
9	C9d	N-26° W	方形	2.66 × 2.57	10~20	平礎	無	0	0	4	0	1	自然 土師器、須恵器、鏡石		
10	C8dr	N 38'-W	方形	2.45 × 2.40	13~20	平礎	無	1	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、石製品、鉄製品、鏡石		
11	C8cr	N-17'-W	(方形)	4.25 × (4.20)	20~40	平礎	無	4	0	1	1	1	自然 土師器、須恵器、鏡石		
12	C8da	N-57° W	方形	3.70 × 3.50	25~35	平礎	無	4	0	0	1	1	自然 土師器、須恵器、鏡石	SI-16より新しい	
13	C9er	N 47'-E	方形	3.40 × 2.85	20~25	平礎	無	0	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、鏡石	SI 13・15より古い	
14	C9d	不明	不明	-	5~20	平礎	無	3	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、石製品、土師器、鏡石	SI-14より新しい SI 15より古い	
15	D9e	不明	不明	-	30	平礎	無	1	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、石製品、鉄製品、鏡石	SI 13・14より新しい	
16	C9d	N 50'-W	長方形	3.60 × 2.90	10~20	平礎	無	3	0	1	1	1	自然 土師器、須恵器、石製品、鏡石	SI-12より古い	
17	C8ar	N-50° W [長方形]	-	-	15~25	平礎	無	2	0	0	0	-	自然 土師器、鏡石		
18	C7dr	N 16° W [長方形]	-	-	30	平礎	無	0	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、鏡石		
19	C9aa	不明	不明	-	30	平礎	無	1	0	0	0	-	自然 土師器、須恵器、土師器、鏡石	SP-1より古い	
20	C9as	不明	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	土師器、須恵器 電の点検	
21	C9fs	N-62° W	不明	-	20	平礎	無	1	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、鏡石		
22	C7as	N 5°-E [長方形]	-	-	35~65	平礎	無	2	2	0	0	1	自然 土師器、須恵器、石製品、陶器		
23	C7ca	N 4° W [長方形]	-	-	25~40	平礎	無	4	0	0	0	2	自然 土師器、須恵器、鉄製品、石製品、鏡石		
24	C6bs	N-7°-E	方形	3.40 × 3.40	35~40	平礎	無	2	0	0	1	1	自然 土師器、須恵器、鉄製品、石製品、鏡石		
25	C6as	N-80°-E	方形	3.00 × 3.00	25~45	平礎	無	4	1	0	1	1	自然 土師器、須恵器、鉄製品、鏡石		
26	C6la	N 4°-E	方形	2.00 × 2.00	12	平礎	無	0	0	0	0	-	自然 土師器、須恵器		
27	B3ha	N-92°-E	方形	3.00 × 3.00	20~30	平礎	無	0	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器	SK-61より古い	
28	C7ca	不明	不明	-	40	平礎	無	0	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、鏡石		
29	B4ha	N 5°-W	不明	-	30	平礎	無	0	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、石製品		
30	B2b	N-82°-W	長方形	3.03 × 2.56	40	平礎	無	0	0	0	1	1	自然 土師器、須恵器、鉄製品、石製品、鏡石		
31	B2ds	N-11°-E	不明	4.00 × (2.63)	35~40	平礎	無	1	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、石製品、鉄製品、鏡石		
32	B2be	N-12°-E	長方形	2.85 × 2.50	13	平礎	無	0	0	0	0	-	自然		
33	B2bs	N 0°	長方形	3.05 × 2.58	5	平礎	無	3	0	0	0	-	自然 土師器、須恵器		
34	B2aa	不明	不明	-	40	平礎	無	0	1	0	0	-	自然 土師器、須恵器、鏡石		
35	B2ce	(N-10°-W)	[長方形]	3.20 × (2.90)	6	平礎	無	0	0	0	0	1	自然 土師器、須恵器、土師器、石製品、鏡石	SK 71より古い	
36	A1js	N 3°-E	方形	3.35 × 3.70	20~30	平礎	無	3	0	0	1	1	自然 土師器、須恵器、土師器、石製品、鏡石		
37	C8bs	不明	[楕円形]	[4.80 × 3.80]	-	平礎	無	7	0	7	0	-	-	縄文土器、土師器、鏡石	

### 3 土坑

当遺跡からは、土坑94基が確認された。ここでは時代が推定できるものや、特徴的なものについて記述し、他は一覧表に掲載する。

#### 第1号土坑（第87図）

位置 A区中央部、C9c9区

新旧関係 本跡は、第2号溝と重複しており、第2号溝を本跡が掘り込んでいるので本跡が新しい。

規模と平面形 長径3.30m、短径2.76mの隅丸長方形で、深さ170cmである。

長径方向 N-67-E

壁面 外傾して立ち上がる。北西部が階段状を呈する。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 10層からなり、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量     | 6 褐色 小円礫少量、砂質を帯びる     |
| 2 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量      | 7 褐色 ロームブロック少量        |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量          | 8 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量 |
| 4 褐色 ローム小ブロック少量、砂質を帯びる | 9 暗褐色 ローム小ブロック少量      |
| 5 褐色 炭化粒子少量、砂質を帯びる     | 10 暗褐色 ローム粒子少量        |

遺物 覆土中から土師器片40点、須恵器片8点が出土しているが、いずれも小破片であり、図示できるものはない。

所見 本跡は、壁面の崩落が著しく、竪坑と主室の区別は明確にはできなかったが、北西部壁面が階段状を呈するのは竪坑の痕跡であると思われる。また、底面の形状などからみて地下式墳と判断した。

#### 第2号土坑（第87・94図）

位置 A区東部、C11d7区

規模と平面形 長径2.70m、短径1.75mの不整楕円形で、最深部で深さ53cmである。

長径方向 N 60°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 「U」字状を呈する。

覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。

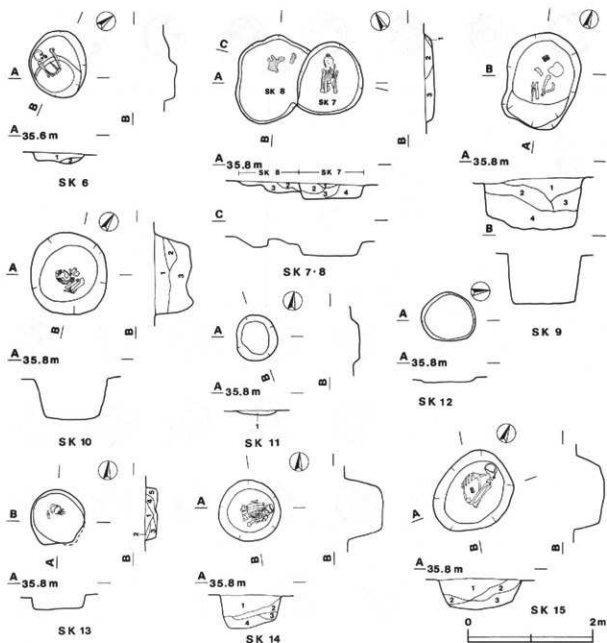
##### 土層解説

- |                                    |
|------------------------------------|
| 1 灰褐色 ローム粒子多量、黒色中ブロック少量、ローム大ブロック微量 |
| 2 にぶい褐色 黒色中ブロック少量                  |
| 3 にぶい褐色 ローム小ブロック少量、黒色中ブロック微量       |
| 4 灰褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック微量         |
| 5 褐色 ローム中ブロック少量、焼土小ブロック微量          |

遺物 覆土中から、縄文土器片8点、土師器片12点が出土している。第94図1・4は縄文早期の沈線文土器の胴部片である。1は斜格子目文と平行線文が施されており、三戸式土器と思われる。4は太い沈線が横位に施されている。2・3は条痕文土器で胎土に繊維が含まれている。

所見 覆土中より縄文土器と土師器が混在して出土しており、本跡の時期は不明である。





第84図 土坑実測図

第6号土坑 (第84・85図)

位置 A区東部, C11c区

規模と平面形 長径1.10m, 短径0.90mの楕円形で、深さ20cmである。

長径方向 N-38°-E

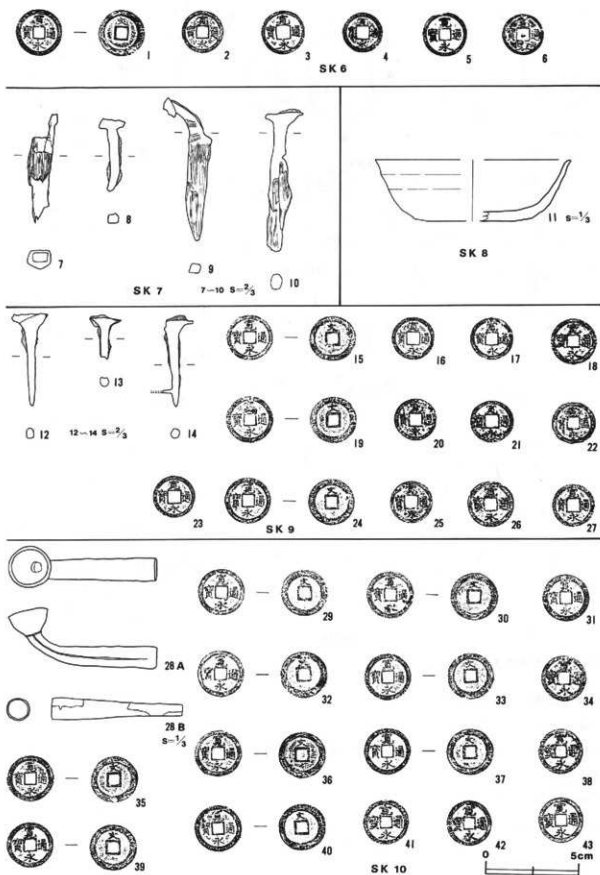
壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 段を持つ。

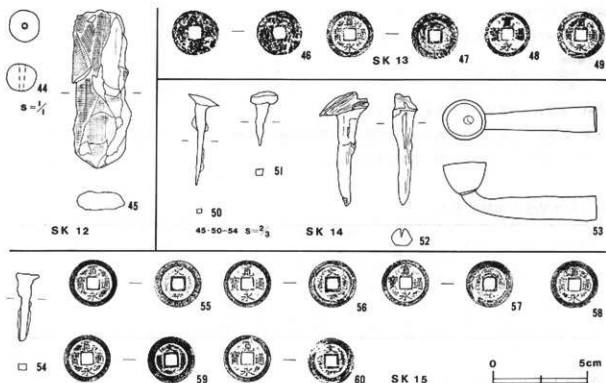
覆土 2層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム中ブロック主体



第85図 土壌出土遺物実測・拓影図(1)



第66図 土壌出土遺物実測・拓影図(2)

遺物 覆土中から、人骨および銅銭（寛永通寶）が出土している。銅銭は、6枚をきちんと重ねて布でくるんであった。

所見 本跡は、人骨と共に銅銭（寛永通寶）が出土していることから江戸期の墓塚と考えられる。

#### 第6号土壌出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値			備 考
		径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
第85図1	寛永通寶	2.5	1.1	2.4	M10 背に「文」 覆土下層 100%
2	寛永通寶	2.3	1.2	2.1	M11 覆土下層 100%
3	寛永通寶	2.4	1.1	2.9	M12 覆土下層 100%
4	寛永通寶	2.2	1.0	1.9	M13 覆土下層 100%
5	寛永通寶	2.4	1.5	3.7	M14 覆土下層 100%
6	寛永通寶	2.3	1.0	1.9	M15 覆土下層 100%

#### 第7号土壌 (第84・85図)

位置 A区東部, C10c区

重複関係 北西部で、第8号土壌と重複している。本跡が第8号土壌の覆土を掘り込んでいることから本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.20m, 短径1.00mの楕円形で、深さ25cmである。

長径方向 N-45°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量   | 3 褐色 ローム粒子多量    |
| 2 褐色 ローム小ブロック少量 | 4 褐色 ローム小ブロック少量 |

遺物 人骨および鉄製品、鉄銭6枚が出土している。

所見 本跡は、人骨と共に腐食のすすんだ鉄銭（実際に流通した貨幣ではなく、埋葬用の銭と考えられる。）が出土していることから江戸期の墓墳と考えられる。

第7号土壌出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第85図 7	不明鉄製品	4.4	1.0	0.8	1.6	M22
8	釘	3.0	0.4	0.4	1.3	M24
9	釘	5.9	0.4	0.6	2.8	M25A
10	釘	5.9	0.4	0.4	3.3	M25B

第8号土壌 (第84・85図)

位置 A区東部、C10b区

重複関係 北東部で、第7号土壌と重複している。本跡の覆土を第7号土壌が掘り込んでいることから本跡が古い。

規模と平面形 長径1.50m、短径1.10mの楕円形で、深さ20cmである。

長径方向 N-46°-E

壁面 なだらかに立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- |                       |              |
|-----------------------|--------------|
| 1 褐色 ローム小ブロック少量       | 3 褐色 ローム粒子微量 |
| 2 褐色 焼土小ブロック少量、砂質を帯びる |              |

遺物 本跡北東寄りに、二次加熱を受けた須恵器坏と雲母片岩を焼土塊が囲むような状態で確認された。

所見 焼土塊および二次加熱を受けた雲母片岩や坏の出土状態から考えて、火葬墓の性格が強い遺構と考えられる。また、時期については、出土している坏から奈良時代（8世紀代）と考えられる。

第8号土壌出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 11	坏 土器	A [ 16.0 ] B 5.0 C [ 9.4 ]	体部下端に丸味を持ち、体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底面回転糸切り。	長石・石英・雲母スコリア・バミス および褐色 普通	P283 30%

### 第9号土壌 (第84・85図)

位置 A区東部, C10c<sub>9</sub>区

規模と平面形 長径1.50m, 短径1.20mの楕円形で、深さ80cmである。

長径方向 N-9°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック多量  
2 褐色 ローム大ブロック少量

- 3 暗褐色 ローム小ブロック主体  
4 暗褐色 ローム小ブロック主体、ザクザクした感じ

遺物 人骨と共に銅銭(寛永通寶)13枚が出土している。銅銭には、布にくるまっていたと思われる痕跡が認められた。

所見 本跡は、人骨と共に銅銭(寛永通寶)が出土していることから江戸期の墓塚と考えられる。

### 第9号土壌出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値				備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第85図12	釘	3.9	0.3	0.4	1.2	M39	覆土中
13	釘	(1.9)	0.4	0.4	0.4	M40	覆土中
14	釘	(3.8)	0.3	0.4	1.2	M41	覆土中

図版番号	器 種	計 測 値			備 考		
		径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)			
第85図15	寛永通寶	2.5	1.4	3.7	M26	背に「文」	覆土下層 100%
16	寛永通寶	2.5	1.2	3.5	M27	背に「文」	覆土下層 100%
17	寛永通寶	2.4	1.4	3.0	M28		覆土下層 100%
18	寛永通寶	2.3	1.1	2.7	M29		覆土下層 100%
19	寛永通寶	2.5	1.1	2.6	M30		覆土下層 100%
20	寛永通寶	2.3	1.1	2.4	M31		覆土下層 100%
21	寛永通寶	2.3	1.1	2.7	M32		覆土下層 100%
22	寛永通寶	2.4	1.3	2.9	M33		覆土下層 100%
23	寛永通寶	2.3	1.2	2.5	M34		覆土下層 100%
24	寛永通寶	2.3	1.0	2.6	M35		覆土下層 100%
25	寛永通寶	2.5	1.3	3.6	M36		覆土下層 100%
26	寛永通寶	2.5	1.2	3.2	M37		覆土下層 100%
27	寛永通寶	2.5	1.1	2.7	M38		覆土下層 100%

### 第10号土壌 (第84・85図)

位置 A区東部, C10c<sub>9</sub>区

規模と平面形 径1.20m前後の円形で、深さ65cmである。

長径方向 N-20°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 3層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック主体  
2 暗褐色 ローム小ブロック主体

- 3 褐色 ローム大ブロック主体

遺物 人骨と銅銭（寛永通寶）15枚および煙管が出土している。銅銭には、布にくるまっていたと思われる痕跡が認められた。

所見 本跡は、人骨と共に銅銭（寛永通寶）が出土していることから江戸期の墓塚と考えられる。

第10号土塚出土遺物観察表

図版番号	類 種	計 測 値				備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第85回28A	煙管 煙首	6.0	2.3	0.9	8.7	M57
28B	煙管 吸口	5.3	0.9	0.9	3.0	M57

図版番号	類 種	計 測 値			備 考
		径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
第85回29	寛永通寶	2.5	1.5	4.1	M42 背に「文」 覆土下層 100%
30	寛永通寶	2.5	1.2	3.7	M43 覆土下層 100%
31	寛永通寶	2.5	1.3	3.4	M44 覆土下層 100%
32	寛永通寶	2.5	1.1	3.5	M45 覆土下層 100%
33	寛永通寶	2.5	1.3	3.6	M46 背に「文」 覆土下層 100%
34	寛永通寶	2.5	1.2	3.7	M47 覆土下層 100%
35	寛永通寶	2.5	1.4	3.7	M48 背に「文」 覆土下層 100%
36	寛永通寶	2.5	1.2	3.2	M49 背に「文」 覆土下層 100%
37	寛永通寶	2.5	1.1	3.5	M50 背に「文」 覆土下層 100%
38	寛永通寶	2.5	1.0	3.2	M51 覆土下層 100%
39	寛永通寶	2.5	1.4	3.4	M52 背に「文」 覆土下層 100%
40	寛永通寶	2.5	1.3	3.7	M53 背に「文」 覆土下層 100%
41	寛永通寶	2.5	1.2	3.6	M54 背に「文」 覆土下層 100%
42	寛永通寶	2.5	1.5	4.3	M55 背に「文」 覆土下層 100%
43	寛永通寶	2.5	1.6	4.0	M56 覆土下層 100%

第11号土塚（第84図）

位置 A区東部，C10c9区

規模と平面形 長径0.75m，短径0.65mの楕円形で，深さ12cmである。

長径方向 N-36°-W

壁面 壁高15cmとかなり低い，外傾して立ち上がるものと思われる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 単一層であり，ローム中ブロック少量を含む褐色土で，人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中から，黒曜石剥片が1点出土している。

所見 本跡は，時期の決定できる遺物がなく不明であるが，覆土の状態および周辺が江戸期の墓塚であるという位置的なことを考えあわせると第6・7・9・10号土塚と同じ時期，性格と考えておきたい。

### 第12号土壌 (第84・86図)

位置 A区東部, C10c<sub>9</sub>区

規模と平面形 径0.85m前後の円形で、深さ6cmである。

長径方向 N-2°-E

壁面 壁高6cmとかなり低く不明である。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 遺構確認の段階で人骨が出土してしまったため、覆土は明確にはとらえられなかった。

遺物 人骨と鉄製品(釘)、数珠玉1点が出土している。

所見 本跡は、人骨および鉄製品(釘)の残存状態等から、第11号土壌と同時期としておきたい。

第12号土壌出土遺物観察表

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		最大径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第86図44	数 珠 玉	0.8	0.7	0.1	0.82	メノウ	覆土下層	Q25

図版番号	器 種	計 測 値				備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第86図45	不明鉄製品	6.4	1.9	0.7	18.0	M58	縦横付着

### 第13号土壌 (第84・86図)

位置 A区東部, C10b<sub>9</sub>区

規模と平面形 径0.90m前後の円形で、深さ20cmである。

長径方向 N-34°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 褐色 ローム粒子少量    | 4 褐色 炭化粒子微量     |
| 2 褐色 ローム小ブロック主体 | 5 褐色 ローム小ブロック少量 |
| 3 褐色 ローム粒子微量    |                 |

遺物 人骨と銅銭(寛永通寶)4枚が出土している。

所見 本跡は、人骨および銅銭の残存状態等から、江戸期の墓塚と考えられる。

第13号土壌出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値			備 考
		径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
第86図46	寛永通寶	2.4	1.2	2.2	M59 覆土下層 100%
47	寛永通寶	2.4	1.4	3.7	M60 覆土下層 100%
48	寛永通寶	2.5	1.3	3.8	M61 背に「文」 覆土下層 100%
49	寛永通寶	2.5	1.4	3.0	M62 背に「文」 覆土下層 100%

#### 第14号土壌（第84・86図）

位置 A区東部，C10b<sub>0</sub>区

規模と平面形 径1.00m前後の円形で、深さ62cmである。

長径方向 N-28°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 4層からなり、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 褐色 ローム小ブロック主体 | 3 褐色 ローム小ブロック主体 |
| 2 褐色 ローム大ブロック少量 | 4 褐色 ローム粒子主体    |

遺物 人骨と煙管の雁首が1点出土している。

所見 本跡は、人骨および煙管の残存状態等から、江戸期の墓塚と考えられる。

#### 第14号土壌出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値				備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第86図50	釘	4.5	0.9	0.7	1.9	M63	覆土中
51	釘	3.7	1.2	0.2	1.0	M64A	覆土中
52	釘	2.2	1.2	0.3	0.6	M64B	覆土中
53	煙管雁首	6.2	1.0	0.9	8.8	M65	覆土下層

#### 第15号土壌（第84・86図）

位置 A区東部，C10b<sub>0</sub>区

規模と平面形 長径1.40m，短径1.10mの楕円形で、深さ48cmである。

長径方向 N-33°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状を呈する。

覆土 3層からなり、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 褐色 ローム小ブロック多量 | 3 暗褐色 ローム中ブロック主体 |
| 2 褐色 ローム小ブロック主体 |                  |

遺物 人骨と銅銭（寛永通寶）6枚が出土している。

所見 本跡は、人骨および銅銭から江戸期の墓塚と考えられる。

#### 第15号土壌出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値				備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第86図54	釘	2.7	0.9	0.2	0.7	M72	覆土中

図版番号	器 種	計 測 値			備 考	
		径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
第86図55	寛永通寶	2.5	1.2	3.2	M66	背に「文」 覆土下層 100%



図版番号	器 種	計 測 値			備 考
		径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	
第86図36	寛永通寶	2.5	1.2	3.7	M67 背に「文」 覆土下層 100%
57	寛永通寶	2.5	1.3	3.6	M68 背に「文」 覆土下層 100%
58	寛永通寶	2.5	1.2	3.3	M69 背に「文」 覆土下層 100%
59	寛永通寶	2.5	1.2	3.1	M70 背に「文」 覆土下層 100%
60	寛永通寶	2.5	1.1	3.4	M71 背に「文」 覆土下層 100%

### 第16号土坑 (第87図)

位置 A区東部, C10cs区

規模と平面形 長径2.00m, 短径1.60mの隅丸長方形で, 深さ5~13cmである。

長径方向 N-87°-E

壁面 壁高が低く, 正確には不明であるが, ほぼ外傾して立ち上がるものと思われる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色 炭化粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム小ブロック主体

遺物 土師質土器が北壁寄りから出土している。

所見 本跡は, 形状および出土遺物から判断して中世の墓墳的色彩の強い遺構と考えられる。

### 第16号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第94図 6	環 土師質土器	A [10.3] B 2.6 C 5.8	体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部で外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底面回転ヘタ削り。	雲母・スコリア 褐色 普通	P285 70%

### 第17号土坑 (第87図)

位置 A区中央部, C10cs区

規模と平面形 長径0.90m, 短径0.78mの楕円形で, 深さ20cmである。

長径方向 N-41°-W

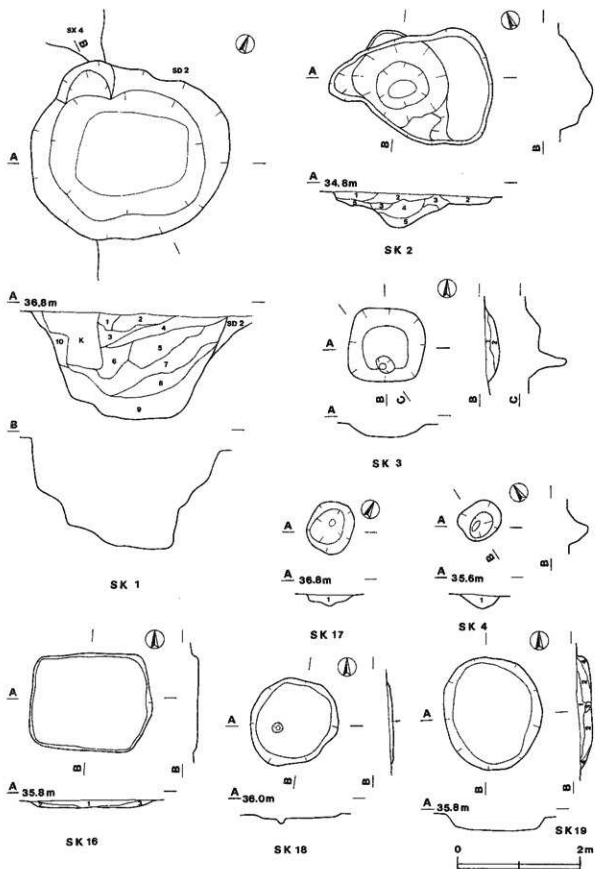
壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状を呈する。

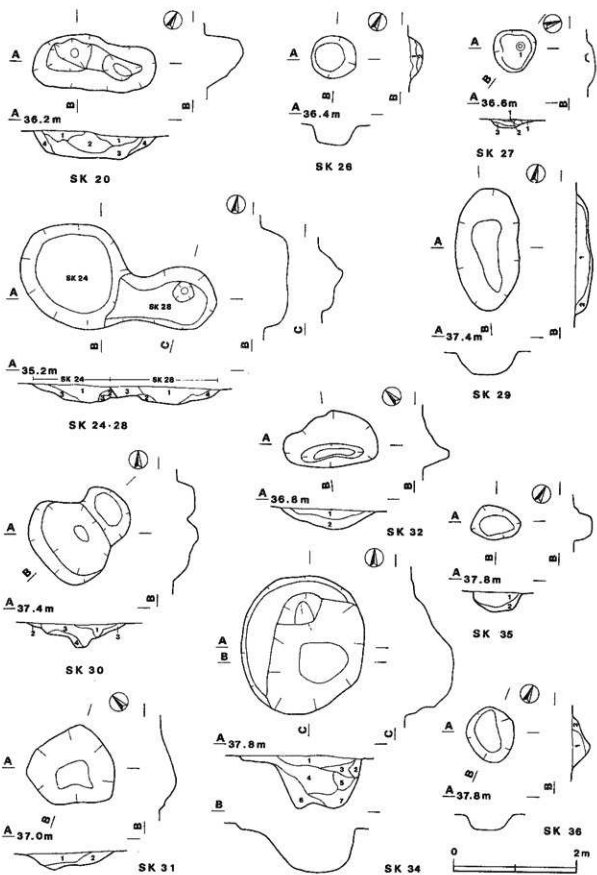
覆土 単一層であり, ローム粒子少量を含む褐色土で, 自然堆積と考えられる。

遺物 覆土下層から, 縄文早期の深鉢形土器の尖底部 (第94図7) が出土している。

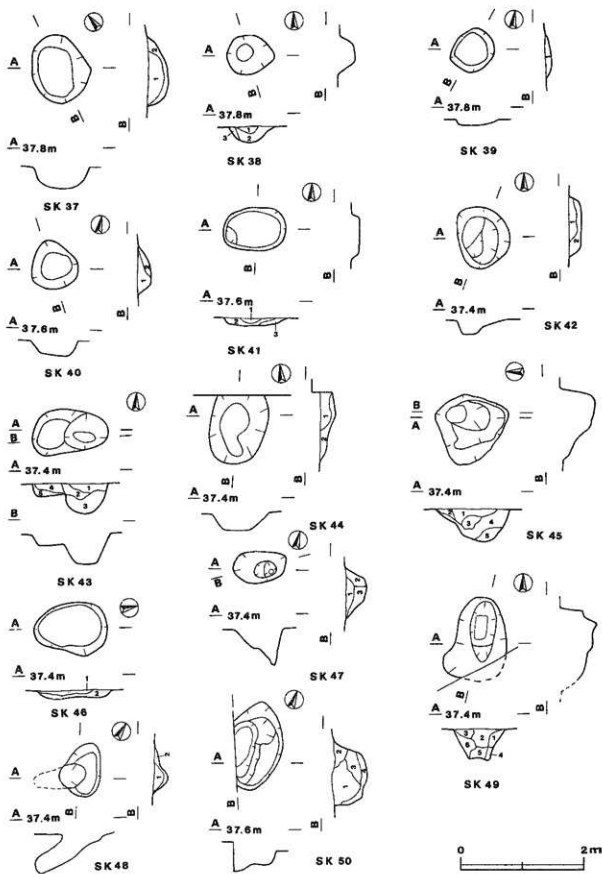
所見 本跡は, 出土遺物から縄文時代早期のものである。



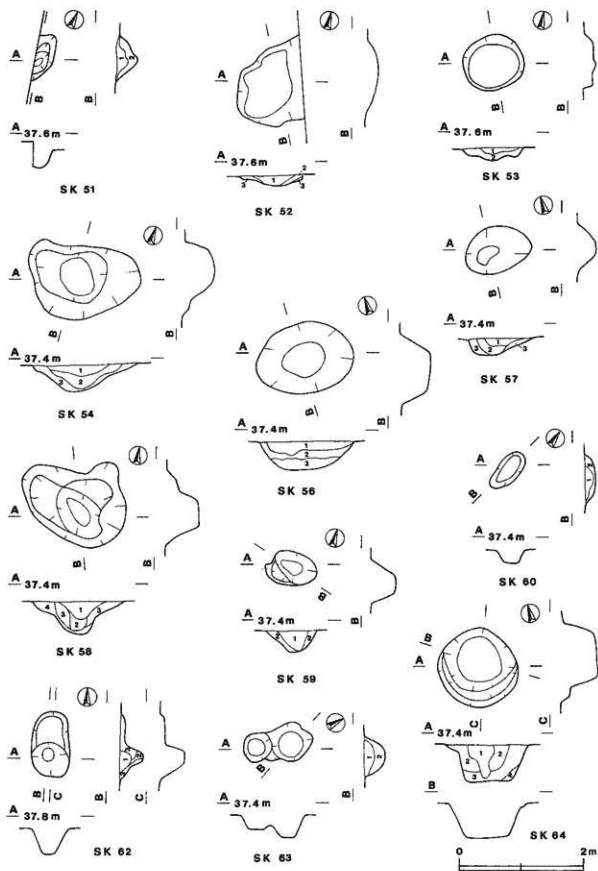
第87图 土坑实测图(1)



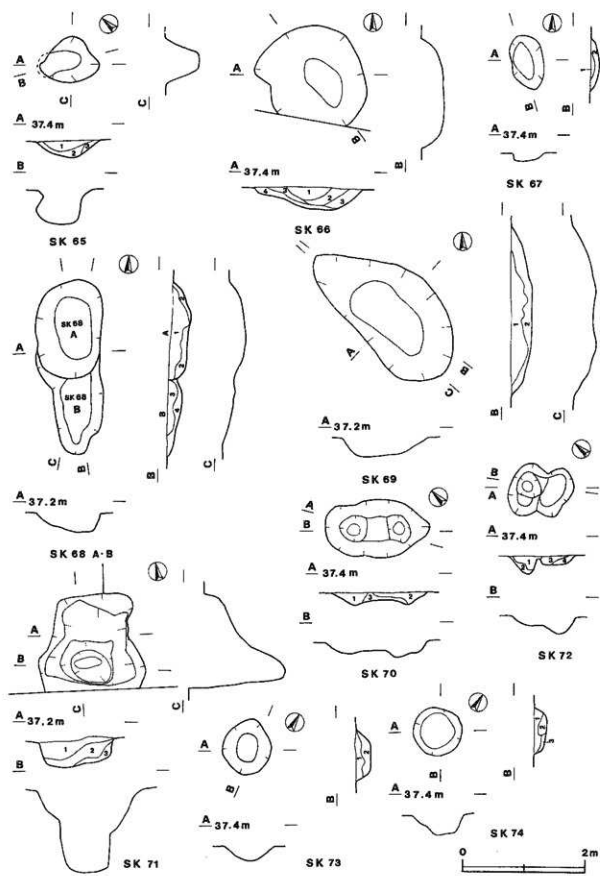
第88图 土坑实测图(2)



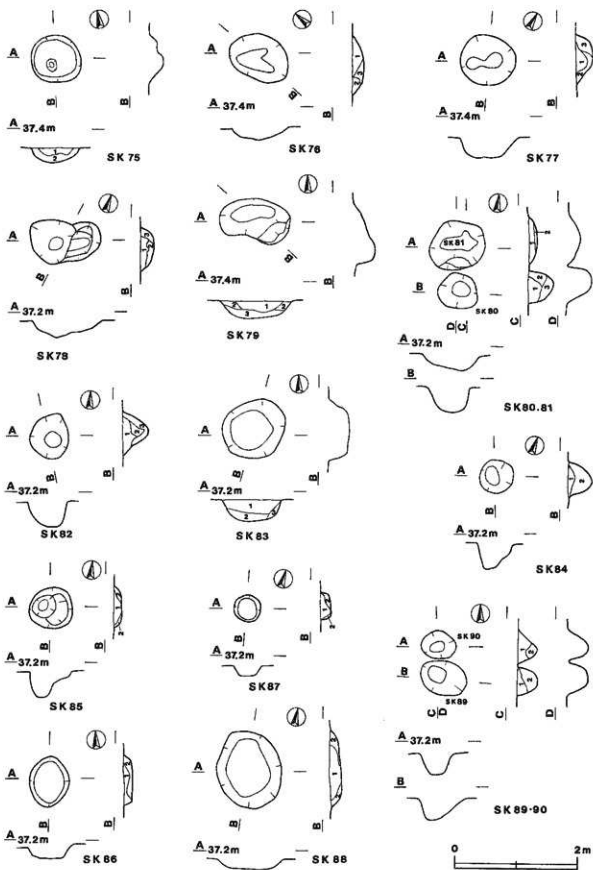
第89图 土坑实测图(3)



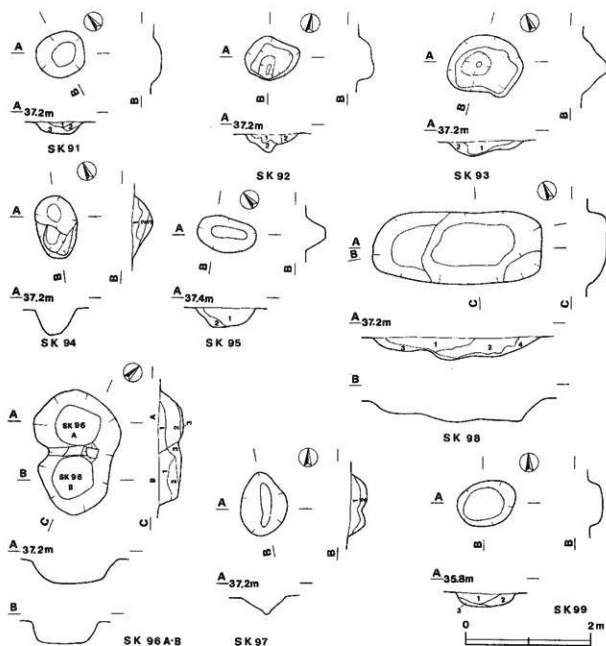
第90图 土坑实测图(4)



第91图 土坑实测图(5)



第92图 土坑实测图(6)



第93図 土坑実測図(7)

第20号土坑出土遺物観察表

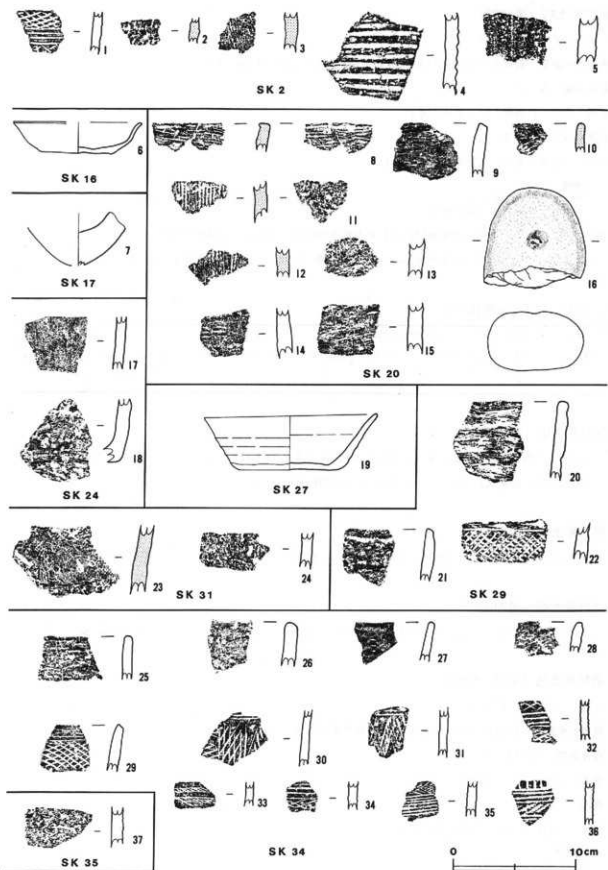
図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第94図16	凹石	8.0	8.2	4.8	460.0	凝灰岩	覆土中	Q50

8・10～12は条痕文土器で、胎土に繊維が含まれている。8・11は内・外面に貝殻条痕が施されている。9・13～15は無文土器である。胎土に石英、長石が含まれている。16は凹石である。

第24号土坑 (第94図)

17は深鉢形土器の胴部片である。18は底部片で、網代痕が認められる。胎土に雲母が含まれている。胎土からみると、両者とも縄文中期阿玉台式土器と思われる。





第94図 土坑出土遺物実測図

### 第27号土坑（第88図）

位置 A区中央部，C10c<sub>1</sub>区

規模と平面形 長径0.75m，短径0.65mの不整形円形で，深さ15cmである。

長径方向 N-0°

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状を呈する。

覆土 3層からなり，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 焼土粒子微量，山砂  
2 暗褐色 焼土粒子少量，砂質を帯びる  
3 褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物 覆土中から，逆位の須恵器環のまわりを焼土塊が取り囲むような状態で出土している。

所見 本跡は，遺物および出土状態から，第8号土壇と同じように火葬墓の色彩が強いものと思われる。

### 第27号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第94図 19	環 須 恵 器	A 14.1 B 4.7 C 8.3	体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	体部内・外側ロクロナデ。底面へタテ削り。	長石・石英・雲母 小礫・バミス に多い黄褐色 普通	P235 95% 二次加熱が著しい

### 第29号土坑（第94図）

20は縄文早期の円線文土器である。胎土に大粒の石英粒が含まれている。21は無文土器である。22は沈線による斜格子目文が施されている。いずれも三戸式段階と思われる。

### 第31号土坑（第94図）

23は条痕文土器で，胎土に繊維が含まれている。24は無文土器で，横位のナデ整形がなされている。

### 第34号土坑（第94図）

25～28は無文土器である。29～36は，格子目文，平行沈線文が施され，三戸式段階と思われる。

### 第35号土坑（第88・94図）

位置 B区東部，C7a<sub>3</sub>区

規模と平面形 長径0.83m，短径0.57mの横円形で，深さ30cmである。

長径方向 N-64°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなり，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量  
2 褐色 ロームブロック主体

遺物 覆土中から，縄文早期の無文土器片（第94図37）が出土している。

所見 本跡は，出土遺物から縄文時代早期のものと考えられる。

### 第96-A号土坑 (第93・95図)

位置 C区西部, B2c7区

重複関係 第96-B号土坑の覆土を本跡が掘り込んでいるので, 本跡が新しい。

規模と平面形 長径1.40m, 短径1.00mの楕円形で, 深さ35cmである。

長径方向 N-59°-W (2基の重複でそれぞれ円形のため, A・B号土坑の長軸で計測)

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり, 自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色 焼土粒子少量

2 暗褐色 焼土粒子微量, 砂質を帯びる

3 褐色 ロームブロック少量

遺物 覆土中から, 5の須恵器鉢が出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から9世紀後半と考えられる。

### 第96-B号土坑 (第93・95図)

位置 C区西部, B2c7区

重複関係 本跡覆土を第96-A号土坑が掘り込んでいるので, 本跡が古い。

規模と平面形 径1.10m前後の円形で, 深さ40cmである。

長径方向 N-59°-W (重複のため, A・B号土坑の長軸で計測)

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり, 自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

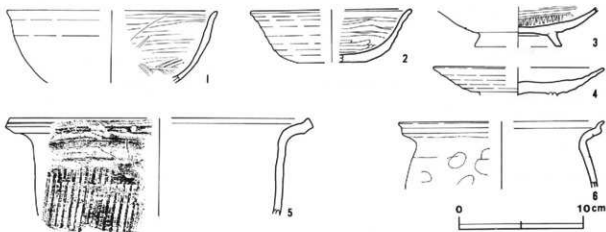
1 暗褐色 焼土粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

3 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子微量

遺物 覆土中から, 第95図1・2の土師器杯, 3の土師器高台付碗, 6の土師器壺, 4の須恵器高台付皿が出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から9世紀末から10世紀初頭と考えられる。



第95図 第96-A・B号土坑出土遺物実測図

第96-A・B号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 1	坏土師器	A [16.8] B ( 5.8)	底部欠損。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁部との境に弱い稜を持つ。	体部外面ロクロナデ、内面へう磨き。	長石 にふい青褐色 普通	P289 20% 96-B
2	坏土師器	A [12.8] B 4.1 C [ 5.3]	体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ、内面へう磨き。底部凹縁へう削り。	長石・石英・雲母 スクリア にふい棕色 普通	P290 30% 96-B
3	高台付甗 土師器	B ( 3.2) D [ 7.0] E 1.2	底部から体部下陥片。体部は丸味を持って立ち上がり、高台は「ハ」の字状に開く。	体部外面ナデ、内面へう磨き。底部凹縁へう削り後、高台部貼り付け。	長石・石英・雲母 スクリア 明赤褐色 普通	P291 30% 96-B
4	高台付甗 須恵器	A [13.3] B ( 2.2) E ( 0.3)	高台部欠損。体部は外傾して口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部凹縁へう削り後、高台部貼り付け。	長石・石英・雲母 スクリア にふい褐色 不良	P294 30% 96 B
5	鉢 須恵器	A [14.0] B ( 7.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎丸味に立ち上がり、口縁部で強く外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面ナデ、外面履位の平行叩き。	石英・雲母 にふい黄褐色 普通	P292 10% 96-A
6	甗 土師器	A [16.4] B ( 5.4)	体部から口縁部の破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でくゞの字状に外反する。口縁部はつよみ上げられ外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面に指頭口縁。	長石・石英・雲母 にふい棕色 普通	P293 10% 96-B

第3号土坑土層解説

- 1 にふい褐色 ローム粒子少量
- 2 にふい褐色 ローム粒子微量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量、ローム小ブロック中量

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム少量

第19号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子少量

第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム中ブロック少量

第24号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 2 にふい褐色 ローム粒子中量
- 3 にふい褐色 ローム粒子少量

第26号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

第28号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム小ブロック少量
- 2 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量

第29号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック微量、ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

第38号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム小ブロック微量
- 2 灰褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

4 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子中量

第31号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量
- 2 にふい褐色 ローム中ブロック少量、ローム小ブロック中量

第32号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック微量、ローム粒子少量

第34号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、粘性を帯びる
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、粘性を帯びる

第36号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第37号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量

第38号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

第39号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子微量

第40号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第41号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第42号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第43号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム小ブロック少量

第44号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量

第45号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量
- 5 褐色 ローム小ブロック中量

第46号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量

第47号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第48号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

第49号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック少量
- 5 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

**第50号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム小ブロック少量

**第51号土壌層解説**

- 1 赤褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第52号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

**第53号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

**第54号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

**第55号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

**第57号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック多量

**第58号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量

**第59号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量

**第60号土壌層解説**

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム中ブロック少量

**第61号土壌層解説**

- 1・2 層は第27号住居跡復土
- 3 暗褐色 ローム微粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ソフトローム主体
- 6 暗褐色 ローム小ブロック微量

**第62号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

**第63号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第64号土壌層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量

**第65号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック多量

**第66号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム小ブロック少量

**第67号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第68-A号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第68-B号土壌層解説**

- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量

**第69号土壌層解説**

- 1 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第70号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

**第71号土壌層解説**

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量

**第72号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック多量

**第73号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム中ブロック少量

**第74号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量

**第75号土壌層解説**

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム大ブロック少量

**第76号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム大ブロック少量

**第77号土壌層解説**

- 1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム大ブロック少量

**第78号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック多量

**第79号土壌層解説**

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック多量

**第80号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

**第81号土壌層解説**

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第82号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

**第83号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量

**第84号土壌層解説**

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第85号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック多量

**第86号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第87号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

**第88号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック多量

**第89号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

**第90号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

**第91号土壌層解説**

- 1 褐色 焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック多量

**第92号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック多量

**第93号土壌層解説**

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック多量

## 第94号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量

## 第95号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

## 第97号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック微量

## 第98号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム小ブロック少量

## 第99号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック微量

表3 土坑一覧表

土坑 番号	経度	方位方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	備 考	出 上 遺 物	備 考 (発掘関係)
				長さ(m)×幅(m)	深さ(m)					
1	C9c	N-67°-E	隅丸長方形	3.30 × 2.76	170	外傾	平相	人為	土層器40, 須恵器8	SK-3と重複, 地下式墳
2	C11d	N-66°-W	不整形円形	2.70 × 1.75	53	外傾	円状	人為	土層器12, 縄文土器8, 礎石6	
3	C11b	N-4°-E	隅丸方形	1.23 × 1.20	65	傾斜	円状	自然	土層器7, 須恵器1	
4	C11a	N-50°-E	隅丸方形	0.68 × 0.66	32	外傾	円状	自然	土層器1	
6	C11c	N-38°-E	楕円形	1.10 × 0.90	20	垂直	円状	人為	人骨, 古銭6	
7	C10e	N-45°-E	楕円形	1.20 × 1.00	25	垂直	平相	人為	土層器21, 須恵器1, 人骨, 古銭6, 鉄製品4	SK-8より新しい
8	C10b	N-46°-E	楕円形	1.50 × 1.10	20	傾斜	平相	人為	土層器44, 須恵器1, 礎石2	SK-7より古い, 火葬墓
9	C10c	N-9°-W	楕円形	1.50 × 1.20	80	外傾	平相	人為	土層器26, 須恵器1, 人骨, 古銭13, 須恵器1, 縄文土器4	
10	C10a	N-26°-E	円形	1.21 × 1.20	65	外傾	平相	人為	土層器1, 人骨, 古銭13, 煙管1	
11	C10g	N-36°-E	楕円形	0.75 × 0.65	12	外傾	平相	人為	銅片(須恵器)1	
12	C10f	N-2°-E	円形	0.85 × 0.80	6	不明	平相	不明	数珠1, 人骨, 鉄製品1	
13	C10d	N-31°-W	円形	0.90 × 0.88	20	垂直	平相	人為	土層器4, 人骨, 古銭4, 礎石1	
14	C10f	N-28°-W	円形	1.00 × 0.99	62	外傾	平相	人為	土層器11, 人骨, 煙管1, 鉄製品2, 礎石1	
15	C10b	N-33°-E	楕円形	1.40 × 1.10	48	外傾	平相	人為	土層器27, 須恵器1, 人骨, 古銭1, 鉄製品3, 礎石5, 縄文土器1	
16	C10c	N-87°-E	隅丸長方形	2.00 × 1.60	5~13	外傾	平相	人為	土層器1, 土層器60, 須恵器5, 礎石2, 縄文土器3	
17	C9f	N-41°-W	楕円形	0.90 × 0.78	18	傾斜	円状	自然	土層器1, 礎石1, 縄文土器1	
18	C10g	N-38°-E	円形	1.54 × 1.30	12	傾斜	円状	自然		
19	C10e	N-0°	楕円形	1.82 × 1.63	24	外傾	平相	人為	土層器1, 縄文土器13	
20	C10c	N-59°-E	楕円形	2.00 × 0.90	60	外傾	平相	人為	縄文土器5, 礎石5	
24	C11a	N-42°-W	楕円形	1.96 × 1.64	23	傾斜	平相	自然	土層器1, 礎石2, 縄文土器6	SK-28と重複
26	C10c	N-82°-W	円形	0.78 × 0.72	33	外傾	平相	自然		
27	C10c	N-0°	小菱形円形	0.75 × 0.65	15	傾斜	円状	人為	土層器4, 須恵器1, 縄文土器5	
28	C11a	N-75°-E	小菱形円形	(1.60) × 0.70	39	傾斜	円状	人為	土層器1, 礎石1	SK-24と重複
29	C8c	N-11°-W	不整形円形	1.99 × 1.03	37	傾斜	円状	自然	土層器1, 縄文土器4	
30	C9b1	N-85°-E	不整形円形	1.64 × 1.50	38	垂直	円状	人為		
31	C9c	N-32°-W	不整形円形	1.42 × 1.26	28	傾斜	円状	自然	縄文土器3, 礎石5	
32	C9c	N-46°-W	不整形円形	1.50 × 0.91	43	外傾	平相	自然	縄文土器2, 礎石1	
31	C7c	N-0°	円形	2.21 × 2.00	76	外傾	円状	人為	縄文土器12	
33	C7a	N-64°-E	楕円形	0.83 × 0.37	30	外傾	平相	自然	土層器4, 須恵器1, 縄文土器1	
36	C7b1	N-40°-W	楕円形	0.91 × 0.79	25	外傾	平相	自然		
37	C7b	N-43°-E	楕円形	1.10 × 0.94	35	外傾	円状	自然		
38	C7b	N-90°-E	楕円形	0.78 × 0.63	27	傾斜	平相	自然	土層器5, 須恵器1, 縄文土器1	
39	C7b	N-28°-W	円形	0.73 × 0.60	10	傾斜	平相	自然		
40	B6j	N-30°-W	不整形円形	0.81 × 0.78	25	傾斜	平相	自然		
41	B6j	N-87°-E	楕円形	1.02 × 0.70	13	傾斜	平相	自然		
42	B6i	N-40°-W	楕円形	1.02 × 0.87	19	傾斜	円状	自然		
43	B6i	N-86°-E	楕円形	1.24 × 0.72	50	外傾	平相	自然		

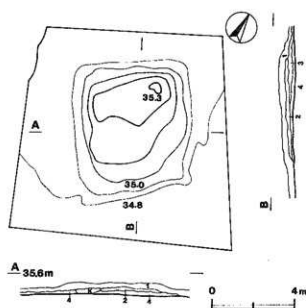
土坑 番号	位置 (真軸方向)	平面形	規 格		壁高	形状	覆土	出 土 遺 物	備 考 (重要関係)	
			深さ(南)×埋込(北)(m)	深さ(m)						
44	B5i0	N-9°-E [横円形]	(1.10)×0.90	30	外傾	平坦	自然			
45	B5j0	N-3°-W 不整形円形	1.20×1.00	56	外傾	凹状	人為			
46	B5j0	N-5°-E 横円形	1.21×0.76	14	傾斜	平坦	自然			
47	B5j0	N-72°-E 横円形	0.85×0.49	60	外傾	V字状	人為			
48	B5j0	N-20°-W 不整形円形	0.83×0.68	63	外傾	V字状	自然			
49	B5i7	N-2°-W 不整形円形	(1.17)×0.78	57	垂直	凹凸	人為			
50	B5i4	N-12°-W 横円形	1.46×(0.60)	32	外傾	凹凸	自然			
51	B5j0	N-5°-E 横円形	0.80×(0.30)	28	外傾	平坦	自然			
52	B5i7	N-19°-E 不整形円形	(1.60×1.98)	18	傾斜	凹状	自然			
53	B5h2	N-84°-E 横円形	1.02×0.86	20	垂直	凹凸	自然			
54	B5h3	N-81°-E 不整形円形	1.84×1.34	62	外傾	凹状	自然			
56	B4h0	N-82°-W 横円形	1.64×1.18	52	傾斜	平坦	自然			
57	B4h9	N-83°-W 横円形	1.12×0.74	32	外傾	凹状	自然			
58	B4g9	N-60°-W 不整形円形	1.75×1.45	30	傾斜	V型	自然			
59	B4g9	N-71°-W 不整形円形	0.83×0.55	35	外傾	凹状	自然			
60	B4g0	N-6°-E 横円形	0.75×0.35	20	外傾	平坦	自然			
61	B5i0	N-22°-E [横円形]	(1.00)×1.00	20	傾斜	平坦	人為		SI-27より新しい	
62	C7c0	N-5°-E 横円形	1.65×0.60	40	外傾	凹状	人為			
63	B4g7	N-22°-E 横円形	1.13×0.65	38	垂直	凹状	自然			
64	B3e0	N-41°-W 円形	1.30×1.20	58	外傾	平坦	人為			
65	B3e7	N-40°-W 不整形円形	1.00×0.60	55	外傾	凹凸	自然			
66	B3f5	N-58°-W 不整形円形	1.85×1.65	38	外傾	凹状	自然			
67	B3e0	N-20°-W 横円形	0.90×0.50	14	外傾	凹状	自然			
68A	B3d0	N-5°-W 不整形長方形	1.58×1.40	30	傾斜	凹状	自然			
68B	B3e0	N-5°-W 不整形円形	(1.25)×0.81	23	傾斜	凹状	自然			
69	B3d5	N-47°-W 不整形円形	2.84×1.33	40	傾斜	凹凸	人為			
70	B3e7	N-42°-W 横円形	1.71×0.87	25	傾斜	凹凸	自然			
71	B2c0	N-73°-W 不定形	1.74×(1.54)	135	垂直	平坦	人為	土層部 1, 須恵層 2	SI-35より新しい	
72	B2d0	N-44°-W 不整形円形	1.08×0.75	30	外傾	凹凸	自然			
73	B2d0	N-15°-W 横円形	0.91×0.77	25	傾斜	凹状	自然			
74	B2d0	N-0°	円形	0.80×0.80	32	傾斜	凹凸	自然		
75	B2c0	N-45°-W 円形	0.87×0.80	26	傾斜	凹凸	自然			
76	B2c0	N-10°-W 横円形	1.04×0.72	20	傾斜	凹状	人為			
77	B2c0	N-55°-E 円形	0.92×0.82	32	傾斜	平坦	自然			
78	B2c0	N-60°-E 横円形	1.12×0.70	29	傾斜	凹状	自然	土層部 3, 須恵層 2		
79	B2d0	N-79°-W 不整形円形	1.15×0.63	33	傾斜	凹状	人為			
80	B2c0	N-40°-E 横円形	0.95×0.83	42	外傾	凹状	人為	土層部 1, 須恵層 1		
81	B2d0	N-25°-E 円形	0.66×0.60	25	傾斜	凹状	自然	須恵層 1		
82	B2d0	N-21°-E 円形	0.73×0.63	43	外傾	凹状	自然			
83	B2d0	N-50°-E 円形	1.07×0.96	34	傾斜	平坦	自然	須恵層 1		
84	B2d0	N-35°-E 円形	0.58×0.55	42	外傾	凹状	自然			
85	B2d0	N-90°-E 円形	0.60×0.67	40	外傾	凹状	自然			
86	B2d0	N-0°	横円形	0.82×0.65	20	傾斜	平坦	自然		
87	B2d0	N-0°	円形	0.45×0.43	16	傾斜	凹状	自然		
88	B2d0	N-24°-E 横円形	1.30×1.02	17	傾斜	平坦	自然			
89	B2c0	N-24°-E 横円形	0.79×0.55	34	外傾	凹状	自然			
90	B2c0	N-77°-W 横円形	0.96×0.45	34	外傾	凹状	自然			

土坑番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (参考関係)
				長径(幅)×短径(幅)(m)	深さ(cm)					
91	B2c9	N-27'-W	円 形	0.81 × 0.75	15	縦斜	皿状	人為		
92	B2c9	N-70'-E	不整形円形	0.80 × 0.70	25	外傾	凹凸	自然		
93	B2be	N-67'-W	不整形円形	1.22 × 0.91	40	縦斜	皿状	自然		
94	B2c9	N 17'-E	楕 円 形	1.00 × 0.67	42	外傾	皿状	自然 土跡跡6		
95	B2d7	N-38'-W	楕 円 形	0.96 × 0.54	30	外傾	平坦	自然 土跡跡3、遺跡跡1		
96A	B2c7	N-39'-W	楕 円 形	1.40 × (1.00)	35	外傾	平坦	自然 土跡跡43、遺跡跡3、灰土跡跡1	SK-96より新しい	
96B	B2c7	N-59'-W	円 形	1.10 × (1.00)	40	外傾	平坦	自然	SK-96Aより古い	
97	B2d5	N-8'-W	楕 円 形	0.97 × 0.74	28	縦斜	凹凸	自然		
98	B2c5	N-65'-W	長 方 形	2.70 × 1.15	35	縦斜	凹凸	自然		
99	C11a2	N-65'-E	楕 円 形	0.94 × 0.73	22	外傾	皿状	自然		

#### 4 塚

今回の調査では、時期不明の塚一基を確認した。以下、その特徴について記載する。

##### 第1号塚 (第96図)



位置 調査区東端部, C11c9区

規模と平面形 長軸6.4m, 短軸5.7mの長方形であり, 盛り土の高さは, 約0.5mである。

長軸方向 N-21'-W

盛土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

- 1 耕作土
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 砂質を帯びる
- 3 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム中ブロック少量

遺物 出土遺物はない。塚中央部に燧石片岩の板石が立てられていた。記銘などは見られなかった。

所見 本跡の時期は不明である。

第96図 第1号塚実測図

#### 5 溝

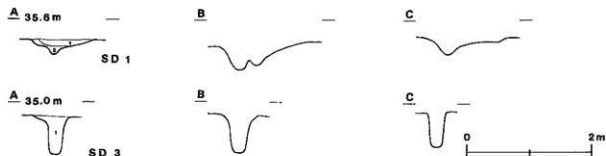
今回の調査によって、溝2条を確認した。以下、その特徴について記載する。

##### 第1号溝 (第97図)

位置 A区東側, B11j7区

規模と平面形 長さ(4.70m), 上幅0.26~1.28m, 下幅0.06~0.13m, 深さ0.40mである。





第97図 第1・3号溝断面実測図

主軸方向 N-23°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 「U」字状を呈する。

覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 灰褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

2 褐色 ローム粒子少量

所見 本溝は、南北に走り、部分的に2本になるようである。調査では、南側端部の調査だけであったので内容は不明である。また、出土遺物もなく時期も不明である。

### 第3号溝（第97図）

位置 A区東側、C11a0区

重複関係 本溝は、第3、4号住居跡の覆土を掘り込んでいるので本溝が新しい。

規模と平面形 長さ（18.9m）、上幅0.2~0.6m、下幅0.1~0.18m、深さ0.6mである。

主軸方向 N-58°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 「U」字状を呈する。

覆土 単一層であり、ローム粒子・ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・焼土小ブロック微量を含むにふい褐色土である。

所見 本跡は、覆土や形状から根切溝と考えられる。

## 6 掘立柱建物跡

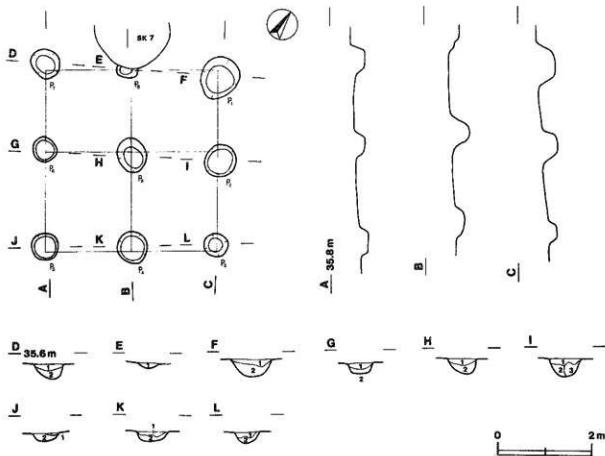
今回の調査で、時期不明の掘立柱建物跡2棟を確認した。以下、その特徴について記載する。

### 第1号掘立柱建物跡（第98図）

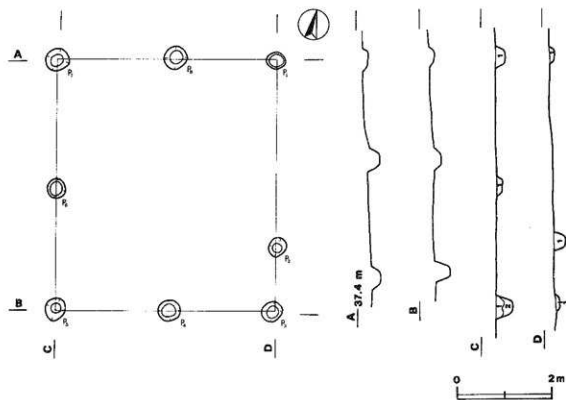
位置 A区東部、C10c0~C11c1区

規模 東西2間（約3m）、南北2間（約2.8m）である。柱間寸法は、桁行1.3~1.4m、梁行1.3~1.5mである。掘り方は、径35~50cmの不整形円で、深さ10~30cmである。

長軸方向 N-31°-W



第98图 第1号掘立柱建物跡実測図



第99图 第2号掘立柱建物跡実測図

覆土 3層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 におい褐色 ローム小ブロック多量、黒色粒状微集
- 2 灰褐色 ローム粒子中風、黒色小ブロック微量
- 3 灰褐色 ローム小ブロック多量（柱痕と考えられる）

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明であるが、2間四方の建物跡であることから「お堂」と考えられる。

## 第2号掘立柱建物跡（第99図）

位置 A区西部、C8c<sub>3</sub>～C8d<sub>3</sub>区

規模 東西2間（約3.5m）、南北2間（約4.0m）である。柱間寸法は、桁行1.6～1.9m、梁行1.0～3.0mである。掘り方は、径30～40cmの円形で、深さ10～30cmである。柱痕は確認できなかった。

長軸方向 N-11°-W

覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

所見 本跡は、出土遺物がなく時期は不明である。

## 7 道路跡

今回の調査では、道路跡1条を確認した。以下その特徴について記載する。

### 第1号道路跡（第100図）

位置 A区中央部、C9b<sub>8</sub>～C10f<sub>1</sub>区

重複関係 本跡は、第19号住居跡、第1号土坑と重複している。第19号住居跡の覆土を本跡が掘り込んでいたので、本跡が新しい。第1号土坑は、本跡の覆土を掘り込んでいたので、本跡が古い。

規模と平面形 長さ（22.7m）、上幅2.65～3.15m、下幅1.95～2.25m、深さ0.40mである。

主軸方向 N-28°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

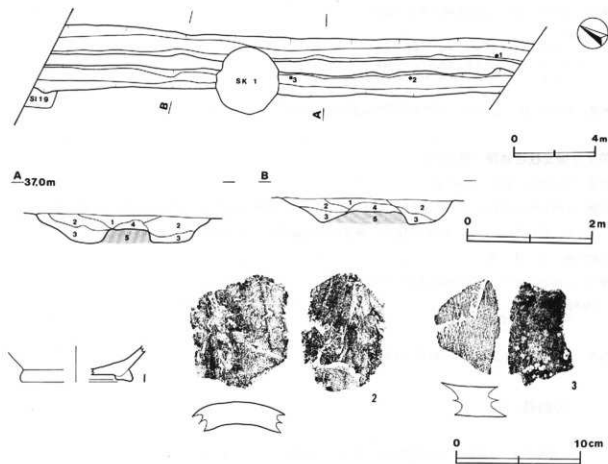
覆土 5層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量       | 4 褐色 ローム粒子少量、硬化している  |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量       | 5 灰褐色 ローム粒子少量、硬化している |
| 3 褐色 ローム粒子少量、硬化している |                      |

遺物 数片の布目瓦片と須恵器長頸壺片が出土している。第100図2は丸瓦片で、凸面、凹面とも縦方向のへら削り整形。凹面部には部分的に布目痕が見られる。3は平瓦片で、凹面部には布目痕が見られる。凸面部は磨耗が著しい。

所見 本跡は、厚さ30～40cm、幅約70cmの版築状の部分が溝状の遺構のほぼ中央部を南北に走っている。道路跡と考えられるのは、主に第4、5層であり、踏み固められたと思われるような版築状を呈している。当初は、溝として調査したが、中央部に版築状の部分があることから、溝状に一旦掘り込み、中央部を通路とし、



第100図 第1号道路跡・出土遺物実測図

両端は倒溝状に残した形態をとる道路跡と判断した。南側端部の調査だけであつたので全容は不明である。出土遺物から、奈良時代末から平安時代初期を考えておきたい。

第1号道路跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	長頸壺 須恵器	B ( 2.5) D [ 9.0] E 1.0	底部片。体部は内灣して立ち上がる。 高台は「ハ」の字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部クロ ロ整形後、高台部貼り付け。	石英 灰色 良好	P295 5%

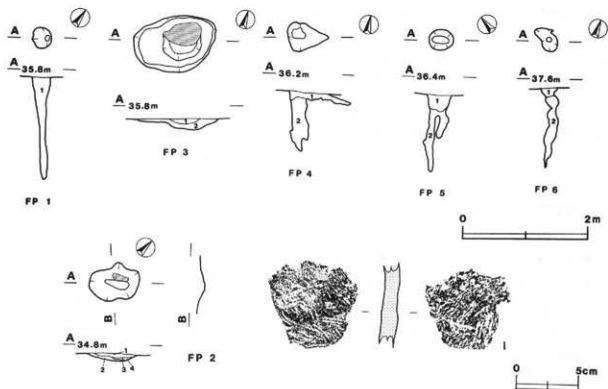
## 8 その他の遺構および遺物

今回の調査で、炉穴6か所、欄列3列、不明遺構3基を確認した。以下その特徴について記載する。

### (1) 炉穴

#### 第1号炉穴 (第101図)

位置 A区東側, C10a区



第101図 第1～6号炉穴実測・拓影図

規模と平面形 径30～40cmの不整形円形で、深さ165cmである。

壁面 ほぼ垂直に掘られ、壁面は加熱を受けており、しっかりしている。

底面 「U」字状を呈する。

覆土 単一土層で、焼土粒子多量、焼土大ブロック少量を含む暗赤褐色土である。

遺物 覆土中から条痕文土器の小片が出土している。

所見 本跡は、出土遺物が小片であるので、遺物から時期を特定するのはむずかしい。165cmというかなりの深さであるが、覆土および壁面の状態から縄文時代早期末の炉穴と判断した。

### 第2号炉穴 (第101図)

位置 A区東側、C11e<sub>1</sub>区

規模と平面形 径50～80cmの不整形円形で、深さ12cmである。

底面 皿状を呈する。

覆土 4層からなり、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

3 赤褐色 焼土粒子主体

2 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

4 赤褐色 焼土粒子少量

遺物 覆土中から条痕文土器片が出土している。第101図1は内・外面に貝殻条痕文が施されている。

所見 本跡は、縄文時代早期末と考えられる。

### 第3号炉穴 (第101図)

位置 A区中央部、C10d<sub>8</sub>区

規模と平面形 長径130cm, 短径90cmの楕円形で、深さ20cmである。

底面 皿状を呈する。

覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 赤褐色 焼土
- 2 褐色 加熱を受けたハードローム

遺物 覆土中から条痕文土器片が出土している。

所見 本跡は、縄文時代早期末と考えられる。

#### 第4号炉穴(第101図)

位置 A区中央部, C10e<sub>7</sub>区

規模と平面形 長径65cm, 短径45cmの不整形で、深さ100cmである。

底面 「U」字状を呈する。

壁面 ほぼ垂直に掘られ、壁面は加熱を受けており、しっかりしている。

覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量

所見 本跡は、出土遺物がないが、第1号炉穴と深さ、壁面の状態が類似しているの、縄文時代早期末の炉穴と考えられる。

#### 第5号炉穴(第101図)

位置 A区中央部, C10b<sub>2</sub>区

規模と平面形 長径40cm, 短径30cmの楕円形で、深さ125cmである。

底面 「U」字状を呈する。

壁面 途中から二股に分かれ、壁面は加熱を受けており、しっかりしている。

覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

所見 本跡は、出土遺物がないが、第1、4号炉穴と深さおよび壁面の状態が類似する点があり、縄文時代早期末の炉穴と考えられる。

#### 第6号炉穴(第101図)

位置 C区東部, B5g<sub>1</sub>区

規模と平面形 長径45cm, 短径25cmの不整形で、深さ130cmである。

底面 先細りである。

壁面 蛇行するように掘られ、壁面は加熱を受けており、しっかりしている。

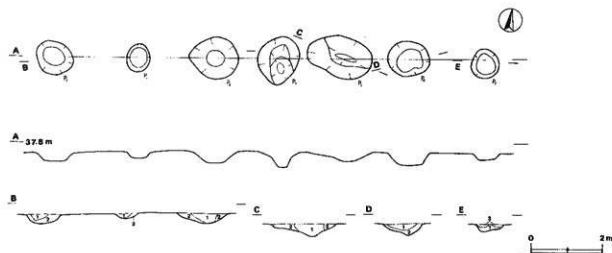
覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量

所見 本跡は、出土遺物がないが、第1、4、5号炉穴と深さおよび壁面の状態で類似する点があり、縄文時代早期末の炉穴と考えられる。

## (2) 櫛列



第102図 第1号櫛列実測図

### 第1号櫛列 (第102図)

位置 B区東部、C7b<sub>4</sub>~C7a<sub>6</sub>区

規模 柱穴7か所、柱穴の間隔は、1.4~1.8mで、全長9.7mである。掘り方は径50~140cmの円形もしくは楕円形で、深さ15~35cmである。

主軸方向 N-82°-E

覆土 3層からなり、自然堆積である。

#### 土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム小ブロック少量

3 褐色 ローム小ブロック少量

所見 本跡は、出土遺物もなく時期は不明である。当初、掘立柱建物跡と思われたが、本列に対応する柱穴がなく、一列のみの確認であるので、櫛列とした。

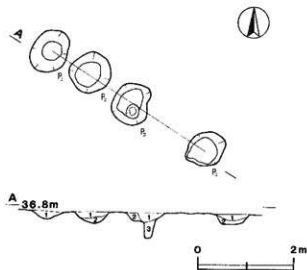
### 第2号櫛列 (第103図)

位置 A区中央部、C9c<sub>7</sub>区

規模 柱穴4か所、柱穴の間隔は、0.7~1.4mで、全長3.5mである。掘り方は径55~70cmのほぼ円形で、深さ15~40cmである。

主軸方向 N-57°-W

覆土 3層からなり、自然堆積である。



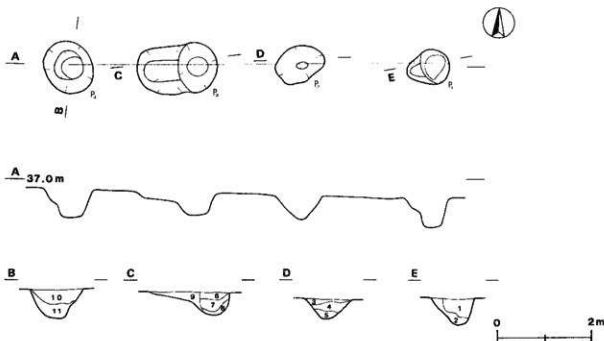
第103図 第2号櫛列実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量  
2 褐色 ローム小ブロック少量

- 3 暗褐色 ローム粒子少量

所見 本跡は, 出土遺物もなく時期は不明である。当初, 掘立柱建物跡と思われたが, 本列に対応する柱穴がなく, 一列のみの確認であるので, 欄列とした。



第104図 第3号欄列実測図

第3号欄列 (第104図)

位置 A区西部, C9e<sub>1</sub>~C9e<sub>5</sub>区

規模 柱穴4か所, 柱穴の間隔は, 1.7~2.1mで, 全長6.47mである。掘り方は長径40~80cm, 短径40~70cmの円形か楕円形で, 深さは, 30~50cmである。

主軸方向 N-90°-E

覆土 11層からなり, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- |         |            |         |                    |
|---------|------------|---------|--------------------|
| 1 にぶい褐色 | ローム小ブロック少量 | 7 灰褐色   | ローム小ブロック少量         |
| 2 にぶい褐色 | ローム粒子少量    | 8 褐色    | ローム小ブロック少量, 黒色粒子微量 |
| 3 にぶい褐色 | ローム小ブロック少量 | 9 にぶい褐色 | いわゆる褐色土            |
| 4 褐色    | ローム小ブロック少量 | 10 褐色   | ローム小ブロック少量         |
| 5 にぶい褐色 | ローム中ブロック少量 | 11 暗褐色  | ローム粒子少量            |
| 6 褐色    | ローム小ブロック少量 |         |                    |

所見 本跡は, 出土遺物がなく時期は不明である。柱穴の配列から欄列と考えた。

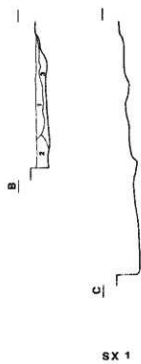
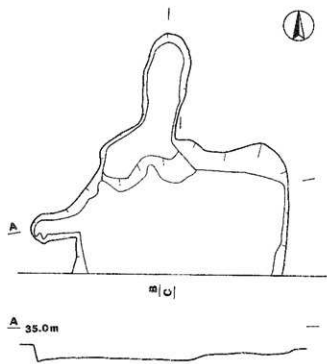
(3) 不明遺構

第1号不明遺構 (第105・106図)

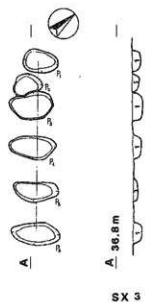
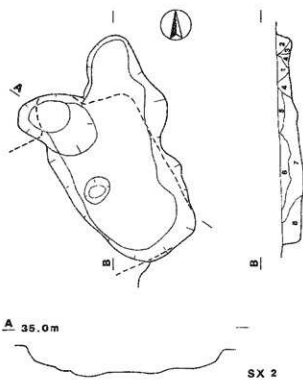
位置 A区東部, C11g<sub>1</sub>区

規模と平面形 長軸(3.9m), 短軸3.5mの不整方形で, 深さ5~30cmである。北側に幅約0.6m, 長さ約2.0m





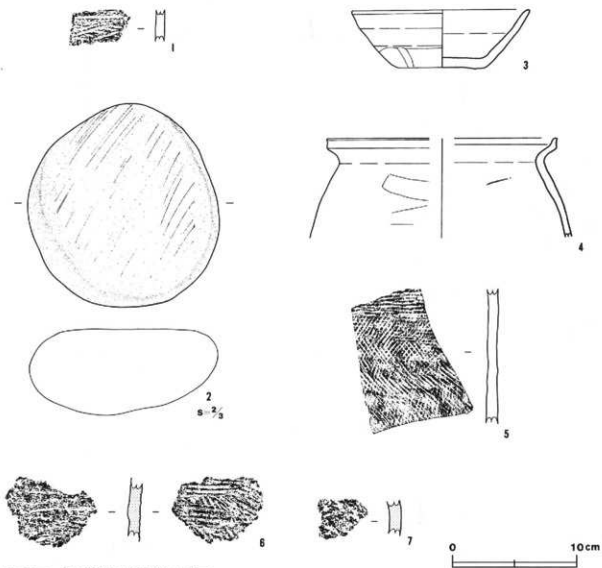
SX 1



SX 3



第105图 第1~3号不明遺構実測図



第106図 不明遺構出土遺物実測図

ほどの張り出し部を持つ。

主軸方向 N-9°-E

壁面 ならかに立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 3層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック、黒色小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、黒色小ブロック微量
- 3 灰褐色 ローム粒子中量、黒色小ブロック微量

遺物 覆土中から、縄文土器1点、円礫5個、磨石1点が出土しているだけである。第106図1は無文土器で、

胎土に石英、長石が含まれ、横位のナデ整形がなされる。胎土から縄文早期の無文土器と思われる。

所見 本跡は、縄文早期の遺構と考えられる。

### 第1号不明遺構出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第106図2	磨石	8.2	7.6	3.4	300.0	砂岩		Q27

### 第2号不明遺構 (第105・106図)

位置 A区東部, C11d区

規模と平面形 長軸2.7m, 短軸(1.7m)の不整楕円形で、深さ18~45cmである。西側部が攪乱を受けている。

主軸方向 N-8°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状を呈し、部分的に凹凸である。

覆土 8層からなり、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 褐色 ローム粒子少量	5 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
2 褐色 ローム小ブロック微量	6 褐色 ローム粒子少量, 換土粒子微量
3 暗褐色 ローム小ブロック少量	7 褐色 黒色小ブロック少量
4 褐色 ローム小ブロック少量	8 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物 覆土中から、土師器片36点、須恵器片8点、縄文土器片13点が出土している。第106図4の土師器壺は覆土下層から、3の須恵器環が、正位の状態で覆土中層からそれぞれ出土している。5は須恵器壺の胴部片で、内面はナデ、外面は格子目状の叩きが見られる。

所見 本跡は、西側部を攪乱されてしまっているため、正確な形は不明である。住居跡の可能性もあるが、床面および炉跡(竈)などが確認できなかったので不明遺構として扱った。

### 第2号不明遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第106図3	坏須恵器	A 14.2 B 4.7 C 7.0	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部にある。	体部内・外面口縁ナデ、体部外面下半へラ削り。底部手持ちへラ削り。	長石・石英・雲母 灰白色 普通	P297 95%
1	縄文土師器	A [18.6] B (7.9)	体部から口縁部の破片。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面ナデ、体部内・外面へラ削り。	長石・石英・雲母 スクリア にふい赤褐色 普通	P296 10%

### 第3号不明遺構 (第105・106図)

位置 A区中央部, C9e区

規模 柱穴4か所、柱穴の間隔は約70cmと規格的で、全長3.20mである。掘り方は長径45~80cm、短径30~40cmの長楕円形で、深さ5~15cmである。

主軸方向 N-50°-W

覆土 単一層であり、ローム粒子少量、ローム大、中ブロック微量を含む灰褐色土が、版築状で非常に固くなっている。人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中より、縄文土器が出土している。第106図6, 7は条痕文土器である。胎土に繊維が含まれ、内面に貝殻条痕文が施されている。

所見 本跡からは縄文土器が出土しているが、縄文時代の遺構とは考えにくい。柱穴とした部分は、版築状を

呈しているの、何らかの上屋構造物の礎石下地の可能性が高い。類似遺構がなく詳細は不明である。

## 9 遺構外出土遺物

その他に遺構外出土遺物として、遺構に伴わなかった遺物を以下に記載する。(第107・第108図)

1は燃承文土器で、口唇直下からRの燃承文が条間隔をやや開けて縦走る。荷箱台式と思われる。2～8は口縁部片で、沈線による平行線文、斜行線文、格子目文が施されている。9～21は胴部片で、9～15は細い沈線で平行線文、斜行線文、複合幾何文が施されている。16～21はやや太めの沈線によって平行線文や斜行線文が施されている。2, 3, 7は外ソギ状に近い口唇部である。三戸式に属するものと思われる。20は横位の平行沈線下に爪形文が施されている。田戸下層式と思われる。22～31は棒状工具による太い沈線が横位あるいは斜位に走るものである。22～26の口唇部は、角頭状に整形されている。

32～50は無文土器である。いずれも口縁部片である。32～40は口唇部が外ソギ状を呈する。41, 42は口唇部が角頭状、43～50は口唇部が円頭状を呈する。いずれも胎土に石英・長石を多量に含んでおり、横方向のナデ調整がなされている。燃承文直後の無文土器に対比できるものと思われる。

51～55は底部片である。51, 53～55は丸底、52は尖底である。51, 53～55は胎土に長石、石英が多量に含まれる。32～50の無文土器と胎土が類似しており、これらの無文土器の底部と思われる。52は沈線文が施された土器の底部と思われる。

56～63は条痕文土器である。いずれも胎土に繊維が含まれている。56, 58, 61, 62は内・外面に貝殻条痕文が施されている。63は波状の条痕が施されている。

64～68は前期の繊維土器である。64～66は口縁部片で単節LRの縄文が横回転で、無節縄文が縦回転で施されている。67, 68は単節斜縄文が施されている。

69, 70は前期後半の浮島式土器である。69は口唇部に斜位の刻目が施され、口縁部に変形爪形文が施されている。70は胴部片で、竹管による変形爪形文が施されている。

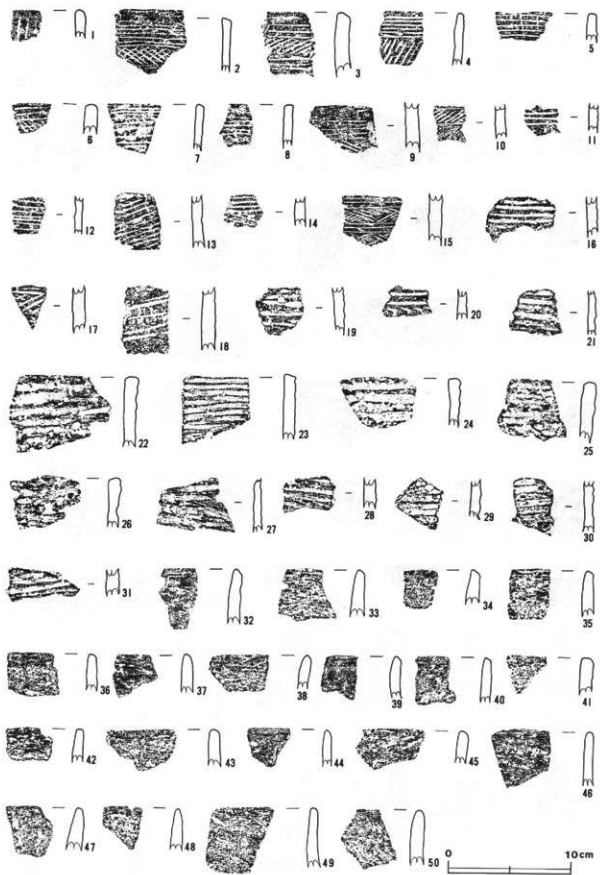
71～79は中期前半の阿玉台式土器である。71～75は隆帯及び押引文が施されている。76～79は胴部片で、輪積痕を残し、爪形文が施されている。

80は須恵器壺頸部片で、隆線が巡り、櫛状工具で指突が配されている。

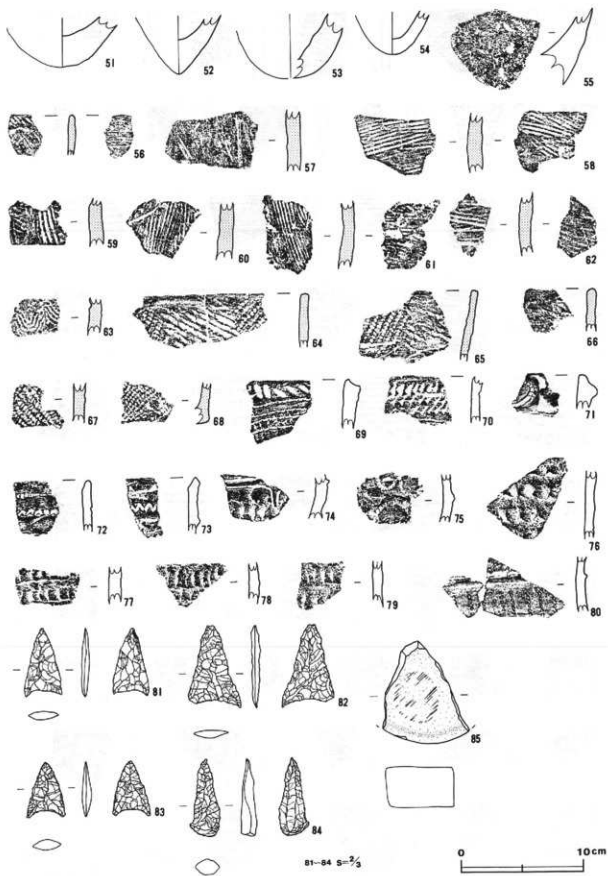
81～83は石鏝である。81, 83はチャート製、82はメノウ製である。84はチャート製の石錐である。85は流紋岩の磨石で、表裏とも使用されている。特に図示している面が顕著である。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第108図81	石 鏝	2.8	1.5	0.3	1.12	チャート	A区	Q3
82	石 鏝	3.4	1.5	0.4	1.66	メノウ	C区	Q30
83	石 鏝	2.2	1.5	0.4	1.00	チャート	C11d4区	Q33
84	石 鏝	3.1	1.2	0.6	2.18	チャート	A区	Q35
85	磨 石	8.3	7.0	3.3	240.00	凝灰岩	C11c3区	Q44



第107图 遺構外出土遺物実測図(1)



第108図 遺構外出土遺物実測図(2)

## 第4節 まとめ

当遺跡で検出した遺構は、石器集中地点3か所、竪穴住居跡37軒、土坑94基、塚1基、溝2条、孤立柱建物跡2棟、道路跡1条、炉穴6か所、櫛列3列、不明遺構3基である。以下、各時代毎に主な遺構と遺物についての概略を述べ、まとめとしたい。

### 旧石器時代

当遺跡からは、ナイフ形石器を伴う石器集中地点が3か所確認されている。いずれの集中地点も剥片類の出土が目立っており、定型石器類の出土が極めて少ないことに加えて台石やハンマー、砥石が出土していることが当遺跡の特徴といえる。各石器集中地点における石器等の組成は以下のとおりである。(表4～表6)

表4 第1号石器集中地点石器等組成表

石器	2材	ホルンブルグス	安山岩	砂 岩	凝灰岩	頁 岩	燧石頁岩	石 英	メノウ	チャート	流紋岩	花崗岩	トロコ石	不 明	合計点数
ナイフ形石器	2	2	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	4
台形標石	--	1	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	1
石 斧	--	1	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	1
鏃	2	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	2
二次加工痕のある剥片	2	3	--	--	1	--	2	--	1	1	--	--	--	--	10
砥 石	--	--	2	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	2
台 石	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	6
ハンマー	--	--	1	--	1	--	--	--	1	--	--	--	--	--	3
石 核	14	18	--	4	1	--	10	2	4	2	--	--	4	--	59
合計点数	20	25	3	4	3	6	12	2	6	3	0	4	6	82	

表5 第2号石器集中地点石器等組成表

石器	2材	ホルンブルグス	安山岩	砂 岩	凝灰岩	頁 岩	燧石頁岩	石 英	メノウ	チャート	流紋岩	花崗岩	トロコ石	不 明	合計点数
ナイフ形石器	--	1	--	--	--	1	--	--	--	--	--	--	--	--	2
台形標石	1	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	1
石 斧	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	0
鏃	1	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	1	2
二次加工痕のある剥片	1	3	--	--	--	--	--	--	1	--	--	--	--	--	5
砥 石	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	0
台 石	--	--	1	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	1
ハンマー	--	--	4	--	--	--	--	--	1	--	--	--	--	2	7
石 核	19	30	2	--	1	1	4	4	8	2	--	3	3	77	
合計点数	22	34	7	0	2	1	4	4	10	2	0	3	6	95	

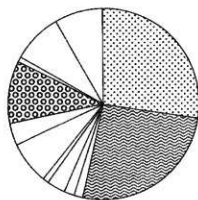
3地点の石器組成表からわかるように、それぞれの組成にばらつきが見られる。第1石器集中地点では、ナイフ形石器4点、二次加工痕のある剥片10点など、加工された石器の占める割合が多く、第2石器集中地点では、ナイフ形石器2点、二次加工痕のある剥片5点と加工された石器が少なくなる。第3石器集中地点では、ナイフ形石器は見られず、二次加工痕のある剥片6点と加工された石器がより少なくなる傾向にある。また、石核の点数も第1石器集中地点では59点、第2石器集中地点では77点、第3石器集中地点では47点である。石核が一番多く出土している第2石器集中地点では、ほかの集中地点にくらべ、ハンマーや台石の出土が多い。

以上のことから、いずれの集中地点も石器の製作跡であり、最終的に石器製作の作業がなされたのが第2石器集中地点であると考えられる。また、砥石は第1石器集中地点に多く出土していることから、剥離作業の場所と研磨作業の場所というように、仕事の内容によって空間を区切っていることもなされていたと考えられる。

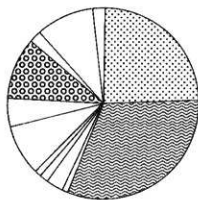
次に、当遺跡における石器類の石材の比率については、剥片類の27%がホルンフェルス、26%が安山岩で剥片類の半数以上を占めている。次に多いのがチャートの11%であるから、その差は歴然としている。石核の石材は、安山岩32%、ホルンフェルス25%で石核の半数以上を占めている。ハンマーは砂岩が61%、ホルンフェルス11%と砂岩の占める割合が多い(第109図)。すなわち、石器類の製作にあたっては、ホルンフェルスや安山岩を主体としていることがうかがえる。

表6 第3号石器集中地点石器等組成表

石器	石材	ホルンフェルス	安山岩	砂岩	凝灰岩	頁岩	角質頁岩	石英	メノウ	チャート	流紋岩	花崗岩	トコ山	不明	合計点数
ナイフ形石器		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
台形縁石器		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
石斧		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
鏃		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
二次加工のあつらひ		4	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	6
砥石		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
台石		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
ハンマー		1	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6
石核		12	12	-	2	1	-	1	4	7	-	-	7	1	47
合計点数		17	12	5	2	1	0	2	4	8	0	0	7	2	60



剥片



石核

ホルンフェルス

安山岩

チャート

第109図 石器石材組成図



## 縄文時代

縄文時代の住居跡は、早期沈線文系土器の時期の住居跡（第37号住居跡）が1軒検出されているだけである。表面採集では縄文早期の熱糸文や糸痕文系土器、前期の織維土器、中期阿玉台式土器などが少量ではあるが確認されている。近隣にこれらの時期の遺構の存在を予測させるものである。

## 古墳時代

古墳時代の住居跡は3軒検出されている。第5・14号住居跡出土の、内・外面黒色処理の坏や、須恵器坏身模倣の土師器坏がいずれも扁平であることから、6世紀後葉の住居跡と考えられる。第4号住居跡出土の、須恵器坏身模倣の土師器坏が小型化していることや須恵器平瓶から、7世紀前葉の住居跡と考えられる。

## 奈良時代

奈良時代の住居跡は8軒検出されている。第28号住居跡出土の須恵器蓋は、つまみ部が扁平で返りが付いていることから8世紀前葉の住居跡と考えられる。第25号住居跡出土の高盤は、口径が大型化していることや、坏の底径が大きいことから8世紀中葉の住居跡と考えられる。

第10・11・13・20～22号住居跡は、須恵器高台付坏が大型化し、体部下半に稜を持ち、高台部が強く「ハ」の字状に開くことや、蓋のつまみが宝珠状を呈することなどから8世紀後葉と考えられる。なお、第22号住居跡からは灰釉陶器小形長頸壺と竈G類が一括出土している。

## 平安時代

平安時代の住居跡は19軒検出されている。第1・8・9・12・15・16・18・23号住居跡は高盤が見られることや盤が大型であること、須恵器坏の底部が口縁部径の2分の1以上であること、須恵器蓋にボタン状のつまみが付くことなどから9世紀前葉と考えられる。住居跡の分布もA区西側に集中する傾向がある。

第7・19・24・30号住居跡は、土師器高台付皿や灰釉陶器長頸瓶などから9世紀中葉と考えられる。

第27・31・35・36号住居跡は、須恵器坏の器高が高く底径が小さいことから9世紀後葉の住居跡と考えられる。住居跡の分布は第27号住居跡のみがB区西端に位置するが、他はC区西端に集中する傾向がある。

第2・3号住居跡は、土師器高台付坏の高台部の特徴から10世紀前葉の住居跡と考えられる。

第6号住居跡は、土師器土器や土師器高台付坏の特徴から10世紀中葉の住居跡と考えられる。

## 中・近世

中世と断定できる遺構はないが、地下式墳の形態を持つ第1号土坑が該当するとみられ、近隣にこれと類する遺構が存在する可能性はある。

近世の遺構としては、第6～15号土坑がこれにあたる。寛永通寶や煙管などとともに人骨が出土していることから江戸期の墓塚と考えられる。

以上半田原遺跡の概略をまとめてきたが、惣瀬川流域における考古学的調査はほとんどなされていないのが現状である。今後の調査に期するものが大きい。

参考文献

- 茨城県教育財団「一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書II 梶内遺跡」〔茨城県教育財団文化財調査報告第100集〕 1995年9月
- 茨城県教育財団「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IV 馬場遺跡 行人田遺跡」〔茨城県教育財団文化財調査報告第106集〕 1996年3月
- 茨城県教育財団「牛久東下根特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡 西ノ原遺跡 単人山遺跡」〔茨城県教育財団文化財調査報告第113集〕 1996年6月
- 浅井哲也「茨城県における奈良・平安時代の土器（II）」〔研究ノート2号〕 茨城県教育財団 1993年7月
- 赤澤威・小田静夫・山中一郎「日本の旧石器」立風書房 1980年3月

# 付 章

## 半田原遺跡自然科学分析報告

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

半田原遺跡は、筑波山塊の東、柿岡盆地の恋瀬川右岸の段丘上に位置する。今回の発掘調査により、奈良・平安時代の集落跡が主に確認され、古墳時代の住居跡、江戸時代の墓墳などが検出されている。また、褐色火山灰土層（いわゆるローム層）の2層下部からは先土器時代のユニットが1基検出されている。

今回の自然科学分析調査は、検出されたユニットの年代に関する情報を得るために、火山ガラス比分析および重鉱物分析によりローム層の層序対比を行う。火山ガラス比分析では、ローム層中に混交する指標テフラ由来の細粒の火山ガラスの産状を調べることで、降灰層準を推定する。重鉱物分析では、ローム層中の重鉱物組成を調べ、その層位の変化を指標として対比に用いる。本分析法は、武蔵野台地の立川ローム層では対比資料が比較的多いためとくに有効な手段となっている。本遺跡周辺では分析例は少ないが、栃木県〜茨城県北部地域のローム層、茨城県南部地域および武蔵野台地のローム層との対比を行う。

### 1. 遺跡付近の地形・地質

茨城県南部に広がる常陸台地は、さらに東茨城・鹿島・行方・新治・稲敷などの各台地に分かれている。これらの台地の地形・地質は坂本(1986)に以下のように記載されている。常陸台地は利根川南部の下総台地に対比される段丘で、その構成層は最終間氷期の末末古海進によって形成した海成層の見和層である。その上位に体積する茨城粘土層は、下総台地をはじめとして関東平野中南部の台地に広く分布する常陸粘土層に対比される。常陸粘土層は小玉ほか(1981)の常陸層上部粘土層に相当し、菊地(1981)によれば約4.9〜6.0万年前に噴出した(町田・新井, 1992)箱根―東京軽石の降灰直前まで氾濫原に広く堆積したとされる。一方、柿岡盆地周辺に認められる狭小な台地の地形・地質は宮崎ほか(1996)に以下のように記載されている。これらの台地は、最終間氷期以降に形成されたもので、中位Ⅰ段丘面、中位Ⅱ段丘面、中位Ⅲ段丘面に細分される。中位Ⅰ段丘面は見和層によって構成されているが、中位Ⅱ段丘面および中位Ⅲ段丘面は見和層および常陸層以外の河成堆積物により構成されている。本遺跡が立地する台地は中位Ⅱ段丘面とされ、段丘面の上位には約8.0〜9.5万年前に噴出した(町田・新井, 1992)御房第一軽石(On-Pm1; 小林ほか, 1967)が認められる。したがって、本遺跡が立地する台地は新しくともOn-Pm1降灰すなわち約8.0〜9.5万年前以前に形成したと考えられ、南関東の武蔵野台地のM1面にほぼ対比される。また、中位Ⅲ段丘面は常陸層と同時期の堆積物により構成されているため、約4.9〜6.0万年前までには形成したと考えられる。各段丘面構成層の上位には、いわゆるローム層が認められる。

### 2. 試料

試料は、A区の第一ユニット付近の北壁から採取されている。本地点では、上位より1層〜5層に分層されており、1層は黒褐色土とされ、黒色火山灰土層（いわゆる黒ボク土層）と考えられる。また、1層上部は耕作による攪乱を受けているとされる。2層以下は褐色のハードローム層で、4層中には赤城鹿沼軽石(Ag-KP; 新井, 1962)が少量含まれるとされている。Ag-KPは赤城火山を給源とし、降灰年代は約3.1〜3.2万年前(町田・新井, 1992)と考えられている。なお、ローム層では2層がやや暗色であるが、暗色帯は不明瞭とされて

いる。試料は2層～4層まで、上位より試料番号1～15が採取されている。この中から火山ガラス比分析に、指標テフラに由来する火山ガラスが検出され则认为される試料番号1～5の5点を選択する。また、重鉱物分析には試料番号2～12の偶数番号の試料の6点を選択する。以上の柱状図と試料採取位置を図1に示す。

### 3. 分析方法

#### (1) 重鉱物分析

試料約40gに水を加えて超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗いし、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステート(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黑色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

#### (2) 火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒を計数し、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉱物に含め、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

### 4. 結果

結果を表1・図1に示す。

#### (1) 重鉱物分析

いずれの試料も、カンラン石、斜方輝石、角閃石、不透明鉱物を含む重鉱物組成を示す。カンラン石は試料番号8に量比の極大層準が認められる。また、斜方輝石は試料番号10に量比の極小層準が認められる。角閃石はその極大・極小は不明瞭であるが、上部から下部に向かって概ね漸増する。

#### (2) 火山ガラス比分析

試料番号1～3では、バブル型、火山ガラスが比較的多く認められる。下位より見て、試料番号3から試料番号1に向かって増加する。この火山ガラスは、その産出層準と形態および色調により、始良Tn火山

表1 重鉱物および火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	-	-	-	-	-	-	59	3	4	184	250	
2	32	107	18	20	31	42	250	36	1	3	210	250
3	-	-	-	-	-	-	-	17	1	1	231	250
4	26	96	11	27	32	58	250	2	0	0	248	250
5	-	-	-	-	-	-	-	1	0	1	248	250
6	30	93	5	39	32	51	250	-	-	-	-	-
7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8	42	83	4	36	37	48	250	-	-	-	-	-
9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10	35	66	1	57	29	62	250	-	-	-	-	-
11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12	19	102	1	51	37	40	250	-	-	-	-	-

灰(AT:町田・新井, 1976)に由来すると考えられる。ATは、鹿児島県の始良カルデラを給源とし、降灰年代は約2.1～2.5万年前(町田・新井, 1992)と考えられている。一般に、土壌中に特定のテフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い(早津, 1988)。今回の火山ガラスの産状からはその最濃集部が明瞭ではないが、本地点におけるATの降灰層準は2層上限付近の可能性がある。

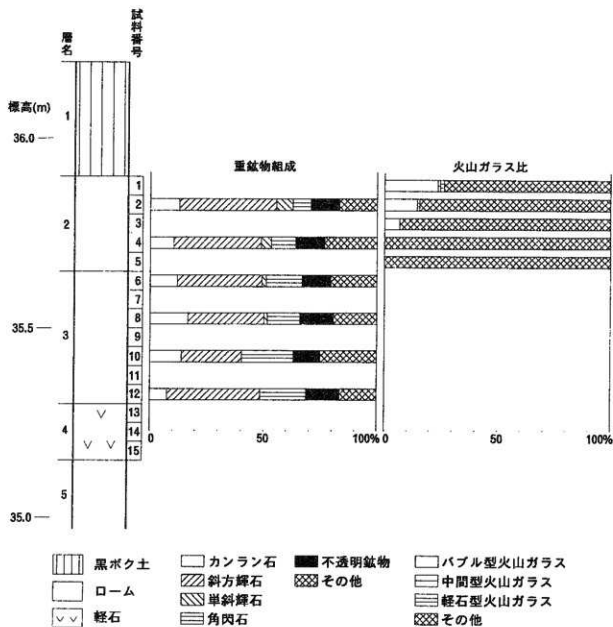


図1 柱状図・試料採取位置および重鉱物組成・火山ガラス比

## 5. 考察

栃木県～茨城県北部の台地や丘陵に分布するローム層上部は、上位より田原ローム層、宝木ローム層に分けられている（関東ローム研究グループ，1965）。これらのローム層の指標テフラには、上位から立川ローム層最上部ガラス質火山灰（UG：山崎，1978）に対比される可能性のあるテフラ，前述のATおよびAg-KPなどがある。

UGは、浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており，その降灰年代は約1.2万年前とされている（町田・新井，1992）。南関東地方に広く分布し，武蔵野台地の立川ローム層の標準層序における山層上

部が降灰層準と考えられている。また、UGは、南経井沢などの給源周辺の多くの露頭で認められている浅間板鼻黄色テフラ（As-YP）直上の火山灰互層に対比されるとも考えられている（町田ほか，1984；鈴木ほか，1987）。これまでの分析例により、栃木県～茨城県北部の山原ローム層最上部にも、UGに対比される可能性のあるテフラが認められ、この地域のローム層の層序対比の指標となっている。ただし、栃木県北部地域では、同層準に男体火山を給源とする男体七本松軽石（Nt-S；須藤・山崎，1980）に由来する軽石型火山ガラスが混在している可能性もある。

また、栃木県～茨城県北部におけるATの降灰層準は、山原ローム層と宝木ローム層の境界層の暗色帯の上部に認められ（町田・新井，1976）、武蔵野台地では当社の分析例により立川ローム層の標準層序におけるVII層上限以降降灰層準がある場合が多い。

以上のことと今回の分析結果により、本地点の2層上限付近が栃木県～茨城県北部地域の宝木ローム層最上部付近に対比される。武蔵野台地の立川ローム層との対比では、本地点の2層上限付近が武蔵野台地の立川ローム層のVII層上限付近に対比される。さらにAg-KPは宝木ローム層の中部に挟まれる（阿久津，1986）ことにより、本地点の4層が宝木ローム層の中部付近に対比される。

また、本地点でATの最濃集部が明瞭ではなく、さらにUGに対比される可能性のあるテフラが認められなかったのは、テフラ降灰後に山原ローム層が剝離または覆乱を受けた可能性がある。

山原ローム層から宝木ローム層の重鉱物組成は、これまでに阿久津（1957）や関東ローム研究グループ（1965）による分析例がある。関東ローム研究グループ（1965）では、山原ローム層では斜方輝石が多く、他に磁鉄鉱、単斜輝石、少量の角閃石、カンラン石を含み、宝木ローム層のAg-KPより上位では、角閃石を比較的多量に含み、少量のカンラン石を含むとされている。さらに当社の分析例により、角閃石が暗色帯上部付近すなわち宝木ローム層最上部付近において下位に向かって増加すること、ATの降灰層準のやや下位にカンラン石の極大、さらにやや下位に輝石の極小や角閃石の極大が認められることなどが指標になっている。

本道跡周辺では土浦市内での分析例がある。それによると、カンラン石の量比はいずれの層準においてもやや高く、その極大層準はATの降灰層準のやや下位とさらにその下位の2層準において認められている。また、角閃石の量比は比較的低く、ATの降灰層準以下で少量から微量認められるが明瞭な極大・極小は認められない。

これらの重鉱物分析例と本地点におけるその層位的変化の特徴は、必ずしも一致はしないがほぼ類似している。したがって、本地点の2層～4層は、栃木県～茨城県北部の宝木ローム層上部～中部にほぼ対比される。以上の重鉱物組成による層序対比の結果は、ATの産状による層序対比の結果とほぼ一致する。

以上のことにより、本道跡の2層下部から検出されたユニットは、古くともAg-KP降灰すなわち約3.1～3.2万年前以降で、新しくともAT降灰すなわち約2.1～2.5万年前以前のものと考えられる。

ローム層（ここではいわゆる関東ローム層のような細粒の火山砕屑物を母材とする土壌をさすものとして用いる）の成因については、従来は小噴火による降下火山灰の累積したものと（たとえば町田（1964）など）とする説が主に指示されてきた。これに対して、いったん堆積した火山灰が風によって移動させられて累積したものとする説も主張されるようになってきている。この説は、中村（1970）により提示され、早川（1986）、早川・由井（1989）、早川（1990）、早川（1995）などにおいて火山学および火山灰編年学上の種々の観察事実を根拠として述べられている。この説に従えば、ローム層も黒ボク土層も火山の噴火とは関係なく常に降りつる風塵によって形成されたことになる。さらに、過去5万年間に堆積した火山灰土が層厚1mを上回る地域では、ローム層は広域テフラや小規模な噴火により降下堆積したテフラがそのまま保存されたものと上述の二次堆積したテフラとが混在するが、場所によりその構成物の割合は変化すると述べられている（鈴木，1995）。すなわち、

ロームの形成にはテフラの一次堆積も大きく関与しており、風塵やテフラに由来する火山砕屑物が土層中に拡散し、それらが土壤生成作用を受けながら少しずつ累積することにより、ローム層が形成されているということになる。以上のことは、本分析結果におけるATの産状にもよくあらわれている。

また、ローム層の鉱物組成にはローム層の母材となった火山噴出物の鉱物組成が反映されており、それは地域的に、また時期的にも類似すると考えられる。したがって、武蔵野台地や栃木県～茨城県北部程度の広がりをもった地域内では鉱物組成の層的变化を調べることににより、対比の指標が導き出され、層序対比が可能となっている。

ローム層中の暗色帯については、黒部（1963）の研究をはじめとする分析例などから腐植の集積が他の層位よりも高いことがわかっている。腐植の集積には、周辺植生以外に気候、地形、風塵の堆積速度、粒径や砕屑物の種類などの堆積母材の性状、堆積後の経過時間などの様々な要因が関連すると考えられる。本地点で栃木県～茨城県北部の宝木ローム層最上部で認められることが多い暗色帯が明瞭ではなかったのは、上述のような暗色帯の形成条件が本地点ではやや異なっていたことを示唆する。

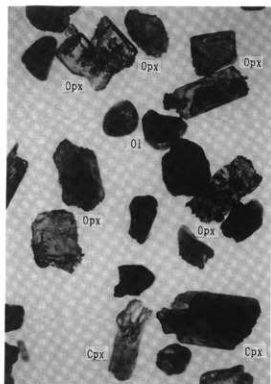
#### 〈引用文献〉

- 阿久津 純（1957）宇都宮付近の関東ローム層。地球科学，33，p. 1-11.
- 阿久津 純（1986）3.4 関東平野北部の更新統(7)鬼怒川流域。「日本の地質3 関東地方」，p. 185-187，共立出版
- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編，10，4，p. 1-79.
- 早川由紀夫（1986）火山灰土の成因と堆積速度。1986年度春季大会日本火山学会講演予稿集，p. 34.
- 早川由紀夫（1990）堆積物から知る過去の火山噴火。火山第2集，34，火山学の基礎研究特集号，p. S121-S130.
- 早川由紀夫（1995）日本に広く分布するローム層の特徴とその成因。火山，40，p. 177-190.
- 早川由紀夫・由井将雄（1989）草津白根火山の噴火史。第四紀研究，28，p. 1-17.
- 早津賢治（1988）テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー-ATにまつわる議論に關係して-。考古学研究，34，p. 18-32.
- 関東ローム研究グループ（1965）関東ローム-その起源と性状-。378p.，築地書館。
- 菊地隆男（1981）常総粘土層の堆積環境。地質学論集，20，p. 129-145.
- 小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦（1967）御岳火山第一浮石層-御岳火山第一浮石層の研究その1-地質学雑誌，73，p. 291-308.
- 小玉喜三郎・堀口方吉・鈴木尉元・三梨 昂（1981）更新世後期における関東平野の地塊状造盆地運動。地質学論集，20，p. 113-128.
- 黒部 隆（1963）立川ローム層の腐植に関する生成学的研究（第1・第2報）。日本土壤肥科学雑誌，34，p. 182-184，203-204.
- 町田 洋（1964）Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史-第四紀末期について-（その1）（その2）。地学雑誌，73，p. 293，308，337-350.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-。科学，46，p. 339-347.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。276p.，東京大学出版会。

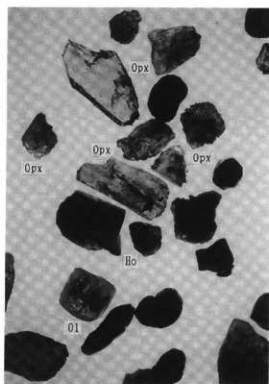
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—. 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p. 865 - 928.
- 宮崎一博・笹田政克・古岡敏和 (1996) 真壁地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 103p., 地質調査所.
- 中村一明 (1970) ローム層の堆積と噴火活動. 軽石学雑誌, 3, p. 1 - 7.
- 坂本 亨 (1986) 3.4 関東平野北部の更新統(9)常陸台地. 「日本の地質3 関東地方」, p. 189 - 190, 共立出版.
- 須藤 茂・山崎正男 (1980) 男体火山活動期における斜め噴火と異種のマグマの連続噴出. 火山, 25, p. 75 - 87.
- 鈴木正章・山路 進・二宮修治・大沢真澄・遠藤邦彦 (1987) 立川ローム層最上部UG火山灰の微量成分元素存在量とその給源火山. 第四紀学会講演要旨, 17, p. 112 - 113.
- 鈴木毅彦 (1995) いわゆる火山灰土(ローム)の成因に関する一考察 —中部—関東に分布する火山灰土の層厚分布—. 火山, 40, p. 167 - 176.
- 山崎晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, p. 231 - 246.



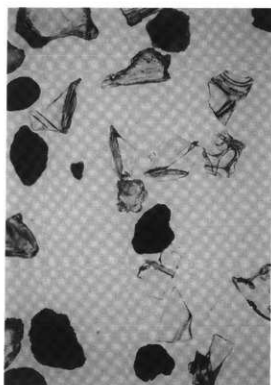
図版1 重鉱物・火山ガラス



1. 重鉱物 (試料番号 2)



2. 重鉱物 (試料番号 10)

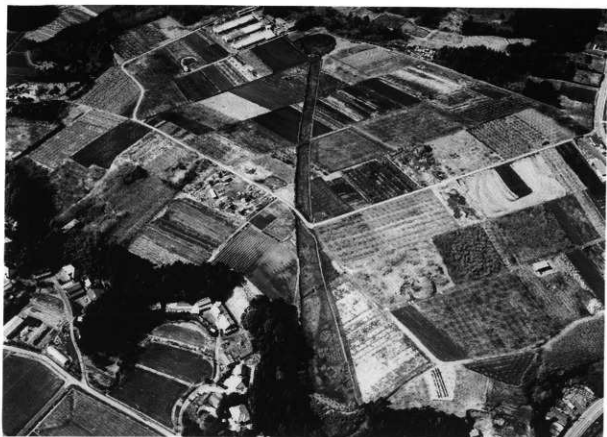


3. AT火山ガラス (試料番号 1)

0.5mm

Ol : カンラン石, Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石, Ho : 角閃石

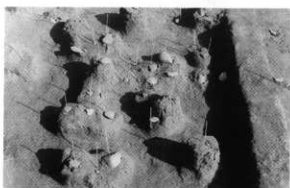
# 写 真 图 版



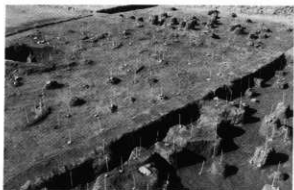
半田原遺跡全景



第1号石器集中地点遺物出土状況



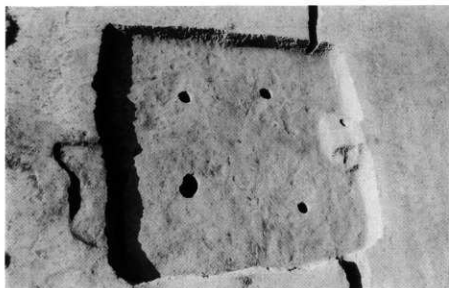
第1号石器集中地点遺物出土状況



第2号石器集中地点遺物出土状況



第3号石器集中地点遺物出土状況



第4号住居跡完掘



第5号住居跡完掘



第13・14・15号  
住居跡完掘

第1号住居跡完掘

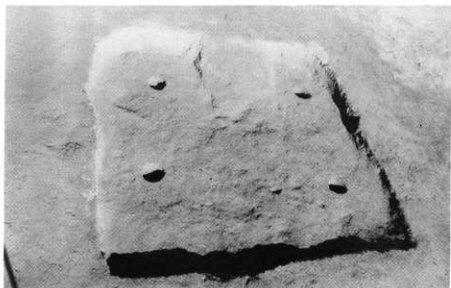


第2号住居跡完掘



第8号住居跡  
遺物出土状況





第9号住居跡完掘



第10号住居跡完掘

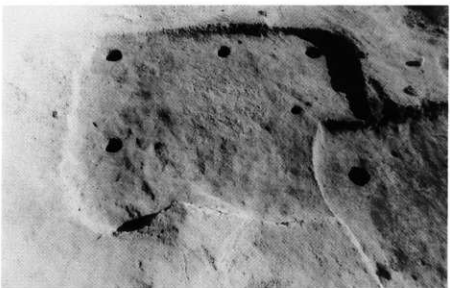


第11号住居跡完掘

第12号住居跡完掘

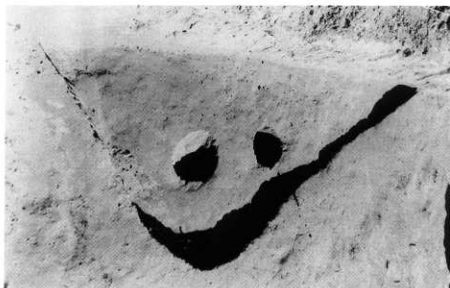


第16号住居跡完掘



第16号住居跡室内  
遺物出土状況





第17号住居跡完掘



第22号住居跡完掘



第22号住居跡  
遺物出土状況



第23号住居跡完掘

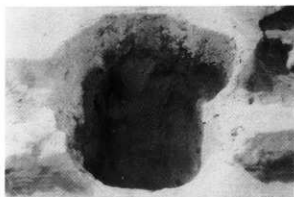


第24号住居跡完掘



第25号住居跡完掘





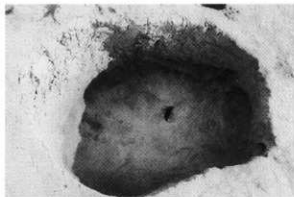
第1号土坑完掘



第2号土坑完掘



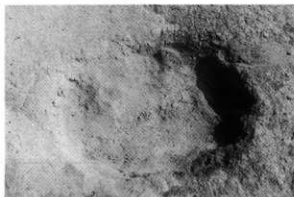
第7·8号土坑人骨出土状况



第9号土坑完掘



第10号土坑人骨出土状况



第11号土坑完掘



第12号土坑完掘



第13号土坑人骨出土状况



第14号土坑人骨出土状况



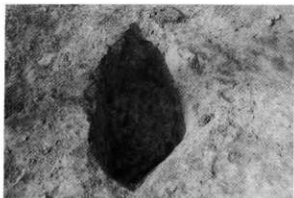
第15号土坑人骨出土状况



第16号土坑完掘



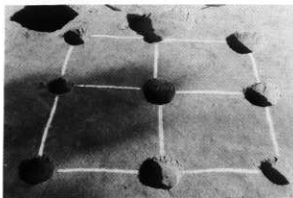
第27号土坑遗物出土状况



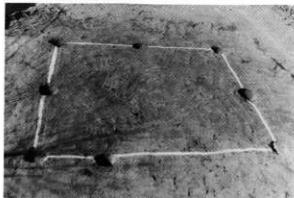
第35号土坑完掘



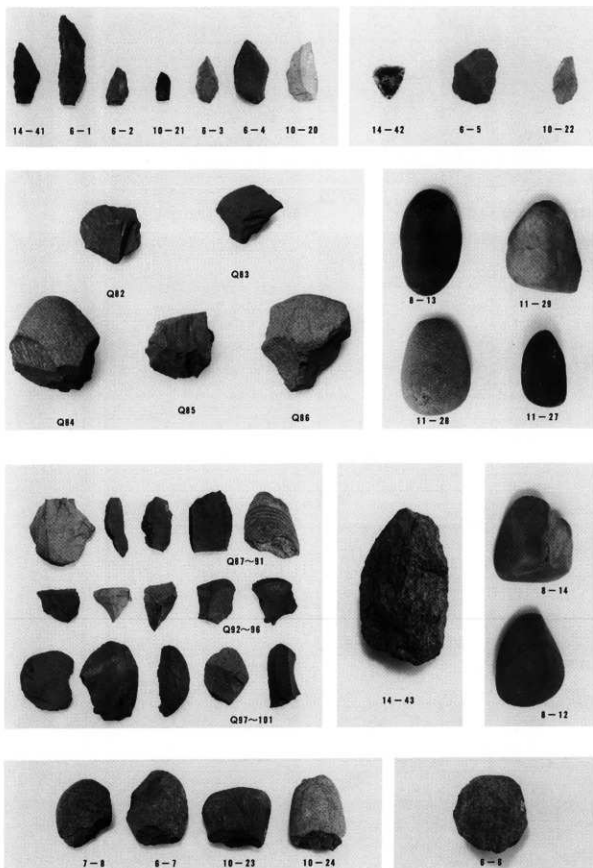
第96号土坑完掘



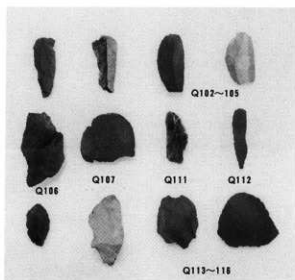
第1号掘立柱建物跡完掘



第2号掘立柱建物跡完掘

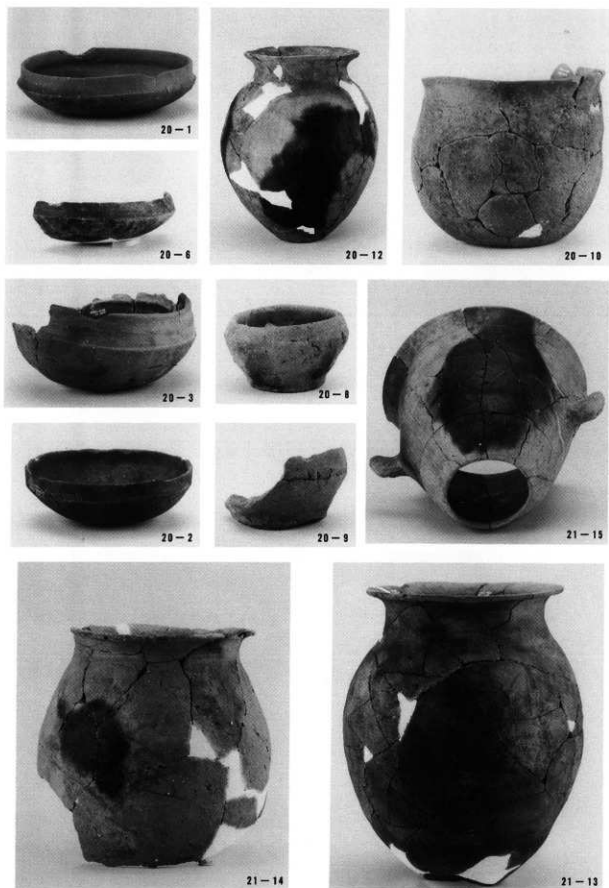


第1・2・3号石器集中地点出土遺物

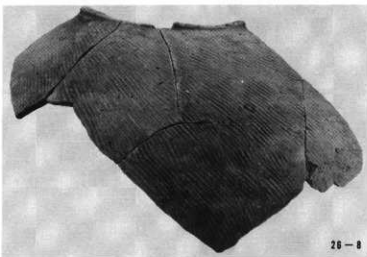


第1・2・3号石器集中地点出土遺物

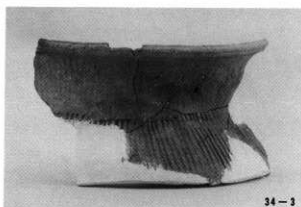
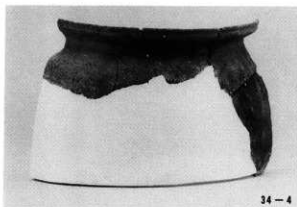
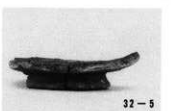


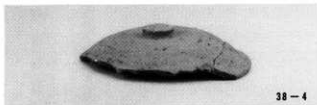
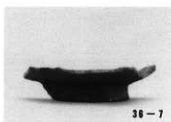


第5号住居跡出土遺物









第 8・9 号住居跡出土遺物



46-1



40-1



42-3



40-2



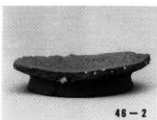
44-2



44-5



46-5



46-2



46-6



44-1



47-1



49-2



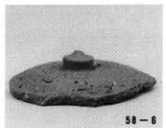
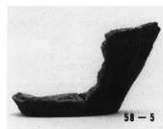
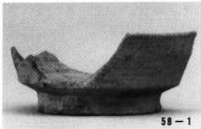
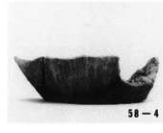
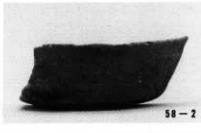
47-2

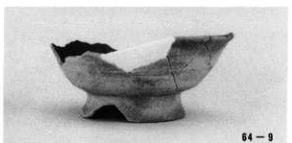
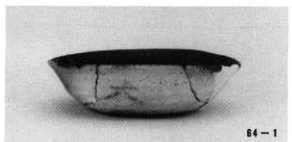
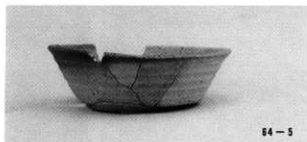


47-5

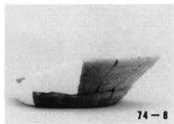
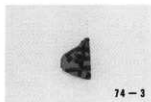
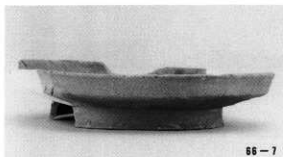
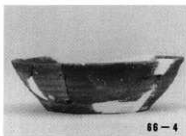


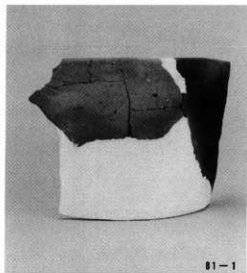
49-1

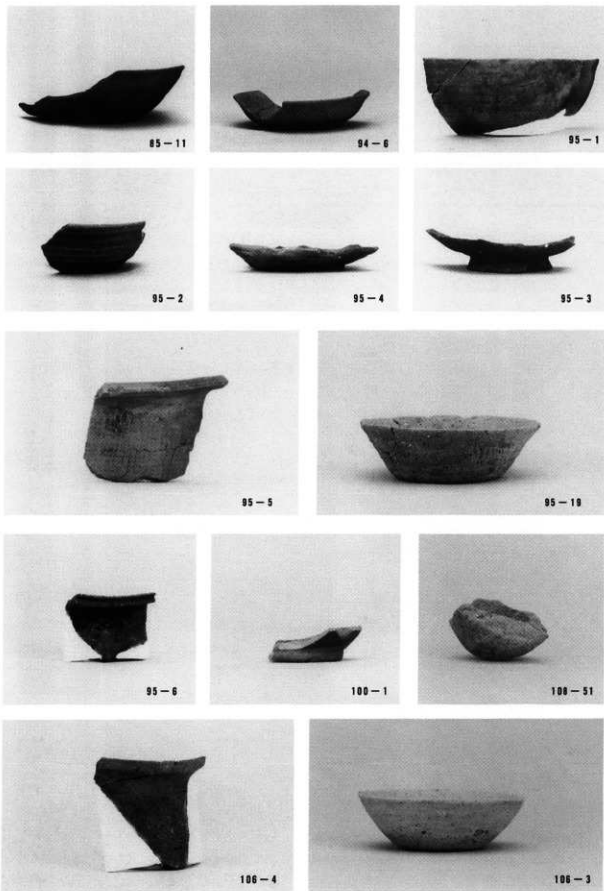




第22・23・24号住居跡出土遺物

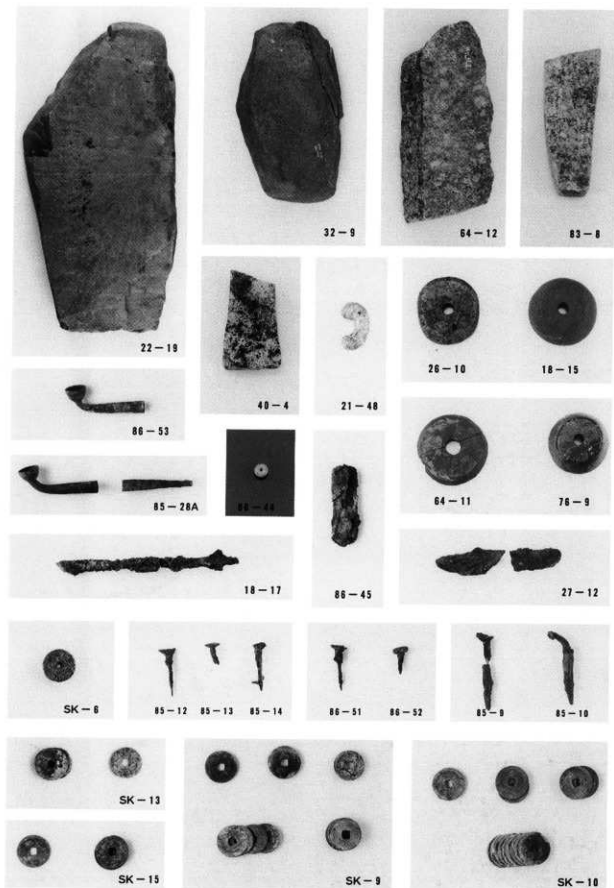






第 8・16・27・96号土坑・第 1号道路跡・第 2号不明遺構・遺構外出土遺物





第1・4・5・6・10・24・31・36号住居跡・第6・7・9・10・12・13・14・15号土壇出土遺物

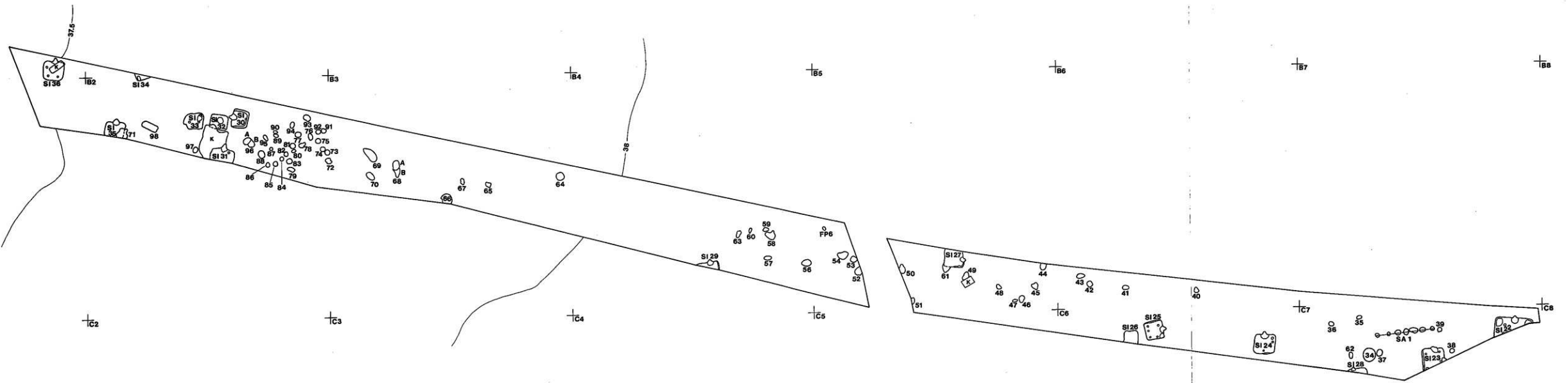
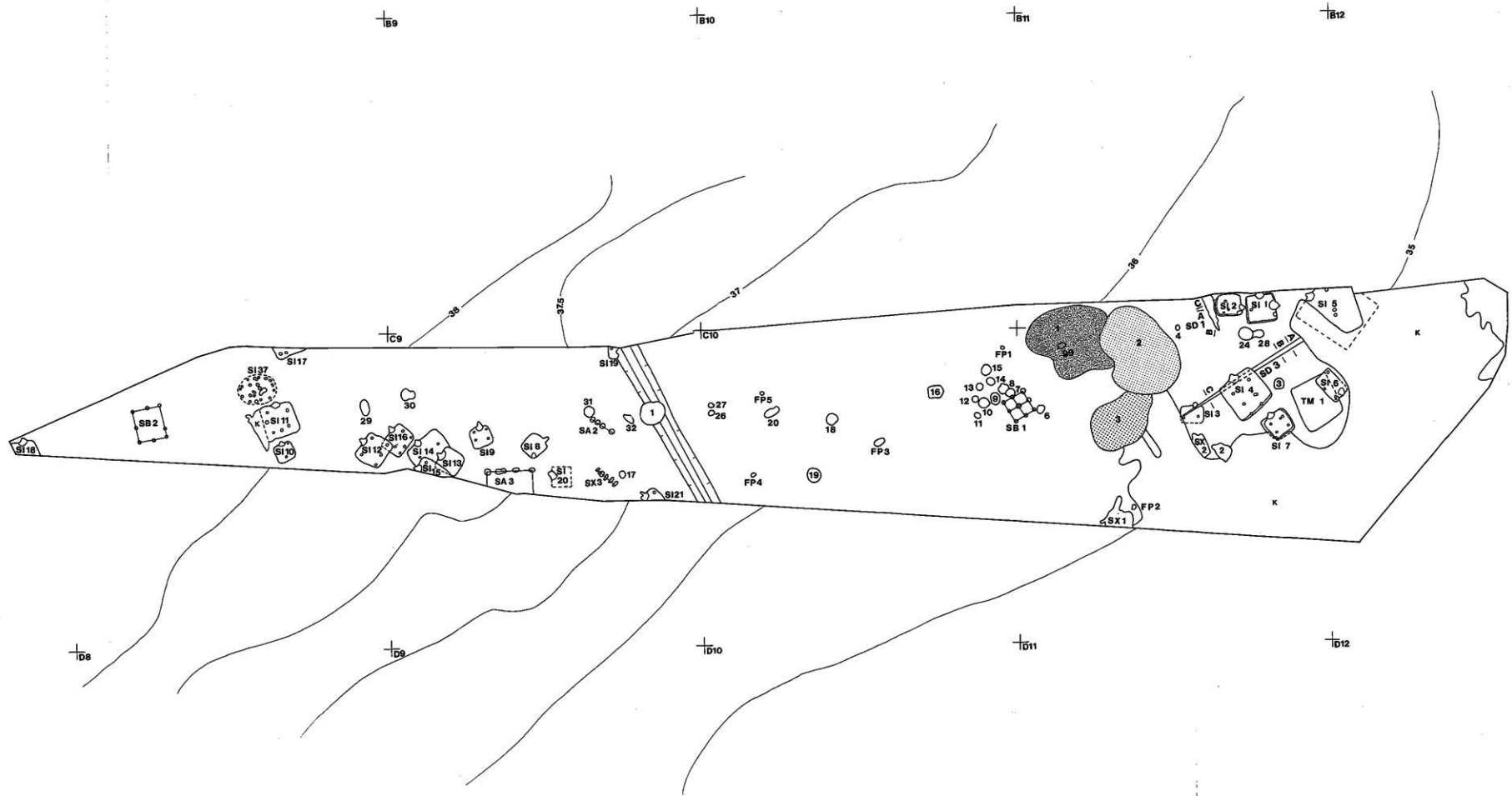
茨城県教育財団文化財調査報告第122集  
一般県道石岡つくば線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

半田原遺跡

平成9(1997)年3月19日 印刷  
平成9(1997)年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市見和1丁目356番地2号  
TEL 029-225-6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社  
TEL 029-221-4381



半田原遺跡遺構配置図